

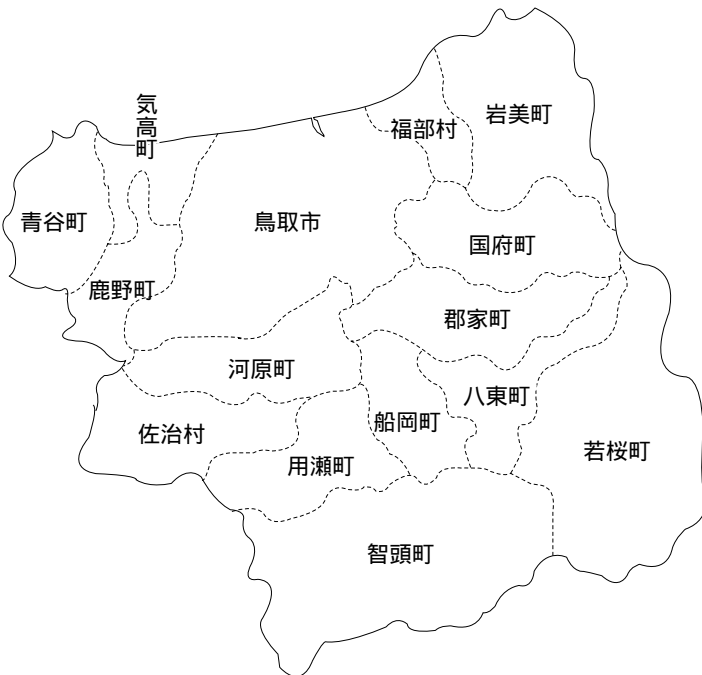
東部



石谷家住宅（智頭町）



観音院庭園（鳥取市）



- 鳥取市
- 国府町
- 岩美町
- 福部村
- 郡家町
- 船岡町
- 河原町
- 八東町
- 若桜町
- 用瀬町
- 佐治村
- 八東町
- 智頭町
- 青谷町
- 鹿野町
- 気高町

千代川

日野川・天神川と並ぶ鳥取県の三大河川の一つで、県東部を北流し日本海に注ぐ。流路延長は約五七キロメートル、流域面積は一、一九〇平方キロメートルである。流路延長は日野川につき、流域面積は最も広く、鳥取県の全面積の約三分の一を占める。岡山県との県境に近い、中国山地の沖の山（標高一、三二八メートル）に源流をもち、途中多くの支流を集めて流下する。山間盆地状に開いた支流との合流点には、上流側から智頭、用瀬、河原の町並みが立地している。河原町より下流は鳥取平野となり、鳥取市内を貫流して賀露の河口から日本海に流出する。

千代川の本流流路が南北方向をとるのに対して、支流は東西南方向のものが多い。例えば、流路延長三二・五キロメートルと最長の支流である八東川は東方に、二一・五キロの佐治川は西方へ延び、千代川全体の流域範囲を東西に押し広げている。そのため流域範囲は上流に向かって開いた扇状となり、降雨が集中し下流域では洪水が発生しやすい。

千代川の本流流路が南北方向をとるのに対して、支流は東西南方向のものが多い。例えば、流路延長三二・五キロメートルと最長の支流である八東川は東方に、二一・五キロの佐治川は西方へ延び、千代川全体の流域範囲を東西に押し広げている。そのため流域範囲は上流に向かって開いた扇状となり、降雨が集中し下流域では洪水が発生しやすい。

〔鳥取砂丘と周辺〕

千代川の氾濫によって形成された鳥取平野には、たえず変転した千代川の流路の痕跡が残されていて、こうした旧河道には伏流水も多く、鳥取市叶地区では市内の上水道原水として取水されている。

鳥取砂丘

《分布の範囲》

千代川河口に発達する鳥取平野の海岸部に東西一六キロメートル、南北二キロメートルにわたって広がる海岸砂丘の総称である。西から末恒砂丘、湖山砂丘と続き、千代川の河口から東の浜坂付近までの範囲を狭義の鳥取砂丘と呼び、その東は福部砂丘である。鳥取砂丘は明治・大正期までは浜坂砂丘と呼ばれていたところで、現在その一部である一四六・二ヘクタールが国の天然記念物に指定され、その中心部の一三二ヘクタールが特別保護地区に指定されている。

《砂丘の成因》

日本海から海岸にうち寄せられた

砂粒が離水し、風によって内陸側に運搬され堆積してできたものである。砂粒の供給源は千代川上流の花崗岩質岩石に由来する石英を主とする砂や、過去に堆積した砂質の堆積物が浸食されて再び漂流して海岸にうち寄せられた砂（砂粒の粒径は一・二ミリから一・四ミリ程度である）が、冬、日本海をわたる強い北西の季節風に運搬されてきた。

砂丘は文字通り風成の「砂の丘」であって、水成の砂州や浜堤とは区別される。

《地形》

固結していない砂丘は、風が吹くとその強さと方向により、また、砂の粒径や形、量などの性質により絶えず形を変える。風向に直行してできる砂丘を横列砂丘と呼ぶ。鳥取砂丘では海岸線にほぼ並行して横列砂丘が発達し、三列の砂丘列を作っている。砂丘列は海岸線から奥になるほど先にできたもので、砂丘を海岸側に残しながら発達するので、一般に海面が低下する時期にできる。

砂丘列の高さは数メートルから数十メートルに達するものまであり、風上側では急角度に、風下側では低



角度になる、風向きに並行してできる縦列砂丘と呼ばれるものは風向が強いときに形成されがちである。鳥取砂丘では明瞭な横列砂丘が二列見られ、二列目は馬の背と呼ばれており、高さ三〇メートル以上に達し、観光客が最も多く集まるところである。三列目の砂丘列は不明瞭で丘陵状に発達している。砂丘列の間にある丘間低地は水が集まりやすく、鳥取砂丘では湧水が見られる。季節によつては池になるのでオアシスと呼ばれている。砂丘が風でえぐられ、スリパチ状にくぼんだ地形を鳥取地方ではスリパチと呼んでいる。バルハンとよばれる砂丘風下に行ける三

日月状の凹地形に似ている。

風によつて砂丘の表面に幅が数センチ、高さが一センチ程度、長さが数メートルの、規則的な峰と谷が作る微地形を鳥取砂丘では「風紋」と言い表している。この「風紋」の用語は鳥取砂丘に関連して使い始められたと思われる。砂丘がつくる微地形には、このほかにも砂簾、砂柱がある。

《地質》

鳥取砂丘は形成の時期により、古砂丘と新砂丘に分けられる。これは両者の間に挟在する火山灰によつて証明される。この火山灰は約五万年前の大山火山のもので、これが古砂丘を覆っている。よつて古砂丘は新世に形成されたと考えられる。その上には始良火山灰層（約二万年前）があり、新砂丘を覆う。新砂丘は完新世のものである。

なお、新砂丘は腐植物を含んだ黒色のクロスナを挟んでいる。クロスナはイネ科の植物珪酸体を含んでおり、草原化したことを示す。

《砂丘利用の歴史》

鳥取砂丘では、浜坂で発見された

尖頭器が時代は不明であるが最も古い人類遺物といわれている。長者が庭、追後スリパチ付近、オアシス付近で石器や土器片が多数出土した。縄文時代の遺物らしいものもあるが、確かなものは弥生時代以降中世までの遺構や遺物である。また、クロスナ中には、石器の半製品が出土していることから、草原化した当時の砂丘が生活に快適な場所であったことがわかる。なお、直浪遺跡は縄文時代から古墳時代までの複合遺跡である。

《砂丘研究史》

日本の砂丘の研究は鳥取砂丘で始まった。鳥取県出身の徳田貞一が大正六年（一九一七）に「バルハンとスリパチ」を発表し、その中で砂丘の土地利用を考えている。飛砂を防ぐための植林、砂地に適した作物の栽培や灌漑の研究などである。大正十二年（一九二三）鳥取大学の前身、鳥取高等農林学校に湖山砂丘試験地が付設され、後に浜坂に移り鳥取大学農学部を引き継がれた。地形や地質の研究も並行して進められ、砂丘の気象研究も始まった。スプリングラーの導入、らつきょうやながいも

などの栽培法が研究され、現在、これらは砂丘地の特産物となっている。

また、乾燥地研究センターに併設された実験施設アリドームでは、先進的な研究が進められ、世界の乾燥地研究の拠点施設となっている。

《砂丘の動物》

一見すると砂丘には動物が生息しないようであるが、詳細に観察すると砂丘で生育するもので最も多いのが昆虫である。つぎにクモが多く、いずれも体の色は砂色で体に毛が多い。砂丘や砂中で生活するのによく適応した色、形となっている。ヤマトマダラバツタやハマスズも同様である。また、イソコモリグモも暑さを避ける数十センチの穴を掘り、糸で内壁を崩れないようにしたり、獲物の通行を感知する糸を砂上に広げたりする。なかでもアリジゴクを作るハマウスバカゲロウは全国的にも珍しい存在である。

《砂丘の植物》

砂丘は生きている。常に動いている。砂丘の植物は風に吹き飛ばされないようにするため、早く湿つた砂丘の層にまで発根しようとする。砂

がとられて根が浮くか、反対に植物に砂がかぶるといった環境の中で、砂丘に適応した独特の植物（砂丘植物）が生育する。

また、大きな砂丘には、あちこちに植物がまったく生育しない所と、群落のある所とがある。海岸に近い所にはハマボウフウ（浜防風）が多い。

俗にボウフウともいう。ハマボウフウが正確な名称でセリに似たセリ科植物である。早春の若芽が食される。ゆでて酢味噌で食べるのが普通で、春から夏にかけて県内の旅館、料理屋などで供される。茎は白く、

独特の香味がある。栽培することもできる。砂が動くところには植物は育ちにくい、コウボウムギはこのような所にも適応し生育する。鳥取砂丘には、代表的砂丘植物といってよいくらいのコウボウムギの大きな群落があり、研究価値がある。

一般に砂丘植物は、根がよく広がるもの、根の深いもの、根が極端に太いもの、反対に極端に細くて多いもの、葉の厚いもの、葉の表面が非常に光沢があり水の蒸発を防いだり、光を反射したりするものがある。

ハマゴウ・ハイネズのような平伏した木本植物もあるが一般的に草本

が多い。ハマベノギクは枝が四方に平伏し、ネコノシタは砂丘を匍伏し、ハマニガナは砂中を横に這い、茎は地下に伸びる、スナビキソウは直根太く砂中にはいり、コウボウムギ・ピロウドテンツキ・ケカモノハシ・オニシバ・ハタガヤなどの渉草は多くのヒゲ根を張り出している。

また、ピロウドテンツキ・カワラヨモギ・ハマゴウのように、細毛を密生して、水分の蒸発を防ぐための構造を持つものなど、砂丘に適応した形態や特性をもっている。

鳥取大学乾燥地研究センター

鳥取市浜坂
J R鳥取駅よりバス
二十五分、浜坂小学校
入口下車、徒歩十五分

鳥取大学乾燥地研究センターは、乾燥地における砂漠化の防止、農業開発に関する研究を行うための全国共同利用施設として、平成二年（一九九〇）六月に設立された。

鳥取大学の砂丘地農業研究は、大正二年（一九一三）、前身である鳥取高等農学校から始まり、昭和三十三年（一九五八）には鳥取大学農学部附属砂丘利用研究施設が設置された。以後、全国でただ一つの砂丘専門の研究機関として、我が国の砂丘地と乾燥地の農業開発において先駆

的な役割を担ってきた。

共用施設に改組されてからは、国内外からの多くの大学院生や研究者が共同研究などに取り組んでいる。

平成十年（一九九八）には、球形の実験施設アリドドームが設置された。ここでは、世界の研究施設とネットワークを結び、現地情報に基づいて乾燥地のシミュレーション実験などを行うことができる。

近年、このアリドドームは年数回公開され、多くの人が乾燥地研究や乾燥地について情報を得るところとなっている。

問合せ先 ☎ 0857・23・3411



鳥取砂丘と文学

東西一六キロメートル、南北二キロメートルにおよぶ鳥取砂丘は自然が造りだした広大な砂の芸術作品である。風紋や砂廉の紋様は、風と砂とが織りなす神秘の世界である。

多くの文学者がここを訪れ、感性を刺激されながらそれぞれの砂丘を見出した。市道浜坂二号線沿いにはいくつかの碑が点在し、砂丘文学碑コースと呼ばれている。

「月荒き砂丘は古邑うつむとや」

森川曉水（一九〇一～一九七六）

の句碑。昭和十二年（一九三七）秋に砂丘を歩いたときの作品である。この句碑は、昭和四十四年（一九六九）に建立された。

「秋風や浜坂砂丘少し行く」

昭和七年秋、鳥根県で開かれた山陰俳句大会に出席した高浜虚子（一八七四～一九五九）の一行は、地元たかはまきこの結社・野火吟社に招かれ鳥取砂丘を訪れている。そのときに虚子が詠んだ句。句碑は昭和三十九年（一九六四）十月に建立された。



「砂丘を幾つ越えしが波音の
真近く聞えて海まだ見えす」
この歌は、鳥取市で歌誌「情脈」
を創刊、全国的に活動を展開した枝
野登代秋（一九〇四〜一九六八）の
作である。歌碑は、情脈三〇〇号記
念として昭和三十三年（一九五八）
に建てられた。

「浜坂の遠き砂丘の中にして
さびしき我を見出でけるかも」
作家、有島武郎（一八七八〜一九
二三）は、大正十二年四月、砂丘に
遊び、砂の広がりに向き合い、「さ
びしき我」を見つけたのだらう。有
島は、この一月後、愛人と情死し

ている。歌碑は、昭和三十四年（一
九五九）に建立された。碑は武郎の
妹・山本愛子の揮毫による。なお、
この歌によって、「砂丘」の名称が
広く知られることになった。

道をしばらく歩き、浜坂の集落が
見えはじめる所に「武郎・晶子佗涙
の地」と書かれた碑がある。

この碑は平成三年（一九九一）に
建立されたもの。昭和五年（一九三
〇）に鳥取砂丘を訪れた与謝野晶子
（一八七八〜一九四二）が武郎をし
のんで詠んだ歌が有島の歌と並んで
刻まれている。

「沙丘踏みさびしき夢に与かれる
われと覚えて涙流るる」
（与謝野晶子）

「浜坂の遠き砂丘の中にして
侘しき我を見出でつるかな」
（有島武郎）

有島の下旬は、昭和三十四年に建
立されたものと異なっている。碑の
建立に関わった人によると、この歌
は色紙に書かれた武郎の直筆を見て
彫ったという。

多鯰ヶ池

鳥取市浜坂
JR鳥取駅よりバス二十五分、砂丘
北口下車、徒歩五分

鳥取市浜坂と岩美郡福部村湯山に
またがり、浸食谷の北側を鳥取砂丘
によって堰止められた堰止湖であ
る。平均水深七メートル、最大水深
一四メートルである。湖水面積は約
〇・二三平方キロメートル、湖岸の
延長は三・一キロメートルある。池
内には小島、沖の御前島がある。減
水時には磯の御前島が姿を現す。大
島（弁天島）は古図では島で示され
ているが、激しい飛砂により明治時
代に陸続きになった。

池の周辺の地質は第三紀中新世に
形成された凝灰角礫岩とその上を覆
う玄武岩溶岩で構成される。北岸に
は古砂丘とそれを覆う火山灰層、さ
らにその上に新砂丘砂が分布してい
る。多鯰ヶ池に流入する表流水はな
く、減水期と増水期の水位変化は二
メートル前後である。PH（八七年
八月）六・九〜七・二、透明度は三
メートル前後である。池は西の古盆
と東の古盆に分けられ、深度、湖沼
の栄養型などに違いがある。

湖水は宿院義殿によって拓かれた
樋門により湯山に流し、農業用とし

て利用されている。池にはツルヨシ、
シャジクモなどの植物、タガイ、ド
ブガイ、ヌマカイメン、ブラックバ
ス、ヤリタナゴなどの動物が生息し
ている。冬にはコガモ、マガモ、タ
ゲリなどが飛来する。

多鯰ヶ池には蛇の伝説があり、近
年、蛇を祭神とする弁天さまが設け
られた。山陰海岸国立公園内にあり、
砂丘と一体化した景観保全が望まれ
る。

伝説

昔、庄屋の家で美しい娘・お
種が働いていた。ある冬の夜、
人々が雑談で「さて何か甘いも
のが食べたいな」というと、お
種はどこからかおいしい柿を取
ってきて食べさせた。不思議に
思った三人の若者が、夜、後を
つけたところ、お種は多鯰ヶ池
に来て飛ぶように蛇となつて池
を渡り、池の中の島にある柿の
木に登って取った。それを見た
若者たちは驚いて逃げ帰った。
お種は本当の姿を見られたた
め、池に沈んでしまったという。

県立鳥取砂丘 こども国

鳥取市浜坂
JR鳥取駅より車で約十五分

鳥取砂丘こども国は、子どもたちに太陽の光のもと健康的な遊びを与え、子どもたちの創意工夫や豊かな情操を育むことを目的として、昭和四十八年（一九七三）五月に山陰海岸国立公園鳥取砂丘内に開園した。現在の施設は、平成十二年（二〇〇〇）三月にリニューアルオープンしたもので、「遊び、ふれあい、発見、創造」をテーマに、一九ヘクタールの敷地には、さまざまな遊具やレールトレインなどの乗り物、雨や雪の日でも遊ぶことのできる広場や工房、バードケージが設けられている。休日には家族連れで賑わっている。

開園時間 午前九時～午後五時
休園日 第三水曜日（休日の場合はその翌日）、年末年始
問合せ先 ☎0857・24・2811

鳥取市

鳥取市街地

鳥取市街地は久松山（標高二六四メートル）を扇の要として、千代川に向かって開いている。扇の先端では商工業団地や住宅地の整備が進み、郊外店舗の進出も著しい。

一方、久松山山麓には鳥取城跡や鳥取県庁があり、袋川にかけて旧市街は整然とした城下町の町割が残る。桜並木の美しい袋川を越えると、新市街地はJR線から千代川を横切り放射状に伸びている。

さらに千代川を下れば松葉がに有名な賀露港に至る。日本海を東にれば鳥取砂丘を経て浦富海岸と続く山陰海岸国立公園となる。西には神話のふる里である白兔海岸、夕日の美しい湖山地さらに南にはホテルの飛来する吉岡温泉と、市域に多くの観光地を持つ。また、JR鳥取駅近くの市街地に、温泉場を持つことも魅力的である。

久松公園の城跡に登ると市街地が一望に見渡せる。手前に仁風閣、左

手の久松山から続く山裾は、興禅寺、樗谿公園さらに観音院と名所旧跡が続く。鳥取城跡周辺から伸びる若桜街道、智頭街道、鹿野街道は、江戸時代の初から城下町の骨格を形成し、今もなお各街道が市内の幹線道として生きている。

県庁前から裁判所へ通じる国道五三号筋はかつて大名小路と呼ばれ、家老はじめ役職の武家屋敷が並んでいた。新蔵通りを越えて、「わらべ館」を過ぎ、追廻し通りを越えた辺りまでが元の武家屋敷街である。今、およそその地割りをたどることができるが、町並みは残っていない。県庁前の県立図書館に箕浦家の長屋門が移築されており、往時をしのばせる。最近、馬場町にある岡崎平内（五百石取り）の屋敷で、武家屋敷の母屋が残っていることが発見された。

追廻し通りと片原通りの間に、久松山に対して少し湾曲した細い通りがある。この筋がもともとの袋川である。関ヶ原の戦い（一六〇〇年）の後、池田長吉（六万石）の治世の時に作られた城下町では、武家屋敷も町屋もこの位置から久松公園の間にあった。これは今の東町・西町に当たる。元和三年、池田光政（三三



万石）が転封され、城下町の拡張が始まったとき、袋川が現在の位置に付け替えられたのである。新たに城下町となった袋川までの範囲は、三街道を挟んで縦四〇間・横幅六〇間を一町とする整然とした町割がなされ、大工町、鍛冶町、桶屋町などの町名を今に残している。袋川には若桜橋、智頭橋、鹿野橋、鑄物師橋さらに出合橋の五橋が架けられ、その位置は現在も同じである。なお、寛永九年（一六三二）、池田光仲の入封後も、幕末まで町並みに大きな変更はない。鳥取城下の町数四八町（実際には享保年間より四九町）と呼びならされてきた。

付け替えられた袋川は幅七間、深さ三間半の運河となり、通船は賀露港から千代川をさかのぼり袋川で城下に横付けされた。昭和九年（一九三四）になって、治水対策から袋川を市街地の東部から千代川に直行させる大改修が行われ、袋川の通船は終わった。袋川を渡り、智頭街道を瓦町と今町の境まで来ると、道路はロータリー交差に出会う。明治の最初に造られたロータリーから、当時のハイカラな都市計画の考え方がうかがうことができる。

その後、鉄道の敷設により、鳥取駅が現在の位置に設けられた。その結果、新しい市街地は瓦町のロータリーと駅前広場という二つの中心を持つ構造となって、網目状の街区を形成した。

本格的な戦災を免れたものの、鳥取市は昭和十八年（一九四三）の大地震と昭和二十七年（一九五二）の大火災という二度の壊滅的な打撃を受けた。智頭街道と二階町通りの交差点に建つ「五臓円ビル」は、度重なる大災害も耐え残った。また、市内の方々にある公園は、災害復興を機に設けられたものが多い。

現在、市のランドマークとも言え

る鳥取城の復元に向けた運動も活発である。今後とも広域的な観光の拠点として、鳥取市の役割はますます高まるものと期待される。

〔久松山と周辺〕

久松山

JR鳥取駅よりバス五分、県庁日赤前下車、徒歩七分（登山口まで）

久松山は鳥取市東北方にあり、戦国時代には鳥取城がこの山に位置し、江戸時代には鳥取藩主・池田家の居城となっていた。現在は、山麓に久松公園があり、鳥取城跡は国の史跡に指定されている。山頂の標高は二六三・一メートルで、市内を一望でき、鳥取市のシンボリックな山となっている。

久松山は、一見孤立峰のように見えるが、山体のほとんどは中生代白亜紀末から新生代古第三紀に活動した花崗岩類からできており、岩体は地中深くつながっている。石英斑岩、花崗斑岩、文象花崗岩類からなり、それらが長い年月をかけ、地下深くにあった岩体が地表に現れたものである。山頂は鮮新世火山岩類の玄武岩に覆われている。

久松山を含めた周囲の山塊は、主

尾根が北西方向に延び、南が高く北側が低くなっている。斜面は北東側が緩やかで南西側が急になっており、湯所の雁金山の斜面は急になっている。鳥取市西方から見ると台形のように見え、北方の鳥取砂丘側から見ると急傾斜で直立して見える。また、栗谷、水道谷、橋谿の谷が平行して北東方向に延びている。

久松山山塊には花崗岩や鮮新世火山岩類の他に、古第三紀の火山岩類や新生代第三紀の凝灰岩類が分布している。特に久松山北方山麓の円護寺石とよばれる凝灰岩は有名で、石材として利用されてきた。久松山には長田神社口、久松公園二ノ丸口から上る登山道がある。その他にも、橋谿公園から太閤ケ平を経るコースや円護寺からの登山道もある。

史跡 久松公園

鳥取市東町
JR鳥取駅よりバス五分、
県庁日赤前下車、徒歩七分

久松山の麓にあつて鳥取城跡を中心に仁風閣や県立博物館など見所の多い公園である。お堀端から見ると、白鳥の浮かぶ水堀と何段にも重なる石垣が歴史的な景観を創り出し、鳥取市を訪れる人々にとって印象的な場所となっている。同時に、「お城

山」と呼ばれる久松山への登口であり、春のサクラ、夏の夕涼みと市民にもよく親しまれている。

城跡は旧藩主・池田家の所有であったが、大正から昭和にかけて鳥取市に寄付され公園として整備された。

明治四十年（一九〇七）、時の皇太子（後の大正天皇）が啓行されることになり、当時、池田家の別邸として計画されていた建物（仁風閣）を宿泊所として使用することになった。その後、仁風閣は管理を鳥取市に委託され、鳥取市が各種の式場として利用したほか、近くに動物園や茶店が設けられ、城跡一帯が市民との結びつきを強めていった。家老屋敷の一部を含め約二万坪が鳥取市に寄贈され、大正十二年（一九二三）より久松公園として一般公開された。なお、昭和十九年（一九四四）には、久松山を含め百数十ヘクタールが池田家より市に寄付されている。現在、動物園は市内の別の場所に移され、久松公園は史跡公園として整備されている。

公園内の桜は、ソメイヨシノやサトザクラを含め、その数は四百本を超える。二の丸のソメイヨシノは古

木である。これらの桜が植栽され始めたのは、大正十三年（一九二四）、昭和天皇の御成婚記念と伝えられる。春の開花期には、ぼんぼりが吊され屋台も出て花見客でにぎわう。四月初旬に満開を迎える。なお、公園入口のお堀端には、鳥取气象台による桜の開花宣言の指標となる標準木がある。

麓の二の丸や天球丸といった櫓跡からも、市街地から千代川、さらに湖山池が一望でき、鳥取市に来たときは訪れたい場所である。

史跡 鳥取城跡（二の丸、天球丸、山上の丸、太閤ケ平）
JR鳥取駅よりバス五分、西町下分、徒歩七分

鳥取市北東の丘陵部にある。十六世紀半ばの天文年間より明治維新に至る久松山を中心とした山城。山頂部には中世期の城郭遺構である山上の丸、山麓には慶長年間より明治に至るまでに整備された二の丸、天球丸、三の丸などの遺構を残す。国指定史跡となっている。

天文年間布施天神山城に拠る因幡山名と但馬山名の争乱の中で築城されたらしいが、どちらが築いたのか定かでない。その後尼子、毛利といった西方の大名勢力との拮抗の上で

山名氏の支配が続き、山名豊国の下で鳥取城の砦と城下町の整備、建設が進められた。豊国はその後、羽柴（後の豊臣）秀吉の第一回鳥取城攻撃（一五八〇年）の際、家老の反対を押し切り秀吉に降ったため因幡国人衆により城を追われた。国人衆は毛利方より吉川経家を迎え秀吉勢に抗したが、籠城二百日で降伏、経家は自刃した。久松山麓の武道館前には経家の像が建つ。秀吉は宮部継潤を鳥取城に配したが、その子長熙（長房）は慶長五年（一六〇〇）関ヶ原の合戦で西軍に組したため、城地没収のうえ奥州南部へ流され、城主は池田長吉に替わった。跡を継いだ長幸は元和三年（一六一七）、備中松山に転封となるまで在城した。この間池田長吉、長幸親子により、城郭の大改修、それに伴う内堀の延長、外堀の開削が行われた。また、鳥取城居館も南東方向へ拡張され、新たに二の丸、三の丸、天球丸が築造されるなど近世城郭としての鳥取城及び城下町の基本的な構造はほぼこの時に整えられた。

元和三年、播磨四十二万石の池田光政が幼少の故を以って因伯三十二万石に減封され鳥取に入封した。



光政時代の鳥取城は長吉時代の城郭のままだった。しかし、城下は四十二万石の家臣団が三十二万石の地に移転したため、城地の移転なども検討されたが、結局、元和五年から大拡張が行われた。光政時代に三十二万石の城下町鳥取になったことになる。寛永九年（一六三二）、光政は備前岡山二十八万石に転じ、替わって岡山より池田光仲が三歳で鳥取に封ぜられた。この国替以後、明治四年（一八七二）、廃藩置県に至るまで光仲の系統が鳥取城主として続いた。この間、元禄五年（一六九二）に天守櫓が落雷により炎上し以後再建されなかった。また、享保五年

（一七二〇）には全城が火災で焼失し（石黒火事）、この火災の後再建されなかった建物も多く、政庁も二の丸から三の丸へ移った。幕末に最後の藩主・池田慶徳が入城後、部分的に改変したところもあるが、大筋は池田長幸時代の築城形態を受け継いだ。明治二年（一八六九）の版籍奉還、同四年の廃藩置県後も三の丸の櫓が政庁として使用されていたが、同五年鳥取県庁への移転により鳥取城は因伯両国統治としての役割を終えた。鳥取県が鳥根県となっていた明治十二年（一八七九）には建物も撤去され現在のような堀と石垣を残すだけとなった。

明治六年（一八七三）に内堀の内側は旧城内として町の一つに数えられ、同十六年（一八八三）十一町とともに東町となった。城地は池田家へ払い下げられたが、大正年間に二の丸などの跡地約二万坪が鳥取市へ寄贈され、大正十二年（一九二三）より遊園地として開放された。また、昭和十九年（一九四四）には久松山一帯も寄付された。かつての城内の建築物としては仁風閣の庭園に残る宝扇庵と二の丸への上り口にある小さな門の二つだけである。

現在は三の丸跡に県立鳥取西高等学校、扇御殿跡に仁風閣、宝隆院庭園、城代家老屋敷跡に県立博物館が設置され、一帯は久松公園となっている。

《二の丸》

池田長吉が城郭の大拡張を行った際、久松山北西に偏っていた山下の丸を大きく南東に移し、当地に城主の居館を経て本丸とも呼ばれた。享保五年の石黒火事で二の丸の建物は全焼し、藩主の居館、政庁は三の丸に移された。このため、これ以降三の丸が二の丸とも称された。

享保十三年（一七二八）に三階櫓のみが再建され、文政年間には武器庫として使用されていた。天守櫓の焼失後、鳥取城を代表する建物であり、俗に御三階と称された。この三階櫓の石垣北西隅の上方に丸く穴のあいた角石がはめこまれており、おさこの手水針と呼ばれている。

《天球丸》

三の丸の上、二の丸の南東の一段高い所にある。池田長吉の姉・天球院（若桜城主・山崎左馬允に嫁いだ後離縁）の居所がここにあったこと

からこの名が付いた。長吉入部以前からすでに砦のような設備がほどこされていたようである。享保五年の火災で焼失後再建されなかったようである。幕末には天球丸に武術訓練の稽古所が造られた。

《山上の丸》

久松山の頂上にある郭で、池田長吉以前の城の中心であることから本丸、御天守、甲の丸ともいった。元来山城として築かれた後に天守閣を築いた。天正元年（一五七三）に山名豊国が築いた天守櫓を慶長六年（一六〇一）に池田長吉が新しく二重の櫓として建て直した。元禄五年十一月十一日の落雷により焼失、以後再建されることはなかった。

なお、月見櫓（着見櫓）のみ焼失を免れた。天守櫓の中央には長吉が三年を要して掘らせたという車井戸が残っている。久松山の頂上でもあり、鳥取市街、鳥取平野、中国山脈に鳥取砂丘を一望できる。

《太閤ヶ平》

粟谷町の谷筋の奥、百谷にかかる標高二五二メートルの本陣山の頂上部にある。天正九年（一五八一）羽

柴秀吉が鳥取城を攻めたとき本陣を置いた跡であることからこの名がある。文化十年（一八一三）には鳥取城防火のため城周りの山々の松の巨木が伐採されたため、本陣山は芝山に変わったという。現在、樽谷公園より山頂に至る登山道も整備されている。鳥取城跡に付属する施設として国の史跡に指定されている。

仁風閣

鳥取市東町
JR鳥取駅よりバス六分、西町下車、徒歩五分

仁風閣は、明治四十年（一九〇七）鳥取城のある久松山の麓の旧鳥取藩主・池田仲博侯爵の別邸、扇御殿跡に皇太子嘉仁親王（後の大正天皇）の山陰行啓の際の宿舎として建てられたものである。

宮内省内匠頭・片山東熊が基本案を作成した。片山東熊は工部大学校造家学科（後の東京大学工学部建築学科）の第一期生で、明治十九年（一八八六）以来、皇居造営事務局、宮内省内匠寮に奉職し、赤坂離宮（明治四十二年、現迎賓館）が代表的な専作となつている。この基本案をもとに、後輩の橋本平蔵（鳥取県出身、明治二十九年帝国工科大学卒）が実施設計と工事監理にあたり、地

元の大工棟梁・浜田芳造が施工を請け負い、明治三十九年（一九〇六）十月から七か月の突貫工事で翌四十年五月十日に竣工し、同年五月十八日から四日間、皇太子の御座所となつた。「仁風閣」という名前は随員であつた東郷平八郎によつてつけられたものである。同じ目的で建てられた松江市の興雲閣が和風を取り入れた擬洋風建築であるに對して、仁風閣は、木造二階建てのフランス・ルネサンス様式を基調にまとめられた優雅な洋館建築で、山陰地方では最も古い本格的な洋館建築であると言える。

正面中央部の大きな楕形ペディメントに特色があり、その下のベネチア窓との構成などにバロック的手法をかいま見ることができる。西方階段室の突き出しやその尖塔屋根が左右対称の正面に変化を与えている。背面庭園側は一階をバルコニー、二階をベランダとして開放感に満ち、軽快である。内部は各室とも、壁紙張り、マントルピース、カーテンボックス飾り、シャンデリアなどの装飾に意が払われており、山陰地方に建てられた本格的な洋館建築としては、他に例を見ない貴重な遺構である。

なお、山陰行啓以後は、大正十二年（一九二二）に池田家より扇邸とともに鳥取県に管理が委託され、以来、この二の丸一帯は久松公園と総称され、市民にも親しまれてきた。仁風閣は大正十五年（一九二六）に鳥取農村大学校の一部として活用され、鳥取地震以後は鳥取県庁の分室が置かれた。戦後は一時期、連合軍が使用していたが、昭和二十四年（一九四九）に県立科学館（後の科学博物館）となった。

昭和四十二年（一九六七）、池田家から鳥取県に正式に寄贈され、昭和四十八年（一九七三）の県立博物館新築移転に伴い鳥取市に委譲さ



れ、同時に国の重要文化財（建造物）に指定された。重要文化財の指定を受けた仁風閣は、昭和五十一年（一九七六）に修復工事を完了し、一般公開され現在に至っている。

一階は玄関車寄せを入るとまずホールがあり、その正面に随員控室が置かれている。その他は南側に事務所、薬局、県官出張所、応接室、北側に御道具置場、御服間、御拭間、御風呂場がある。二階は中央にホールが置かれ、東側に謁見所、西側に陳列所があり、南側に御食堂、共進所、侍従武官室が置かれ、北側に御座所、御寢室、御物置がある。階段は二か所あるが、南側に突き出た階段室は八角形で塔状になっている。内部は支柱のない螺旋階段である。仁風閣にはマントルピースが八か所（当初は各室全部十五か所に設置される予定だった）ある。御寢室のマントルピースにはイギリス製のタイルが張られていたという。また、御物置のマントルピースは最も保存状態がよく、修復の際に手本にされた。

名勝 宝隆院庭園

鳥取市東町
J R鳥取駅よりバス五分
西町下車、徒歩五分

仁風閣裏にある庭園で、鳥取市内

の名園の一つである。この名園は、十一代藩主・池田慶栄の未亡人・宝隆院のために文久三年（一八六三）に十二代藩主・慶徳が扇御殿とともに作った池泉回遊式の庭園である。久松山を背景に自然林を活用した溪流の岩組、滝口がなす景色は美しい。鶴をかたどった池には、豪壮な亀島を浮かべ、地形の変化に富み、徳川末期の造園の味をよく残している。

は巨大で単調とならないように建物をブロックに分割し、接続部にガラス張りの休憩コーナーを配し、外壁は小幅板のコンクリート打ち放し仕上げで高さも低く抑えられた親しみやすい建物である。

鳥取藩政に関する資料約一万五千点をはじめ、県に関係の深い考古、民俗資料や、前田寛治など郷土ゆかりの画家などの作品や美術に関する資料、地学・自然科学資料が常時展示されているほか、年数回特別展も開催される。

県立博物館

鳥取市東町
J R鳥取駅からバス五分、西町下車、徒歩五分

山陰地方の生物、地学、考古学などの部門展示とともに文化財の保存と展示なども行い、郷土について学習し、体験する場所として、また県民自らの作品を発表する文化活動の高場の場として昭和四十七年（一九七二）に建てられた。

敷地は久松山の麓、史跡鳥取城跡内にあり、城跡の眺望を考慮して、北東の一隅に配置されている。敷地面積一四、二九〇平方メートル、建築面積九、六九九平方メートル、地下一階、地上二階（一部三階建て）の鉄筋コンクリート造である。外観

開館時間 午前九時～午後四時三〇分
休館日 月曜日、祝日の翌日、年末年始
問合せ先 ☎0857・26・8042

名勝 興禅寺

鳥取市栗谷町
J R鳥取駅からバス五分、栗谷日赤前下車、徒歩五分

鳥取藩主・池田家の菩提寺である。

寛永九年（一六三二）に、池田家がお国替えのときにここに移された。そのころは竜峰寺といった。もとは臨済宗で京都妙心寺の末寺であったが、元禄七年（一六九四）、黄檗宗に改宗した。隠元、即非の流れをくみ、本尊釈迦如来像をはじめ中

国南方の風を伝えている。

書院の庭園は蓬萊式觀賞庭園で、借景にシイの木を主体とした常緑樹の自然林を生かし、幽玄な深さを感じさせる。前庭には杉、コケが庭一面に伸び、京の庭を思わせる。この庭が作られたのは江戸前期であるが、所々に室町時代の作風がよく生かされており、典型的な書院庭園の名園である。

また裏山には渡辺数馬、臼井本覚の墓や、庭の隅にはキリシタン灯籠、山門のそばには俳人・尾崎放哉の句碑がある。なお、庭内に残るキリシタン灯籠は、この寺の裏山にあった切支丹福田家老の墓地にあった礼拝物である。灯籠の竿だけとなったが、貴重な信仰遺物である。

参考

渡辺数馬の墓は、堂の裏手の山腹にある。剣客・荒木又右衛門とともに実弟の仇、河合又五郎を討つたことは有名である。碑面に寛永十九年竜王子臘月二日、一岳玄了居士塔、甫三十五歳云々とある。

キリシタン灯籠

鳥取市の興禅寺、観音院、一行寺、同市西町の松田家所蔵と、気高郡酒津東昌寺の五基は、昭和三十二年（一九五七）県の保護文化財に指定された。

キリシタン灯籠は、戦国時代の末から江戸時代のキリシタン弾圧が厳しかった時代に、隠れキリシタンたちが、偽政者の眼を逃れ、密かに信仰の対象物として礼拝したもので、古田織部正重勝らが、考案したことから織部灯籠とも呼ばれる。また、織部重勝のつくった茶器・織物には南蛮模様や十字架をあしらったものが多かった。大正時代末、キリシタン研究が盛んになり、一般にキリシタン灯籠と呼ばれるようになった。

鳥取県内にあるものはいずれも花崗岩で作られ、有和家蔵のものは完全な姿で残っている。しかしほかのものは中台、火袋、傘、宝珠を失い竿だけとなっている。これらの竿丈は七五センチから八三センチである。

隠れキリシタンたちは、竿の上部に彫刻されたふくらみを礼拝してい

た。これはクロス十字架を巧みに変化した形である。また、キリスト教では宇宙を表す場合、丸をもつてその象徴としている。上部の横の丸味は字音を表現した姿である。宇宙の中心には「天の神」がいるとキリスト教では教えている。興禅寺、松田家、有和家が所蔵するものには丸味を中心に、ラテン語の「PARTI（パーティ）」を、「PTI」と便化し、裏文字にした文様が彫られている。なお、PARTIは「天の父」を意味する。

竿の中央から下部にかけてアーチが陰刻され、その中に尊像が陽刻されている。県内六基のいずれの竿の

尊像も、胸に合掌し、衣には縦線があつて、南蛮風のガウンがよく描かれ、外人の特徴がよくとらえられている。この尊像はイエス・キリストを表現している。興禅寺と松田家所蔵の竿の横には「岩松牙心 鳳来吟 錦上花鋪 又一重」の句が陰刻されている。この詩句はキリスト教の聖霊を意味している。

文様の「天の父」、尊像の「キリスト」、詩句の「聖霊」は、キリスト教の三位一体の教えが象徴された礼拝物である。これらはキリシタン灯籠が造られ始めた初期の作で、創造時代型の代表作として、全国的にも貴重な文化財である。

また、一行寺、観音院、東昌寺のものは尊像のみ彫られ、迫害が厳しくなったころの擬装時代型で、そのころの代表作として重要なものである。

キマダラルリツバメ生息地

キマダラルリツバメは昆虫類、鱗翅目蝶類、シジミチョウ科に属する小形のチョウである。鳥取市東町長田神社付近、栗谷町興禅寺付近、上町護国神社境内の三か所は天然記念



物として指定されている。このほかにも鳥取県東部では各町村に、中部では倉吉市、三朝町、東郷町、泊村に、西部は大山周辺や江府町で発見されている。公園などのサクラやマツ類、砂丘や海岸地域のクロマツ・ニセアカシア林に関連がある。国内では岐阜県、京都府、兵庫県、岡山県に生息し、そのほか朝鮮にも分布している。

キマダラルリツバメは和名の示すように羽の裏面が黄斑で表面がルリ色であり、開いた状態の羽が三五ミリ内外の小蝶で、後羽には二本の尾状突起がある。キマダラルリツバメは、東洋熱帯区に生息し、幼虫時代はアリと共生することが判明している。卵から孵化するとハリフトシリアゲアリの巣に入り、アリから餌をもらって成長し、アリには蜜を分泌して与える。翌年、巣の中あるいは近くで蛹になり、やがて羽化する。

このように興味深い珍奇な習性をもっているこの仲間は、通常、旧熱帯区のものが多いが、キマダラルリツバメだけは旧熱帯区から遠い本州南部および朝鮮・中国等の北温帯に分布している。キマダラルリツバメが羽化するのは六月下旬から七月上

旬が最も盛んである。よく晴れた無風のとき、木の上の方に注意し目を向けると見つけることができる。飛翔もなかなか速い。

キマダラルリツバメは、その数も極めて少なく分布も限られていることから、昭和九年（一九三四）五月に天然記念物に指定された。



箕浦家武家門

鳥取市尚徳町
J R鳥取駅よりバス五分
県庁・日赤前下車すぐ

県立図書館・公文書館の一角に江戸時代の武家屋敷の門が県庁前の道路に面して建っている。旧鳥取藩士箕浦家の表門で、かつては東町のお堀端にあったが、昭和十二年（一九

三七）ごろ、師範学校の増改築に当たり武徳館（藩校）ゆかりの現在地に移築され、校門として使用されることになった。門は、入口扉の両側に控えの間が備えられた長屋門の形式である。屋根は瓦葺入母屋、壁は白漆喰、腰はなまこ壁になっている。お堀端にあった頃はささら子下見で、窓格子も木格子で、桁行も長い門であった。昭和初期には取り壊されることになったが、鳥取民芸運動の先駆者・吉田璋也や柳宗悦の努力によって残ることになった稀有の武家門である。

昭和四十九年（一九七四）四月に鳥取市の保護文化財に指定された。

正牆適處

正牆適處は、幕末から明治維新にかけて詩・書・画に優れた才能を發揮し、因伯における最高の文人と称された。正牆は、鳥取城下江崎町に生まれ建部樸齋に詩文を学び、嘉永二年（一八四九）には藩主・池田慶徳に招かれ藩校である尚徳館の改革に努めた。文久元年（一八六一）、密命を受けて九州諸藩の動きを探った。このとき、勤王の志士たちと交

わりを結ぶ。明治六年（一八七三）、久米郡松上村（現在の東伯郡北栄町松神）に移り、詩文や書画の制作を楽しみながら、私塾を開き子弟の教育に努めた。この塾には遠く米子や津山地方からも集まってきたという。詩集に『研志堂詩鈔』がある。

牧野芝石は正牆適處に詩文を学んだ。詩・書・画と三つの技に優れていたもので、「三絶の人」とも呼ばれた。明治十八年（一八八五）、パリで開かれた第二回日本美術展に出品している。晩年は鳥取中学（現在の県立鳥取西高等学校）で書道を教授した。

香川景樹

香川景樹は近世の歌人であり、和歌革新を唱え、新しく「桂園派」を立て情熱をそそいだ。

明和五年（一七六八）、鳥取藩士の家に生まれた。七歳で父を失い奥村家に養われ、奥村純徳と名のつた『続稲葉和歌集』に、純徳の作品が十一首収められ注目された。

二十六歳（寛政五年）のとき、歌道で名をあげようと京都へ行き、歌人・香川家の養子となって名を景樹

と改めた。そのころ歌壇は本居宣長の鈴屋派が飛ぶ鳥を落とす勢いであった。景樹は京都歌壇の新進歌人として期待された。同郷の蘭字者・稲村三伯との交友はよく知られている。

「歌は理わるものにあらず。しらぶるものなり」。景樹は、「歌は感動を言葉によって調べるもの。調べとは性情の声である」と独自の「しらべ」論を展開する。そして、この論をもとに歌壇革新を企図し「桂園派」を立てた。

『桂園一枝』は、景樹の遺曆を記念してまとめられた歌集である。景樹が自ら選んだ九八三首を収めている。「しらべ」論を実作で示した和歌史上の代表的な歌集となった。ほかに『新学異見』『土佐日記創見』『古今和歌集正義』などの著書がある。

天保十四年（一八四三）、七十六歳で没した。

鳥取市尚徳町の県立図書館入口には、和歌革新の決意をつたう景樹の歌碑が立っている。この碑は、顕彰会によって昭和十七年（一九四二）に建立されたものである。

「敷島の歌のあらず田荒れにけり

あらずきかへせ歌のあらず田」

平井権八

鳥取市湯所二丁目の鳥取北中グラウンド横に「鳥取藩士平井権八屋敷跡」の標札と碑がある。それによると、平井権八は、鳥取藩主・池田光仲（一六五五～一六七九）に仕え、御前試合で優勝した、父の仇を斬つて脱藩した、などと読めるが、平井権八という人物や事件について鳥取藩の記録はなく、実在したかどうか定かではない。

流布された話によると権八はすこぶる剣の立つ美男であったらしい。鳥取藩を脱藩したあと江戸に出て、吉原・三浦屋の花魁・小紫となじみ、遊興費欲しさに辻斬りを働き、鈴ヶ森で処刑された。この話に侠客・幡随院長兵衛もからみ、浄瑠璃や歌舞伎に脚色され権八の名は有名になった。四世鶴屋南北の『浮世柄比翼稲妻』は特によく知られている。浄瑠璃などでは「白井権八」の名で演じられている。これは江戸方言で「ヒ」が「シ」に誤用されたためと考えられる。また、鳥取市内の円通寺人形芝居でも権八は活躍する。

名勝 観音院庭園

鳥取市上町
JR鳥取駅よりバス一〇分、立川二丁目下車、徒歩五分

柔らかな曲線を描く築山と月に映える池泉が幽玄の美を創り出す。江戸前期を代表する池泉観賞式の庭園である。天台宗観音院は普陀落山慈眼寺と号し、鳥取藩の祈願所であった。元は栗谷にあったが元禄年間（一六八八～一七〇四）に、現在地へ移った。その際、作庭されたものと推定されている。昭和十二年（一九三七）に国の名勝指定を受けている。

書院からみると、優美な築山の線が左右に交差して奥行きとしなやかさを見せる。池は意外に広い。池の右手、橋のたもとには一基のキリシタン灯籠が置かれている。灯籠は県指定文化財である。庭全体の簡素な造りに、武家書院に多い織部流の作庭を感じる。現在も、植え込みや石組は最小限に抑えられ、江戸初期の原型がよく引き継がれている。正面のゆるやかな谷筋が樹木をとまなつて溪谷を表現し、石組も認められる。観音菩薩が住む普陀落山から、水流れの野筋を通り大海に注ぎ、鶴亀とみられる島の配置もおもしろい。書

院に座り、一服の抹茶に心いやされる。水面に映る山越の月を眺め、しばし茶人の世界に遊びたい。

なお、観音院の本尊は正観音で、江戸初期に城山から掘り出されたとの伝承がある。鳥取城の守本尊とされ、藩主・池田光仲の信仰が厚かった。現在も中国観音霊場三十三番札所である。

鳥取市歴史博物館

鳥取市上町
JR鳥取駅よりバス一〇分、御弓町下車、徒歩五分

国指定の重要文化財である榑谷神社のすぐそばに、平成十二年（二〇〇〇）七月に開館した。常設展示は、「鳥取の風土」「城下町鳥取」をテーマに、コンピューターを駆使してわかりやすく紹介されている。見て、聞いて、触れて実感でき、子どもから大人まで楽しめる参加体験型の博物館である。

開館時間 午前九時～午後五時

休館日 月曜日（祝日の場合はその翌日）、年末年始、祝祭日の翌日

問合せ先 ☎0857・23・2140

榑谷神社

鳥取市上町
JR鳥取駅よりバス一〇分、御弓町下車、徒歩五分

社地は水道山と大隣寺山にはさま

れた谷あい、境内にはマツ・スギ・モミ・シイ・ツバキなどの常緑樹が繁り、幽すいの気が満ちている。神社の創建は慶安三年（一六五〇）で、鳥取池田家の初代にあたる光仲が、幕府に願い出て、日光東照宮の分霊を勧請したものである。古くは因幡東照宮といい、明治七年（一八七四）に谷の名の王子谷にもとづいて、樗谿神社と改称した。

昔、別当寺院の唯識院（いまの立川町に移った大雲院）があった跡の参道を進むと、神明造りの鳥居があり、左に石橋を渡ると神門がある。ここから随神門まで一五〇メートルの石だたみの両側には、かつてサクラの並木もあつたと伝えられるが、今はなく数本のスギの巨木がうつそつとはえている。随神門をくぐると石段まで三三メートルの石だたみが、どつしりと美しい。両側には藩の重臣たちの寄進になる石燈籠十基ずつが林立している。石段を上ると、そこに昭和二十七年（一九五二）に国の重要文化財に指定された拝殿・唐門・本殿の建物が建っている。

工事の総奉行は荒尾大和、奉行は寺島彦右衛門、那須市郎右衛門らであった。大工棟梁は木原木工允、野



間能登らで、木原木工允は、浅草寺本堂・五重塔・上野東照宮・日光東照宮社殿などの建築にもあつた名工である。また、本殿の桁に施された鷹の彫刻は左甚五郎の作といわれる。用材はほとんど全部がケヤキ造りで、一部に彩色塗り、本漆塗りが施されているほかは白木造りで、各所に桃山風の飾金具が見られる。社殿全体のつりあいもよく、社地の幽玄さに調和して、江戸初期の神社建築として屈指のものといえよう。江戸時代に幾度も小修理が行われたがその後破損が著しく、とくに昭和十八年（一九四三）の鳥取震災によるいたみがひどく、昭和三十年（一

九五五）、総工費三百七十余万円を投じて修理し、翌年十月に全工事を終了した。社宝として、狩野探幽三十六歌仙画像や同じく鷹の図などがある。

権現祭

鳥取藩初代藩主・池田光仲公が、慶安三年（一六五〇）、日光東照宮の御分霊を「因幡東照宮」（現樗谿神社）として祀った。その二年後の承応元年（一六五二）九月十七日から奉納されるようになった祭礼行列である。

祭礼絵巻によると、樗谿を出発した御輿が古海河原のお旅所を中継し、再び樗谿に戻るといふ旧町域を一巡するコースで神官・僧・武家・町民も参加する鳥取城下で行われた最も盛大な祭礼であった。しかし、明治以降は神仏分離政策により、祭礼の規模が縮小され、下火になって明治四十年（一九〇七）を最後に行われていなかった（絵はがき等の古写真で様子をうかがい知ることができる）。

平成十二年（二〇〇〇）十月十四日、因幡東照宮創建三百五十年を迎

え、市民の手による「権現まつり」が開催された。かつて権現祭で使われていた御輿も登場し、武者行列、獅子舞などが再現された。



獅子舞

因幡地方から但馬の一部にかけては、春秋の祭礼に金色の面長の獅子頭を使う獅子舞が奉納される。この獅子舞は、獅子頭の形状から「キリン獅子」と称され、因幡地方では主流である。また先導役が狸々（想像上の動物）であること、笛・太鼓・鉦の伴奏でゆつたりと舞う点などが特徴である。

キリン獅子舞の起源は、鳥取藩初

代藩主・池田光仲公が、慶安五年

(一六五二)、「因幡東照宮」(現檮谿

神社)に奉納したという説がある。

檮谿神社の祭礼が行われなくなった

現在、「正統権現流」と称する

大和佐美命神社(鳥取市中砂見の大

湯棚地区と上砂見地区)、「権現堂古

流三方舞」と称す岩坪神社(鳥取市

岩坪)、「三方舞」と称する宇倍神社

(国府町宮下)などが、本家檮谿の

獅子舞を伝えていると考えられる。

この三つの獅子舞はいずれも県指定

民俗文化財である。平成十年(一九

九八)には、倉田八幡宮(鳥取市蔵

田)・下味野神社(下味野)・賀露

神社(賀露)・蛭井神社(智頭町芦

津)・澤神社(八東町才代)の獅子

舞も県の無形民俗文化財に指定され

た。

なお、因幡地方でも、獅子舞を奉

納しない(獅子頭を伝えない)、も

しくは神楽獅子舞を伝える集落があ

る。伯耆地方では、獅子舞というよ

りも、祭礼行列の中で獅子頭をかぶ

った者が行道するスタイルが一般的

である。その他、子どもに獅子を舞

わせる集落では「神楽まわし」と称

わらべ館

鳥取市西町
J R鳥取駅よりバス五分、わらべ館
前下車

子どものうたとおもちゃをテーマ
に、遊びの文化性に着目し、県と鳥
取市が協力して整備し、平成七年
(一九九五)七月に開設した。

この施設は、「童謡館」と「鳥取
世界おもちゃ館」からなる。

「童謡館」は、県が進める「童
謡・唱歌のふるさと」づくりの拠点
施設であり、地元のすぐれた音楽家
や童謡・唱歌を紹介している。

また、「世界おもちゃ館」は、平
成元年に鳥取市で開催された「世界
おもちゃ博覧会」の成功を顕彰した
もので、昔ながらの懐かしいおもち
やや外国の玩具が展示された「おも
ちゃの部屋」がある。おもちゃづく
りや唱歌教室なども開催され、子ど
もたちには夢と創造性を与え、そし
て大人には郷愁を感じさせる。
建物は、旧県立図書館跡に建てら
れ、歴史を伝える建物を残すため、
建物の一部には旧県立図書館の外観
が復元されている。

開館時間 午前九時～午後五時

休館日 第三水曜日(祝日の場合は翌

日)年末年始

問合せ先 ☎0857・22・7070



大雲院

鳥取市立川
J R鳥取駅よりバス二〇分 立川大
橋下車

天台宗に属する寺で、慶安三年
(一六五〇)、藩主・池田光仲が創建
した。もと東照宮の別当寺院であつ
たが、明治二年(一八六九)神仏分
離となったときに東照宮を檮谿神社
と改め、大雲院を現地に移転したも
のである。

現在、旧国宝の紙本金字法華経巻
第二、第四の二巻が所蔵されている。
これは、昭和十七年(一九四二)六
月に重要文化財に指定された。伝に
は、万里小路宣房の筆となっている

が、正しくは巻第二は二十二入、巻
四は十七人の筆者によって書かれた
ものとされる。両巻とも巻頭は伏見
天皇の御筆と考証されている。この
紙背に約五十通の消息(手紙)が達
筆で記されている。これは慈道法親
王ということであったが研究による
と、伏見天皇筆で御子・後伏見天皇
にさし出されたものであるという。
経文の筆者と消息の筆者が同一の伏
見天皇で、同天皇の逆修経(生前に
前もって菩提をとむらうために法会
をいとなみ、書き写しおいた経)で
あつたと推定されている。この経巻
は江戸時代末、日野郡黒坂の緒形氏
から、当寺に奉納されたということ
以外は、明らかでない。

財団法人

鳥取市覺寺

渡辺美術館

J R鳥取駅からバス十五分 渡
辺美術館前下車

鳥取市の医師が昭和初期から六〇
余年に渡つて収集した国内外の古美
術品約三万点が収蔵されている。

収蔵品は、江戸時代各地の大名が
贅を尽くして作らせた絵画や壺、道
具、武器のほか、大陸の文化や歴史
を伝えるものなど多彩である。

また、鳥取藩に関する品々も展示
されている。

開館時間 午前10時～午後5時（入館は四時三〇分まで）

休館日 火曜日・年末年始

問合せ先 ☎0857・24・1152

摩尼寺

鳥取市覚寺
JR鳥取駅よりバス十五分、覚寺下車、徒歩四〇分

鳥取市覚寺部落から二・五キロメートルの山奥にある。天台宗に属し、本尊は帝釈天である。承和年間（一三四五～一三五〇）に慈覚大師が開いた。

因幡地方の住民の崇敬が厚く、五月二十六日の会式および春秋の彼岸には多くの参詣の人々でぎわう。

高い石段を登ると途中に山門があり、石段を登りきると、右に鐘楼、左に籠り堂がある。本堂は山の中腹を切りひらいて建てられている。奥の院はここからなお、数百メートル登らねばならない。大きな立岩は、帝釈天出現の地といわれる。

付近には道好、小泉友賢の墓、鼠屋大蕪の句碑、継子落しの滝、鶏山などがあり、摩尼寺縁起の感じをそのままに、俗世を遠ざかった感じである。

参考

道好の墓

摩尼寺の石段の下、茶屋の背後の山腹にある。道好は摩尼寺の僧侶で、秀吉がこの寺を焼きはらおうとしたとき、守って寄せ付けなかった。秀吉は一策を考え、法事にことよせて道好を本宮に招待した。その留守の間に寺を焼き払った。これを知った道好は急いで帰ったが既に焼けてしまっていたため、怒り自ら穴を掘ってこれに入り死んだという。



小泉友賢の墓

摩尼寺の石段下、左手の茶屋の後ろにある。墓碑には「白水先生碑」と

刻まれている。友賢は、鳥取藩の侍医で貞享五年（一六八八）に因幡民談記一〇巻を記した。七十歳で亡くなった友賢は「自分の死後は摩尼山中の草の根に埋めて墓を作り碑を建てるなどしないように」と遺言したことが墓石に記されている。

伝説

昔、湖山の村に宇文長者がいた。長者夫婦には子供がなく、それを嘆き、円護寺の大日如来に祈ったところ、一女子を得た。しかし、この女子が八歳の夏に姿を隠したので長者が探すと、童女に化けて海上の雲霧の中三日三夜戯れ、立岩の頂で帝釈天になった。それを見た者は歓喜し私財を投じ、寺を建てた。これが喜見山摩尼寺である。

（摩尼寺縁起より）

離水海食洞

鳥取市浜坂
JR鳥取駅よりバス十五分、丸山下車、徒歩五分

鳥取市丸山の交差点から浜坂へ向かう道路沿いにある洞窟。入口の部分の高さは約一メートル、最大幅〇・九メートル、奥行一八メートル。

離水海食洞は、かつての海岸線の崖が海水の浸食を受けてできた地形で、海岸線が後退したことにともなうて内陸に見られる洞窟。縄文時代前期の日本列島が暖かく海水面が高かった（縄文海進）頃に形成されたと考えられている。離水海食洞の付近には、かつての海食崖であった崖も見られる。

吉川経家

吉川経家は安芸国の吉川氏の一族で、石見国福光城（鳥根県邇摩郡温泉津町）の城主であった。

天正八年（一五八〇）五月、羽柴（後の豊臣）秀吉は毛利氏の勢力下にあった因幡に侵攻し、鹿野城、鬼ヶ城など主要な諸城を攻略した。これを見た鳥取城の山名豊国は秀吉に帰属することを決めたが、家臣がこれに反対し豊国を追放した。残った家臣は、毛利氏の山陰経営の責任者であった吉川元春に城將の派遣を要請し、元春の命を受けた吉川経家が、天正九年三月、海路賀露に上陸し鳥取城に入った。城兵は千人余りであった。しかしこのとき既に因幡のほとんどと東伯耆は織田方の勢力下に

入っており、鳥取城は孤立無援の状況にあった。しかも当初から城内に食糧の蓄えは乏しかった。

同年六月、姫路を出発した秀吉軍二万は、七月十二日には鳥取城の東方の太閤ヶ平に本陣を構えた。秀吉軍は鳥取城を完全に包囲し、城外との連絡路を断つた。そのため八月の終わりごろから、城内の兵糧が尽き餓死者が出始めていた。経家はよく城兵を統率し持ちこたえたが、ついに城兵の助命を条件に自刃し、十月二十五日に鳥取城は開城した。後世、鳥取城の「渴え殺し」といわれた攻城戦である。

吉川経家の墓が、鳥取市内の円護寺にある。二基の五輪のうち一基が経家、もう一基は経家の家臣たちの墓と伝えられている。

〔鳥取市街地〕

鳥取温泉

鳥取市吉方温泉町、末広温泉町、永楽温泉町の鳥取駅周辺に湧出する温泉。明治三十八年（一九〇五）、山陰線鉄道敷設工事に伴い温泉が発見された。池内源六が掘削に成功し、

現在の温泉地開発の端緒となった。これとは別に、元禄年間に湯所に温泉があつたという記録があり、寺町に寺町温泉があつたことが『大正の鳥取』に記述されている。

現在の温泉域であるJR鳥取駅前から吉方温泉町には、約三十本の源泉が集中しているが、汲み上げが過密になるとお互いが干渉するので、稼働しているのは十八本である。温泉の深度は中心部で四八メートルと浅掘井で、約六十度の温泉水が得られている。その反面、中心域を外れると深堀をしても高温水は得られない。平均温度四十四・五度、湧出量は毎分八八四・四リットル。泉質はナトリウム、塩化物、硫酸塩泉である。

温泉水は鳥取駅付近の地下に潜在する第三紀層の岩盤の高まりに発達した断層や並列する割れ目に沿って上昇し、一部は洪積層や沖積層内を流動していると考えられている。

県庁所在地に温泉の湧く例は全国でもあまりみられない。鳥取市はもとも城下町であつたので市内には、仁風閣、興禅寺、観音院庭園、玄忠寺、景福寺など名勝史跡も多い。

鳥取県物産観 光センター

鳥取市末広温泉町
JR鳥取駅より徒歩
五分

鳥取市の中心市街地に昭和六十一年（一九八六）八月に開設した。

伝統の技を生かした工芸品、農畜水産物の加工食品、菓子、酒類など、鳥取県内のあらゆる特産品が揃っている。

開館時間 午前九時三〇分～午後六時三〇分
休館日 第三木曜日
問合せ先 ☎0857・29・0021

鳥取民芸美術館

鳥取市栄町
JR鳥取駅より徒歩五分

昭和初期に民芸運動を進めていた吉田璋也が開設した。白土蔵造りの建物は、昭和二十四年（一九四九）十二月の開館当時、鳥取民芸館と呼ばれた。館内には、山陰に伝わる古い民芸品をはじめ、日本全国や中国、ヨーロッパなどからも収集された民芸品が多数陳列されている。

右隣にある八角形の建物には、童子地蔵堂で享保年間から明治までの無名の石工が刻んだ百四十七体の童子地蔵が安置されている。

開館時間 午前一〇時～午後五時

休館日 水曜日（祝日の場合はその翌日）
問合せ先 ☎0857・26・2367

吉田璋也

吉田璋也は柳宗悦の民芸理論に共鳴して民芸運動を繰り広げ、民芸の興隆に大きな業績を残した。

明治三十一年（一九八八）、医師を父に鳥取市に生まれた。新潟医学専門学校（現在の新潟大学医学部）を卒業後、京都、倉敷、大阪、奈良などで医療に従事した。昭和五年（一九三〇）暮れ鳥取市に帰り、医院（耳鼻科）を開業した。牛ノ戸の茶碗に魅せられた吉田は、そのころ経営に苦しんでいた牛ノ戸窯（河原町）を指導し再興させた。

吉田がプロデュースした民芸は、木工、竹工、挽物、漆工、石工、金工、染物など広範囲にわたった。古い民芸作品（残存民芸）の保存も大切だとしながらも、民芸品の制作（新作民芸）の指導育成に努め、地方の工芸に新しい刺激を与えた。

民芸の拠点「たくみ工芸店」を鳥取市内に開設、さらに東京にも出店し、鳥取県の民芸品を県内外にPR

し、販売を促進した。昭和二十五年（一九五〇）には、鳥取民芸美術館を開設、優れた民芸品を展示し鑑賞と勉強の場を提供した。また昭和三十六年（一九六一）には「たくみ割烹店」を開店、郷土色に富む庶民料理を地元の民芸陶器に盛りつけ、「用の美」を実践してみせた。昭和四十七年（一九七二）、七十歳で死去。



稲村三伯

稲村三伯はわが国最初の蘭和辞書を編集し、蘭学の発展に大きく貢献した医師・蘭学者である。

宝暦八年（一七五八）、現在の鳥取市川端三丁目の医師である松井家に生まれた。生誕地には標柱が立てられている。

鳥取藩の医師・稲村三杏に医学を学び養子となった。藩医の後継者となった稲村は、藩校尚徳館や福岡の亀井南溟の塾に学び、三杏の死後、藩医を継いだ。

蘭医・大槻玄沢のオランダ語入門書『蘭学階梯』を読んで発奮し、寛政四年（一七九二）江戸に出て藩邸に勤めながら玄沢の門に入り、蘭学を学んだ。蘭和辞書があれば蘭学研究はもつと発展すると考え、学友とともにオランダ人・ハルマの辞書をもとに寛政八年（一七九六）、『波留麻和解』を完成した。わが国初の蘭和辞書であり、欧日対訳辞書としても最初のものであった。この辞書には六万四千三十五語が収められている。

稲村は後に藩医を辞め、江戸下総国海上郡（現在の千葉県）などを転々としている。そのころ海上随鴨を名乗った。文化三年（一八〇六）には京都で蘭学塾を開き、京都の蘭学はこれにより盛んになったといわれている。解剖の本『八譜』はこの

ころに執筆された。六十四巻からなる大冊である。文化八年（一八一）、五十四歳で永眠。

鳥取市本町一丁目の遷喬小学校玄関には三伯の胸像を置いた歌碑がある。同郷の歌人・香川景樹が稲村を讃えて詠んだ歌が刻まれている。「いく葉、くすしき種のひとくさを、豊あし原に まきし人これ」

伊谷賢蔵

伊谷賢蔵は、「行動美術協会」を中心に精力的に活動するとともに、多くの新進画家を育てた。

明治三十五年（一九〇二）、鳥取市川端一丁目で質店を営む旧家に生まれた。京都高等工芸学校（現在の京都工芸繊維大学）に入学、本格的に油彩に取り組む。春陽会、二科会で受賞を重ね、画家として順調な道を歩む。

昭和十四年、陸軍従軍画家となり、中国北部へ派遣された。中国の民衆の生活や風景に感動、特に千五百年もの長い年月を耐えてきた雲嵩石仏に強く打たれた。連作『雲嵩石仏』は民族の力と悠久の歴史の流れを力強いタッチで描いている。戦意高揚

の絵が多いなかで、伊谷は広大な自然や滋味に満ちた人間を描いた。

終戦後、向井潤吉らと「行動美術協会」を結成し、昭和四十五年（一九七〇）に亡くなるまでの二十五年間、その中心画家として精力的に活動するとともに、京都学芸大学などで多くの新進画家を育てた。この間、鳥取へもたびたび帰り、冬の山陰海岸や秋の大山を好んで描いている。主な作品に『大同石仏』『阿蘇』『裏大山晩秋』『万年山』『クスコの朝市』などがある。

八百谷冷泉

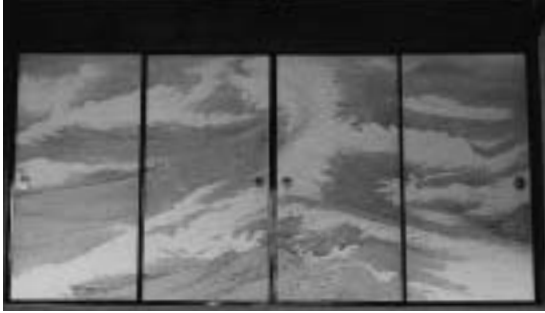
八百谷冷泉は、『大波濤』で知られる日本画家である。

明治二十年（一八八七）、現在の鳥取市職人町に生まれた。幼いころから絵を描くのが好きで、二十二歳のとき京都、円山派の山元春拳について学んだ。大正七年に文展に入選し、十三年には初期の代表作『孔雀』を完成させた。精密で、華麗な描写は格調高い。

昭和十二年、矢野橋村、小杉放庵、菅楯彦らと「墨人会」を結成している。しかし、太平洋戦争が勃発し、

教授をしていた大阪美術学校も閉鎖された。さらに長男の戦死と不幸が相次ぎ、一人帰郷し終戦を迎えた。

冷泉は、岡益の長通寺（国府町）が気に入って十年間滞在している。そのお礼として描いたのが、冬の日本海が激しくしぶく二十枚の襖絵『大波濤』である。冷泉は、この絵を描くため岡益から鳥取市の賀露港まで約一八キロメートルを歩いて通い、三年あまりの取材のうち、一気にこの絵を描きあげたという。昭和三十四年（一九五九）、七十一歳で没した。



聖神社

鳥取市行徳
JR鳥取駅より十五分、千代橋下車
付近

天津日高日子番熊邇々芸命（天孫降臨の神）日子穗々手見命（邇々芸命の御子で神話の海彦の神）事代主神（大国主命の御子）を祭神とし、古くから「聖の大社」として崇められてきた。

社殿の創立年代は明らかでないが、現在の本殿は宝永七年（一七二〇）八月に建立されたものである。安永五年（一七七六）八月には、神階の最上位である正一位をつけている。本殿の建築に当たっては、当時の建築技術の粋が集められ、『鳥府志』にも、「國中無双の麗宮なり、工匠巧みをきわめ、彫刻美を尽せり」とある。社殿は昭和三十二年（一九五七）四月、県の保護文化財に選定された。

神幸祭もこのころから大祭の規模をもつようになった。『因幡志』には「（安永）六年六月、初めて夏祭行はる。それより毎年六月六日から十一日まで、祭礼を執行する。氏子男子の童蒙謡躍して歌舞をなす播車、台車を引渡して殊に賑はしく神威を増し靈光赫々たり」とあり、ま

た『鳥府志』にも「寛政の初年、氏子構の町々から各屋台を出し、子供歌舞伎を仕組み内町より古海の松原まで挽出し、其の道筋屋台の中より、琴・三味線・胡弓・笛・太鼓の拍子を揃へ、或いは銅鑼を打鳴らし法螺を吹き種々の音曲を尽し（略）見物の老若男女堵檣の如く街衢に立塞り其の賑はしき事類なし（略）」と記しているがそのいずれをみてもいかに町をあげての大事事であったかがうかがわれる。なお祭神の事代主神は、最初、聖神社の摂社として境内に社殿があり、恵美須神社の祭として毎年十月二十日祭典を奉仕していたが明治三年（一八七〇）本社に合祀された。

毎年五月下旬は、鳥取市が聖神社のお祭りムードでわかかえる。

常忍寺

鳥取市行徳
JR鳥取駅よりバス五分、行徳口下車、徒歩五分

日蓮宗正中山法華経寺（現千葉県市川市）の末寺で、一尊四菩薩を本尊とする。

紀州侯・徳川頼宣の母堂・於万の方（家康の側室養珠院）法華を信仰し生涯に法華三個寺を（父母夫君のため）建立しようと思いたち、ま

ず養珠寺（和歌山県）、本遠寺（山梨県）の二か寺を建立した。残りの一か寺は日常上人の生国である因幡国に建立しようと思願していたが、果たすことができなかったので、その旨を孫娘（光仲の正室・茶々姫）に遺言した。茶々姫は日常上人が紀伊国（和歌山県）から鳥取の芳心寺の住職となるや、寛保元年（一七四一）九月母堂の遺言によって一寺を建て鷲峰山常忍寺としたといわれる。なお、常忍とは日常上人の別名である。

本寺に蔵する絹本着色普賢十羅刹女像は有名で、巨勢金岡あるいは唐五道子の筆と伝えられているが、定かではない。鎌倉時代のもので推察される。これは、明治三十七年（一九〇四）二月に国宝に指定された。そのほかにも大蔵経など数々の宝物があったが、大洪水のとき破損した。日常上人は元富木播磨守常忍といひ、承久二年（一一二〇）、因幡の富木郷に生まれ、のち下総国（千葉県）中山に移って北条氏に仕え、富木殿と称えた。日蓮上人の法を聞いてありがたく感じ、上人が亡くなった後雑髪し、日常と改め下総国に正中山法華経寺を建立した。

景福寺

鳥取市新品治町
JR鳥取駅より七分、新品治町下車
徒歩八分

曹洞宗に属し、福井県永平寺の末寺である。景福寺は、南北朝時代の貞治三年（一三六四）に開山した。通幻禅師が摂津に創った古寺である。通幻和尚には伝説でいう「飴買の幽霊」によつて育てられたとの伝承がある。その後、姫路城主・池田輝政の家老・荒尾隆重が姫路に移し、荒尾家の氏寺とした。元和二年（一六一六）に備前に移し、寛永十年（一六三三）に荒尾家老と共に鳥取に移り、栄えた大寺である。

江戸時代、鳥取景福寺、倉吉定光寺、米子総泉寺を因伯の三祿所とし、禁制の宗門切支丹と不受不施派を取り締らせていた。景福寺は因伯二州の総務所であった。これらの取締り覚帳は、慶長十八年（一六一三）から約百五十年間の記録を留めた貴重な資料である。

寺宝として土方稻嶺、谷文晁、島田元旦などの有名な書画、骨董類が多く所蔵されている。

また、大坂冬の陣、夏の陣で豊臣方につき活躍した後藤又兵衛その子や、武芸に秀でた羽生郷右衛門、画

家の島田元旦・土方稻嶺などの墓がある。

参考

後藤又兵衛の墓

大坂冬の陣及び夏の陣で活躍したが四十六歳で戦死した。そのとき二歳だった子・為勝は母親に抱かれて因幡国（鳥取）に亡命し、成長の後、池田光仲に仕えた。為勝の子正俊が祖父の勇名を慕って建てたのがこの墓である。大きな五輪塔二基が又兵衛夫妻の墓である。

羽生郷右衛門の墓

武芸をもつて池田光仲に仕え勇名をとどろかせた。墓はひき臼を似せて造られている。また、墓には辞世の句が刻まれている。

「世の中をめぐりめぐりて因幡路に
しばらく足をひき臼となる」

荒木又右衛門

江戸時代初期の武芸者である。

慶長三年（一五九八）、伊賀上野に生まれた。大和郡山藩に仕えていたが、義弟の仇討ちを助けるためその

職を棄て協力した。

義弟・渡辺数馬は備前岡山藩主・

池田忠雄の家臣であった。数馬の弟が同僚の河合又五郎に斬殺される事件があり、その仇打ちを又右衛門が助勢した。寛永十一年（一六三四）鍵屋の辻（現在の三重県上野市の郊外）で仇討ちを果たした。日本三大仇討ちの一つといわれているが、厳密には藩主・忠雄の遺命による「上意討ち」であろう。

寛永十五年（一六三八）八月十二日、又右衛門は鳥取藩に迎えられている。同月二十八日に又右衛門の死が藩で公表されているが、切腹か毒殺か、その死は謎に包まれている。

墓は鳥取市新品治の玄忠寺にあり、境内には遺品館もある。

玄忠寺

鳥取市新品治町
JR鳥取駅バス二〇分、新品治下車

浄土宗知恩院末寺で、その創建は永正五年（一五〇八）と伝えられる。

万治三年（一六六〇）以前には下台町にあったが、この年全焼して現在地に移った。江戸時代には、遊行上人来鳥のとき、真教寺、大行寺とこの寺が輪番で旅館にあてられたという。たびたび火災にあい、宝永二年

（一七〇五）には、本堂、庫裏とも焼失した。今の本堂は、寛政十二年（一八〇〇）ごろの建築で、庫裡は八上郡徳吉村の農家を移したものである。

境内に高浜十兵衛、荒木又右衛門、黒田稻皐らの墓がある。また、庫裏では、高木啓太郎筆の羅漢襖絵が展示され、境内にある遺品館には、荒木又右衛門の遺品が展示されている。



鎌倉十七

鎌倉十七は、万治・寛文・延宝（一六五八〜一六八〇）のころ天下に知られた力士である。

鳥取藩の歴代藩主は相撲を好み優秀な力士を多く召し抱えていた。当時、鳥取藩ほど領内に力士が多い藩はなかったといわれる。そのためか百近い力士塚が鳥取市内に確認されている。因幡の相撲を語るとき忘れてならない力士が鎌倉十七と両国梶之助であろう。

鎌倉十七は本名を畔柳茂右衛門といい、寛永の末に奥州に生まれたといわれる。池田光仲に仕えた。

十七歳のとき、鎌倉の勧進相撲で優勝したため、それにちなんで鎌倉十七を名乗るようになった。鎌倉の化粧回しには緋糸で日の丸が付けられていたので、日の下開山鎌倉十七とも呼ばれた。

鳥取市立川町一丁目の広徳寺に墓がある。力士の墓としては最も古く、今も相撲関係者が葬でている。

尾崎放哉

放哉は、季語や形にとらわれない自由律の俳人、それも漂泊の俳人として知られる。本名を秀雄。明治十八年（一八八五）、鳥取市吉方町に生まれた。明治三十二年（一八九九）、県立第一中学校（現在の県立鳥取西

高等学校）に入学。この頃から句作を始めている。明治三十八年（一九〇五）、東京大学法学部に入学、従

妹との結婚を望むが周囲に反対される。以後、酒におぼれることが多く、人間不信も強くなる。就職しても次々に辞めている。

大正十二年（一九二二）、仕事も家族も捨て、京都、須磨などの寺男として寺を転々とし始める。孤独と貧苦、放浪の生活の中で放哉の句は輝き始める。

大正十四年（一九二五）、師である萩原井泉水の尽力により、小豆島にある西光寺南郷庵に落ち着いた。しかし、極貧と病苦の生活が続き、大正十五年（一九二六）、四十二歳で亡くなった。

「せきをしてもひとり」「肉がやせてくる太い骨がある」「死と向き合いながらも自由を全うし、独自の心象を歌った。放哉の生き方がそのまま自由律俳句である。

「春の山のうしろから烟が出だした」尾崎家の菩提寺である栗谷町の興禅寺にこの句碑がある。辞世の句で井泉水が書いた。

平田眠翁

平田眠翁は鳥取藩の医学・本草学者で、文化四年（一八〇七）に生まれた。京都の水野皓山らに本草学や物産学を学んだ。和歌もたしなんだ。

嘉永一年（一八四八）、鳥取中土手（現在の鳥取市）に開業し、やがて鳥取藩の薬園掛を務めた。薬園は現在の鳥取市立川、県立鳥取東高等学校の前あたりにあった。

文久一年（一八六一）からは十一年間、薬園長を命じられた。明治になり、鳥取県医学校が開設されるとその教授を務めた。明治十五年（一八八二）に亡くなった。

著者に『物薬効録』などがある。なお曾孫は劇作家の田中千禾夫であり、千禾夫の夫人は同じく劇作家の澄江である。

種田山頭火の句碑

俳句と旅に生きた種田山頭火（一八八二—一九四〇）の句碑は全国各地に建てられている。山頭火が生まれた防府市の「山頭火研究会」によると、没後五十年の平成元年には百

墓の句碑を数えている。鳥取県内に三基ある。

「松はみな枝垂れて南無観世音」鳥取市安長の東円寺境内に建つ。山頭火に心酔していた住職が昭和四十八年（一九七三）に建立した。この句は尾崎放哉死没の地小豆島の南郷庵を訪れたときに詠んだ。山頭火は、放哉と同じ自由律俳句誌『層雲』の同人で三歳年下の放哉を終生敬愛していた。

「分け入っても分け入っても青い山」この句は、昭和二年秋、用瀬町の『層雲』同人・森田千水を訪ね半紙に書き残したものの。八頭郡用瀬町の役場前に建つこの句碑は、昭和五十九年（一九八四）に建立された。用瀬町内の「文学の小径」に並ぶ碑の一基である。

「へうへうとして水を味ふ」西伯郡大山町大山寺の清光庵入口に昭和六十年に建立された。『層雲』同人で倉吉市出身の河本緑石との双句碑である。生前、顔を合わすことのなかった二人の句碑を並べ魂の出会いをといたことで建てられた。

「へうへうとして水を味ふ」西伯郡大山町大山寺の清光庵入口に昭和六十年に建立された。『層雲』同人で倉吉市出身の河本緑石との双句碑である。生前、顔を合わすことのなかった二人の句碑を並べ魂の出会いをといたことで建てられた。

なお、緑石の碑には「星、みんな消えてしまった 頂上にすはる」と彫られている。

しゃんしゃん傘踊り

昭和四十年（一九六五）、高田勇鳥取市長と横枕在住の高山柳蔵によつて考案された踊り。

鳥取市では、聖神社、大森神社の五月の例祭に合わせて、昭和三十六年（一九六一）から「鳥取祭」が行われていたが、市長をはじめとする要人の市中パレードが中心であった。昭和三十九年（一九六四）の市役所新庁舎完成を機会に、高田市長



と高山柳蔵が鳥取市域に伝わる「因幡の傘踊」を大衆化し、新作民謡「きなんせ節」に合わせて、誰でもいつでもどこからでも踊れる踊りを目指し考案したといわれる。

祭の名称は一般公募され、シャンシャンという鈴の音と、市街地の温泉で湧く湯がシャンシャンと鳴る音から「しゃんしゃん祭」と名付けられた。以後三十年以上、毎年八月十六日に行われている。市民あげての一斉傘踊りが、鳥取市街を鮮やかに彩る。

〔鳥取市南部〕

おかのていいち
岡野貞一

岡野貞一は、『故郷』『春の小川』『朧月夜』など、今も多くの人に親しまれ、歌い継がれている文部省唱歌を作曲した。

岡野は、明治十一年（一八七八）に、現在の鳥取市古市に生まれた。岡野が生まれた家の周辺には、豊かな自然があった。

少年期に鳥取教会で永井幸次（後に大阪音楽大学を創設）の弾くオルガンや讚美歌に魅せられ、西洋音楽に強い関心を寄せるようになった。



明治二十九年（一八九六）、音楽家を志し、東京音楽学校（現在の東京芸術大学）に進んだ。専攻は声楽であったが、作曲にも秀でていた岡野は、卒業後も助手として学校に残った。

明治四十二年（一九〇九）から、文部省唱歌編さんの事業に参画した。ここで、高野辰之と岡野による数々の名曲が生まれている。『春が来た』（明治四十三年）、『紅葉』（明治四十四年）、『春の小川』（大正元年）、『故郷』『朧月夜』（大正三年）である。日本の懐かしい風景や四季が高野の美しい言葉で表現され、岡野の上品でやさしい旋律がしなやかに包みこんでいる。

岡野は、東京音楽学校での講義のかたわら毎週日曜日、本郷中央公会堂（教会）でオルガンを弾き、聖歌隊を指導した。この活動は昭和十六年（一九四一）に急性肺炎のため六十四歳で死去するまでの四十三年間続けられた。

鳥取市東町の久松公園入口には『故郷』の音楽碑が建っている。昭和四十八年（一九七三）に設置された。

また、鳥取県は、岡野をはじめ郷土が生んだ偉大な音楽家を知ってもらうため、童謡・唱歌の普及を図るために、昭和六十三年（一九八八）から「童謡・唱歌のふるさと」を提唱し、童謡・唱歌のふるさとづくりに取り組んでいる。

市内の街路には音楽碑をはじめ、音楽チャイム、童謡カリヨン（鐘）、案内板などが設置され、岡野貞一の業績を讃えている。

いとがかずお 糸賀一雄

知的障害のある子どもたちの福祉と教育に一生を捧げた。

戦災孤児や知的障害のある子どもたちのために、昭和二十一年（一九四六）、同志と共に大津市内に「近

江学園」を設立した。そこで、障害児との共同生活を通し、当時の貧しい福祉政策の中で先駆的な福祉教育を実践するとともに、障害児のための職業施設などを設立した。

糸賀は大正三年（一九一四）、鳥取市に生まれた。昭和十四年（一九三九）、京都大学を卒業し、滋賀県庁に務めた。秘書課長、兵事厚生課長、食糧課長などを歴任した後、県庁を辞め、「近江学園」を設立した。糸賀は「この子らを世の光に」と

言っている。憐れみの政策ではなく、この子らは自ら輝く存在であるから、いよいよ磨きをかけて輝かしたいという。糸賀の説く福祉の指針を求めて多くの人が学園を訪れた。

講演や相談の依頼も相次ぎ、大学での講義なども行う一方、ふるさと鳥取へもしばしば足を運び、助言や指導に当たっている。

昭和四十三年（一九六八）九月、講演中に倒れ、子どもたちに見守られながら五十四歳で亡くなった。

有隣荘

鳥取市国安
J R鳥取駅よりバス十五分 国安上
下車、徒歩三分

鳥取平野南部の国安にある旧西尾家住宅は、現在は有隣荘と名付けら

れ、会食や茶会など広く市民に利用されている建物である。国安は大正七年（一九一八）の千代川の大洪水で甚大な被害を受け、集団移転を行った。西尾家は宮大工も加わり五年の歳月をかけて昭和四年（一九一九）に竣工した。因幡地方では、明治以降、智頭の米原家（明治三十年頃）、石谷家（昭和二年頃）、若桜の木島家など素封家の贅を尽くした住宅が相次いで造られるが、西尾家もその一つである。建物は主屋・離れ・母の間の三棟が池泉回遊式庭園に対して雁行形に配置されている。

主屋は棟を高く上げた入母屋の瓦葺き屋根を載せ、軒を二重に廻した豪華な造りとなっている。屋敷の角にある表門も入母屋の屋根を載せ、門扉はクスノキの一枚板が使われている。その脇には樹齢二百年を超えるとされるシイの木があり、旧家としての風格を伝えている。主屋の奥には茶室などの建物が付設している。西北にある本格的な池泉回遊式庭園は、広大な敷地の西側にせり上がるように樹木を配し、南の八坂山を借景にした庭園は京都の庭師によって造られたものと言われる。

茶室と奥座敷からなる「梅の間」

は旧藩主池田家より拝領したもので、旧屋敷より移築されたものである。花頭窓を床脇に設け、緊張感のある禅宗風書院造となっている。

昭和三十六年（一九六一）に米原家の所有となり、迎賓館として改修された。昭和六十年（一九八五）の「わかとり国体」を機に増改築を施し庭園を整備して一般に開放され、以来、鳥取市の奥座敷として広く利用されている。

福田家住宅

鳥取市紙子谷
J R鳥取駅よりバス二〇分、紙子谷下車、徒歩七分

福田家は、代々庄屋を務め、二十代も続いた家柄と伝えられる。その主屋は復元すると桁行八間・梁間四間の広間型三間取になり、いわゆる「四八」と称される大規模民家である。現在は庇を付けて拡張されて、桁行九間・梁間五間で、部屋数も多くなっているが、外壁は土壁を塗廻した大壁の古風なつくりとなっている。屋根は、妻上部に三角形の煙抜きのある入母屋造の茅葺屋根で、棟には因幡地方独特のガラスオドリがのっている。

屋根裏の小屋組は三百田氏住宅に似ているが、土間廻りだけでなく、

納戸廻りにも入側柱が入り、桁行梁も入側列に架かっており三百田氏住宅より古い構造形式を伝えている。

柱や梁などの主要構造部材も手斧ではつったままであり、大黒柱だけでなく側柱も太い。また、畳を敷いていたのは「おくのま」だけだったと見られ、他の室の柱間寸法は畳の納まりを考えずに設定してある。土間に取りつく床框（敷居）も柱芯に納まり、柱間寸法などは畳の納まりを考えたものでないことがわかる。

柱配りや、構架材に比べて柱が太く安定している点に特色があり、古風な手法が見られる。建築年を示す具体的な史料はないが、部材の大きさ、仕上げの状態から見ると、江戸時代初期を下らぬ建築と推定できる。昭和四十九年（一九七四）二月に国の重要文化財に指定された。

倉田八幡宮

鳥取市馬場宮田
J R鳥取駅よりバス二〇分、八幡神社口下車すぐ

社伝によると元正天皇の養老年間（七二七～七二四）、応神天皇、仲哀天皇、神功皇后の三柱の神を宇佐八幡宮から勧請し、因幡平野開拓の守護神として奉祭したと伝えられている。元暦年間（一一八四～一一八五）、

後鳥羽天皇のころ大江広元は因幡守いなほのかみに任せられるや、直ちに倉田八幡宮の境内を拡張し、社殿造営の工事を行った。本社は因幡の古社として、特に將軍家の尊敬が厚く、代々の国守豪族もまた敬神深く、そのため千百余石の神領を持ち、因幡の大社として全盛を極めた。

社殿廻廊は拡大されて、本殿・弊殿・拝殿・神楽殿・奏樂社・神饌所・神門・神輿庫・神馬舎・宝庫・納額所・透塀・雑器所・休憩所・社務所・參籠所等一大靈域を形成していた。

当時は因幡一円はもとより、他地方からの参拝人があふれ、春秋二回の渡御祭の祭事は当国随一の盛事で、広大な門前町を形づくっていた。神域は国安集落から、大覚寺にいたるじつに広大な地域で、山陰道では出雲大社につぐ大社であった。

天正九年（一五八一）六月、羽柴（豊臣）秀吉が当国に攻めいったとき、兵火にかかり、境内の社殿、社宝ごとく焼失して、神職も四散し、往時の姿はなくなった。

その後、河島大宮司が小社を再建し、藩主の寄進、奉納によって規模は拡張されていった。明治十二年

（一八七九）六月、旧号の八幡宮に復称した。

昭和十八年（一九四三）の鳥取大震災には本殿以下十三棟が全壊し、二十年（一九四五）十一月には終戦により社格は全廃された。現在の本殿は、昭和二十四年（一九四九）七月に造営されたものである。

当社の獅子舞は因幡地方に伝わる権現堂古流より古い型で、古式豊かな崇高な舞いである。元禄時代から氏子中の蔵田から奉納することになっている。

社叢は主にタブノキからなるが、エノキ、ムク、シイなどの大株もある。イチヨウの老木は雌木で根周り一〇メートル、樹高四〇メートル、樹齡千年におよぶ大木である。タブノキの巨樹に富む社叢として有数のものであり、昭和九年（一九三四）三月、国の天然記念物として指定されている。

円通寺人形芝居

鳥取市円通寺に伝わる人形芝居。

江戸時代、藤右衛門という人物が当地に伝わる七七調の労働歌「円通寺節」や盆踊りの口説きに合わせて人

形を操り芝居することを考えついたのがその始まりといわれる。明治・大正時代には、農村娯楽として流行し、多数の座元が存在し各地に巡業したという。

特徴は三味線・鼓弓・太鼓の伴奏に合わせて唄われる「円通寺節」と、人形芝居の口上との融和である。

題材は、他に例を見ない「三吉テコ」に始まり、祝福芸能「大黒舞」、鳥取の伝説的な英雄が活躍する「平井権八」など地方色豊かなものから「京都心中」など悲恋物語まで多様である。同保存会では、円通寺人形芝居伝承館（鳥取市円通寺）で練習・上演（不定期）しており、興業

に出かけることもある。

昭和五十九年（一九八四）に県の無形民俗文化財に指定された。また、昭和六十年（一九八五）には、国の記録作成などの措置を講ずべき無形民俗文化財として選択された。

円通寺節

鳥取市円通寺

千代川流域の鳥取市円通寺に伝わる労働歌である。

元和三年（一六一七）、姫路から鳥取に転封してきた池田光政は、寛永九年（一六三二）に岡山へ移るまでの間、後世に「三十二万石」と称される池田家隆盛の礎を築いた。なかでも鳥取城の修築と城下町整備は光政の偉業にあげられる。

鳥取市内円通寺からは、この敵しい土木作業に多くの人々が駆り出された。そして、その作業に併せて歌われた「円通寺節」という労働歌が伝わっている。離子詞の「奴の念力（がんだりき）岩をも通す」から「念力（がんだりき）節」と異名がある。

意上奴神社

鳥取市香取
J R 鳥取駅よりバス約十五分
香取下車、徒歩約二〇分

周辺の村の総社として七社大明神



と呼ばれていた。『延喜式』に記された小社で、仁寿年間（八五―八五四）に正六位上の神階を授けられている（社記）。

『延喜式』所載の神社名「意上奴」は、古事記や万葉集・日本書紀などの読みでは、「オカミノ」と呼ばれていたと考えられる。「イガミヌ」と読ませたのは、明治初期の神社制度確立期の神官によるもので、祭神も速須佐之男命と保食神とされている。「オカミ」は、『万葉集』では「わが岡のおかみに言ひてふらしめし、雪の掛けしそこに散りけむ」とあり、岡や水辺にすむ龍蛇の神で、水を司る神と信じられていた（岩波・古語辞典）。以上のようなことから、意上奴神社の祭神は、水を司る水神と解される。

また、スタシイを主とした社叢は、常緑広葉樹林の自然植生をよく残している。昭和四十九年（一九七四）四月四日に鳥取市の天然記念物として指定された。面積は約三・九平方キロメートルである。鳥取県は、昭和五十年（一九七五）に、既指定地区を鳥取県自然環境保全地域の特別地区に、その西・東の緑地区四平方キロメートルを普通地区に指定した。

社叢の高木層では、胸高直径二メートルもあるスタシイが優占し、直径一メートルを超えるタブノキやウラジロガシも混在している。その下の亜高木層にはヤブツバキやサカキなどがみられ、低木層には若いスタシイの個体が多く極相林の様相を示している。

越路雨乞踊

鳥取市南東部、越路に伝わる風流芸能の雨乞踊。記録によると、江戸時代中期、宝暦六年（一七五六）には踊られていたことがわかっている。雨乞踊は、本来、干ばつの時に降雨を祈願するものであるが、当地区では雨を授かったことの願開きとして、神に感謝する踊りとして傳承されてきた。現在も、雨乞いをして降雨があつた年の秋に奉納されることになっており、近年では平成五年（一九九三）に行われた。昭和三十四年（一九五九）に県の無形民俗文化財に指定されている。

踊り子は、浴衣に前掛け・手甲・脚絆の揃いの衣裳を身に着け、頭には花笠を被る。花笠の後ろ側に付いている水色の布は雨を表しているという。この格好は、中世の絵巻物な

どに描かれる「風流踊り」の姿に似ており、雨乞踊の起源を中世に求めることができる。

越路の雨乞踊には、現在十曲の演目が伝えられている。まず、道化役のささら摺りを先頭に、棒振り・笛吹・子踊り・新発意・本踊り・地方の総勢五十名が「入端」という曲で踊りながら越路神社に向かい、境内では、陣笠・陣羽織姿の新発意が口上を述べて、地方が歌を唄い順に踊っていく。九番の踊りが終わると、最後に「稗田」という曲を踊りながら神社から退場する。

史跡 空山古墳群

鳥取市香取 広岡
JR鳥取駅よりバス二〇分
香取下車、徒歩二〇分

鳥取市の南東、空山の山腹にあり、横穴式石室を主体とする約七十基の円墳からなる因幡地域有数の古墳群。ほとんどが、直径十数メートルの小規模な古墳で、六世紀後半から七世紀初頭頃に築造されたものと推定される。

古墳群のうち、空山二号墳、九号墳、十号墳、十五号墳、十六号墳の五基の石室内には、人物、魚形、鳥形、舟形、三角紋などの線刻絵画が描かれている。十五号墳を除き、破

壊が激しく、いずれも古くから開口されており、後世の追刻も多いため、本来の線刻画の実態は不明。九号墳を除く四基が県史跡に指定されている。

史跡 防ヶ塚古墳

鳥取市広岡
JR鳥取駅よりバス二〇分
香取下車、徒歩二〇分

標高約五〇メートルの丘陵東斜面の裾部に立地する円墳。墳丘の遺存状態は良好で、直径は約一三メートル、高さは約三・三メートル。横穴式石室は、全長が約七メートルで南東方面に開口し、玄室の天井部は、中ほどの天井が高くなる「中高式」となっている。石室内の壁面には、多くの幾何学模様状の線刻が見られ、とくに羨道右側壁には、石室入口に向かって両足を開き弓を大きく引く約一九センチの人物像が写実的に描かれている。周辺丘陵には、百基あまりの古墳が存在し、広岡古墳群を形成している。昭和五十六年（一九八一）に県史跡に指定された。

〔湖山池・白兔周辺〕

湖山池

JR鳥取駅よりバス二〇分 青島公園下車すぐ

鳥取市の西に位置する汽水の海跡



湖。面積は六・九平方キロメートル。これは、日本の湖沼では三十二番目の大きさで、汽水の海跡湖では十七番目、池と名の付く湖沼では日本一である。池の周囲は一八キロメートル、平均水深は二・八メートルある（池の北端にある竜ヶ崎沖で最大水深は六・五メートルである）。富栄養湖で透明度は一メートルである。更新世最後のリス・ウルム間氷期に古砂州が湖山地の北方および西方に達し、「古湖山地」ができた。完新世になって海面は低下したが縄文海進により海とつながった。その後海退により潟湖ができた。

池の南東の湖底から弥生時代の土

器・土師器が出土している。これにより地形形成の時期が推定できる。池には青島、猫島、津生島、団子島などがある。青島、猫島はかつて、トンボ口により陸続きになっていたと考えられる。

湖山地は海岸まで一、二〇〇メートルしかなく、湖山川を通して海水の流入もある。夏期には、ヨシ、マコモ、エビモ、アオミドロなどの植物とタニシ、カラスガイ、モクズガニなどの底生動物、コイ、フナ、シラウオなどの魚類が生育し、冬はマガモ、コガモなどの水鳥やプランクトンも多い。

また、冬になると池の西岸で石がま漁が行われ、冬の風物詩となっている。かつては池が凍結した記録もあるが、近年は見られない。一方、夏には赤潮が発生することも多く、湖山地の公園化が計画され、水質保全が図られている。

伝説

数百町歩の湖山地全体は、もとは湖山長者の水田であった。ある年、田植をするため早乙女を集めて植えさせたところ、猿に気をとられ、一日のうち植えることができなかったので、長者は残念に思い、黄金の扇子をもつてきて、西の山に沈もうとしている太陽をさし招いた。すると太陽は少し後にもどった。次の年もやはり田植えが一日で終りそうになかったので、扇子で太陽を後に戻して田植えを行った。

安心し翌朝、田んぼを見てみると、田んぼは水の底に沈み、茫茫たる湖水になっていた。

石がま(漁)

鳥取市湖山地で厳冬期に行われる、独特の漁である。石がまとは、湖底にフナの通路を確保して積み上げた石積みで、その形が釜を伏せたようであることから名付けられたという。地元ではツジとも呼ばれる。



江戸時代初期から行われていたとも言われるが、明確ではない。地元には、嘉永六年（一八五三）に普請が行われたという資料が残っている。

石がまを上から見ると、池の中央方向を上にしたホームベースに近い形をしている。石がまの奥には、フナを追い込む扇状に開いた板が立ち、その根本にはドウカンと呼ばれる箱が埋め込まれている。

石がま漁は、一月末頃、一日かけて行われる。人々は物音を立てないように近づき、石がまの上方から突き棒で、隙間を突き、フナをドウカンの方に追い込む。突く作業は休み

なく続けられる。

追い込みが終わると、ドウカンを仕切り、文字通り一網打尽する。この瞬間が、石がま漁の醍醐味である。近年は漁獲量が減少したといわれるが、現在でも二〇〇〜三〇〇キロのフナの漁獲量がある。平成十三年（二〇〇一）現在、漁が行われる石がまは二基しかない。

防己尾城跡

鳥取市金沢
J R鳥取駅よりバス二十五分、
松原下車、徒歩四〇分

湖山池西南の水面に突きだした、標高三八メートルほどの丘の上にある。今も本丸、二の丸、三の丸といわれる曲輪（削平地）が残っている。当城のみどころは、西南部に続く尾根を遮断する大規模な堀切である。これによって、池中に孤立する堅固な城郭となっている。なお堀切は、現在は池を周回する道路となっている。十七世紀末に書かれた『因幡民談記』には天正年間（一五七三〜一五九一）の初めに、吉岡将監が築いたとあるが、確かなところは不明である。

吉岡氏は、室町時代には吉岡荘（鳥取市吉岡あたり）の荘官であった。天正九年（一五八一）の羽柴

（豊臣）秀吉の鳥取城包囲戦の際には、毛利方に属していた当城へ羽柴軍がたびたび押し寄せ、激しい戦いが繰り広げられたが城の守りは堅く、羽柴軍をそのたびに撃退し、秀吉の馬印が奪われたこともあった。鳥取城開城直後に吉岡氏が城を出て、廃城となった。

史跡 天神山城跡

鳥取市松保・布勢
J R鳥取駅よりバス十五分、
布勢下車、徒歩二〇分

湖山池西端の標高二五メートルほどの丘を中心に、周辺の平地を取り込んで築かれた中世の城館。江戸時代終わりごろの「田畑地続全図」や、戦後まもなく撮影された空中写真から、丘の周囲に二重・三重の堀・土塁がめぐられていたことがはっきりとわかる。

また、南方の宇山も取り込むように堀が掘られていたことも確認できる。これらの絵図や写真は、この地方の築城技術を知る上で重要な資料になるものである。

十八世紀末に書かれた『因幡志』は、文正元年（一四六六）に、守護の山名勝豊が守護所として築いたとするが、確かなところは不明である。ただ、室町期から戦国期前半に因幡

の守護所であったことは間違いない。永禄六年（一五六三）、山名豊数は一族の山名豊弘を擁する武田軍に敗れ、当城を放棄したようである。

城跡は現在、鳥取農業高校の敷地や宅地となっている。高校の背後の丘の上には削平地が残っているが、平地の部分は破壊され、往時の面影はない。鳥取県の史跡に指定されている。

双盤念仏

鳥取市湖山の浄土宗寺院、水中山栖岸寺に伝わる仏教民俗芸能。双盤という鉦を撞木で叩きながら念仏を唱えるという全国的にも珍しい形態の法要である。

双盤念仏は、本来、一千日間念仏を唱え続け、一千日目を迎えた日に奉納されたものであったが、現在では三年ごとに、四月上旬の三日間だけ披露される。双盤念仏の奉納は一流れといい、双盤の打ち方、念仏の唱え方にもいくつもの種類があり、その指示はすべて「上鉦」の役鉦と念仏によって指示される。鉦の音の抑揚、撞木の上げ下げ、念仏の節回

しなど、十数人の講員全員が、一つにまとまることによって双盤念仏の荘厳な響きが出る。

昭和三十八年（一九六三）に県の無形民俗文化財に指定されている。

和泉式部産水の井戸

鳥取県湖山

平安時代の歌人、和泉式部が産湯を使ったと伝えられる。

伝説では、大江定基が因幡守となつて当地に赴き、国府町山谷村の宝生山円城寺の千手観音に参詣して授かったのが式部であるとされる。式部親子は湖山の地に住んだと伝えられ、他にも胞衣塚や屋敷跡がある。

しかし、大江定基が因幡守であったという記録はなく、和泉式部の父であった事実もない。おそらく大江定基の屋敷跡とされる「宇文」の地名とそこに湧く「泉」があつたことによつてできた伝説であろう。さらに、円城寺には式部伝説を語り伝える女性唱導者の一挙点であつた千手観音の縁起と「泉」の由来が混合してできた伝説と推測される。

大野見宿禰命神社

鳥取市徳尾
JR鳥取駅より
バス一〇分、徳
尾下車すぐ

『延喜式』に記載のある古社である。祭神として大野見宿禰を祀る。『日本書紀』によれば、この神は、垂仁天皇の時代に大和国の当麻跡速と相撲をとって勝ったという相撲起源伝承の神である。また皇后の葬儀の時、殉死の風習を禁じて埴輪を墳墓にたてることを言上した。社伝ではその功績によって、この地を朝廷から与えられたという。この神を主に祀ったのは因幡の土師部で、宿禰の徳を慕った人々は、めいめい手に土をもってきて報喜したため、長年の間に堆積して一つの丘になったという。現在も神社のある丘は、こんもりした森を形成し、俗に「徳尾の森」といわれている。

大野見宿禰命神社

鳥取市徳尾
JR鳥取駅よりバス一〇分、徳尾下車すぐ

社叢は小丘全体で、地形や方位に対応し林相に若干の差異がみられるが、総じてスタジイモチノキ群落が多い。一方、平地に近接する陰湿な斜面ではタブノキーモチノキ群落がみられ、平地の森林の極相を示す

照葉樹林の典型として昭和九年（一九二四）八月に国の天然記念物に指定された。

特にモチノキが全体の三分の二を占め、比較的大きなものだけでも五百本もありモチノキの多い社叢としても貴重である。この他、ヤブツバキ、カクレミノ、クロキ、トベラ、タラヨウ、ヤツデなど常緑広葉樹が大変多く、鳥取平野に残された典型的な照葉樹林として学術的な価値が高い。



田賀久治

田賀久治は、四十年間にわたって鳥取砂丘を撮り続け、「砂丘の田賀」と言われた写真家である。

大正七年（一九一八）、鳥取市徳尾に生まれた。写真館を営業するかたわら山陰海岸などを撮影している。

土門拳との出会いが、写真家としての田賀に決定的な影響を与えた。土門拳は『古寺巡礼』撮影のため、鳥取県をしばしば訪れていた。このとき国府町の岡益石堂、三朝町の徳山三仏寺を案内したのが田賀だった。田賀は、写真を撮ることへの土門の執念を見た。また、土門に砂丘を撮れ、と強く勧められた

昭和三十年代、砂丘は植林や観光客で急速に変化していた。ゴミと土と雑草が目立ち始めていた。田賀は砂丘の美しさをせめて映像に残そうと、砂丘を追い続けたのである。

昭和四十四年（一九六九）『砂丘』連作で二科賞を受賞し、昭和四十七年（一九七二）には「日本写真家協会年度賞」を受賞した。これらの功績から昭和五十四年（一九七九）に鳥取市文化賞を受賞した。田賀の作品はアメリカの写真年鑑『ライフタイム』にも紹介された。昭和六十一年（一九八六）、六十八歳で死去。写真集に『砂丘の幻想』『源境』がある。

桂蔵坊・おとん女郎

因幡地方には狐に関する昔話があり、比較的よく伝わっており、郷土玩具（土人形）のモチーフにもなっている。

桂（経）蔵坊というのは、鳥取城のあった久松山に棲み、池田の殿様に仕えていた狐である。江戸まで二百里の道のりを三日で往復するという健脚を生かして飛脚の代わりを務めていたが、ある日、畏にかかって死んでしまった。殿様は憐れんで祠を建てて祀ったという。この祠が久松山中腹の中坂神社である。

また、おとん女郎とは、立見峠（鳥取市本高野坂間の峠）に出没した狐で、若い女に化け、人をだまして頭を剃るという特技をもっていたという。

布勢の山王

天神山城跡の頂参照
JR鳥取駅よりバス一〇分、布勢下車

鳥取市布勢天神山の南に連なる小山を卯山という。卯山の山腹に鎮座するのが日吉神社で、布勢の山王様と呼ばれている。興国年中（一三四〇）一三四六、山名時氏が因幡国

守護職のとき、近江（滋賀県）の坂本から日吉神社を勧請して祀ったのがはじまりという。大己貴命、大山祇命、猿田彦命を祭神とする。

小児の瘡の守護神として厚く信仰され、社殿のくくり猿を持ち帰ると子供の病気が治るといふ。

五月十五日の例祭には、参拝者で賑わう。また、山上からの湖山池の眺めはすばらしい。

尾車文五郎

尾車文五郎は、初めて東京相撲（現在の日本相撲協会の前身）で活躍した郷土力士で、名力士・荒岩亀之助を育てた。

現在の鳥取市湖山地区に生まれた。本名は勝山芳蔵。明治四年（一八七二）三月に入幕し、同十年（一八七七）十二月に引退した。力士としての成績よりも大関・荒岩、横綱・大砲を育てた親方として名高い。

「湖山のおおめしぐらい」という話が伝わっている。スルメ二十枚をおかずにして飯二升を食べ、このあと茶屋で饅頭二百個をたいらげ、さらに箆いっばいに蒸したイモをほお

ぱり、それでやっとな腹になったという。

鳥取市湖山町北二丁目に、「尾車文五郎墓」と刻まれた力士塚が建てられている。また、湖山地区の二本松に文五郎の遺髪が埋めてあり、その碑が国道沿いにある。

史跡 布勢古墳

鳥取市布勢
J R 鳥取駅よりバス十五分
布勢下車、徒歩七分

湖山池東岸の日吉神社後背丘陵の尾根に立地する西向きの方後円墳。全長約六〇メートル、後円部径約二四メートル、高さ六メートル、前方部幅二〇メートル、高さ五メートル。昭和四十七年（一九七二）宅地造成のための立木伐採によって発見された。保存状態は良好で原形をよく残しており、同四十九年（一九七四）に国指定史跡となった。

後円部附近では土師器・須恵器片が、また前方部先端では円筒埴輪片が出土し、これらの遺物より六世紀代に築造されたものと推定される。発掘調査が行われていないため、内部構造および外部施設などは不明。

湖山池周辺では、ほかにも大型前方後円墳が見られるが、当古墳は、南方約一・五キロメートルに位置す

る楕圓一号墳（全長九二メートル）に次ぐ規模のもので、古墳時代後期における因幡地方の有力首長の墓と考えられる重要な古墳である。

県立布勢総合運動公園

鳥取市布勢
J R 鳥取駅よりバス十五分
布勢下車

県立布勢運動公園は、昭和五十九年（一九八四）八月に県内で初の都市公園として、県民のスポーツの振興と体力の向上を図ることを目的に設置された。

五二ヘクタールの園内には、一周四〇〇メートルの全天候型特殊合成ゴム舗装された第一種公認競技場のほか、野球場、二つの補助競技場、多目的広場、テニスコートがあり、昭和六〇年（一九八五）の「わかとり国体」、「全国身体障害者スポーツ大会」や平成七年（一九九五）の「鳥取インターハイ（全国高校総体）」の主会場でもあった。

平成七年（一九九五）には、約三、五〇〇人収容できるメインアリーナとサブアリーナを備えた「鳥取県民体育館」が整備された。

このほかに、ソメイヨシノ約千本が植えられた「桜の園」や「せせらぎの庭」、遊具を備えた「おもし

る広場」などがあり、県民の憩いの場としても活用されている。

開館時間 午前九時～午後四時三〇分
休園日 一月一日

問合せ先 ☎ 0857・28・7221

桂見遺跡

鳥取市桂見
J R 鳥取駅よりバス二〇分、倉美下車、徒歩五分

湖山池南東岸の標高一メートル前後の低湿地に立地する縄文遺跡。昭和五十一年（一九七六）、ほ場整備の工事にもない発見された。

縄文時代から古墳時代までの遺物が出土したが、とくに特殊泥炭層から多量の植物性食料残滓、木製品が出土して注目された。同層からは、縄文時代中期末から後期初頭の中津式を主体とする土器や、石斧柄・櫂・木鉢・槍状・弓状の木製品、石鏃・石斧・石錘・石皿・磨石・敲石・石匙などの石器類が出土し、また、スタジイ、アカガシ、トチ、オニグルミ、ヒシなど、堅果類を主とする食料残滓も見つかった。当時の人々の食生活や生活環境の実態をうかがわせる貴重な遺跡である。

なお、平成五年（一九九三）以降の調査で、縄文時代後期中葉（約三千五百年前）の二隻の丸木舟が発見

された。一隻は、全長七・二四メートル、最大幅七四センチ、深さ三三センチと現存する縄文時代のもとしては最大級のものである。もう一隻は、全長六・四メートル、最大幅七〇センチ、深さ一〇センチのもので、波の低い内海で用いられたものと推測される。

いづれも平成十三年（二〇〇一）に県の保護文化財に指定され、現在、県立博物館で展示されている。

森林公園とつとり 出合いの森

鳥取市桂見
J R鳥取駅より車で約十五分

七七ヘクタールの敷地内にはさまざまな植物や樹木、そして自然を楽しむための設備が設置され、その名のとおり四季折々いろいろな自然に出合い、ふれあいを深めることができる。

約一・四ヘクタールの芝生広場は、平成十年（一九九八）四月に開催された第二十二回全国育樹祭の会場にもなった。展示館では、里山の四季や動物たちの森での生活などを紹介している。

また、園内には明治三十七年（一九〇四）に鳥取県に初めて導入された二〇世紀梨の親木が三本あり、

「とつとりの名木一〇〇選」にも選ばれている。

春はヤマザクラ、ツツジの花に彩られ、夏はコナラやソヨゴなどの緑が美しく、秋は広葉樹林が赤や黄色に色づき、一年を通じてさまざまな表情を見せ、散策路・自然探勝路に適している。

開園時間 午前九時～午後五時

休園日 年末年始

問合せ先 ☎ 0857・26・7416

吉岡温泉

鳥取市吉岡温泉町
J R鳥取駅よりバス三〇分 吉岡温泉中央下車すぐ

湖山長者の伝説で知られる湖山池の南岸約一キロメートル、鳥取市吉岡温泉町の吉岡川に沿って湧出する



山峡の閑静な温泉である。湧出区域は東西一八〇メートル、南北二〇〇メートルの範囲である。泉源は九井あるうち四井が利用され、集中管理されている。湧出量は毎分九一七リットルで、無色透明の単純泉である。平均温度は四十八度、吉岡花崗岩と呼ばれる花崗岩の割れ目に沿って湧出している。

温泉の発見は、十世紀とも十四世紀ともいわれるがはっきりしない。鹿野の亀井武蔵守の所有する「亀井殿湯」があったといわれ、江戸時代には藩主の入浴する「一の湯」、「二の湯」、「株湯」や、傷やおできを治す「瘡湯」、屋根のない馬湯などがあつた。

温泉周辺の地質は花崗岩で、それを切る二方向の断層の交点に温泉が湧出する。鳥取地震の際にできた活断層の「吉岡断層」は温泉のすぐ南を東西に走る。国民保養温泉地。

伝説

一〇〇〇年の昔、この村に住む眞岡長者の美しい娘が顔に悪疽を病み嘆き悲しんでいた。ある夜、夢の中に曰くろる信仰して

いた薬師如来が現れて、柳の下に霊泉のあることを教えた。これで難病もたちまち快癒したことから、その薬効はあちらこちらに伝わった。

岩坪神社

鳥取市岩坪
J R鳥取駅よりバス四十五分

鳥取市の西南の郊外、砂見谷の奥に位置する。集落の上手、谷川の上流に、岩盤が水にえぐられてできた滝壺がある。岩坪という名もこれから出たものと考えられる。滝壺の上には、古く坪大明神といわれた神社がある。現在は岩坪神社と呼び、伊邪那美神を主神とする。

この神社の獅子舞は、雄獅子、雌獅子二頭で舞う珍しいもので、昭和三十四年（一九五九）六月に県の無形文化財に指定されている。付近には松上三所大菩薩を祭る成就院もある。

成就院

（岩坪神社の項参照）

山号を松上山といい、鳥取市立川にある大雲院の末寺である。明治維新になって神仏混淆を禁止したとき、松上神社から大日、観音、弥陀

の三尊を分離してここに安置したので、松上三所大菩薩といわれる。大日は高さが一・四メートル、観音と弥陀は一・八メートルあり、いずれも木彫りの立像である。刀法優秀で鎌倉前期をくだらないものといわれている。

おおわさみのみこと 大和佐美命 神社獅子舞

鳥取市上砂見

佐美命神社に奉納される獅子舞。

毎年十月十七日前後の日曜日、同神社の例祭日に奉納される。「正統権現流」と称し、鳥取東照宮（現在の榑谿神社）の権現流から習ったと伝えられている。中砂見の大湯棚地区と上砂見地区の二カ所に伝わっており、大湯棚の獅子舞を雄獅子、上砂見の獅子舞を雌獅子と呼んでいる。舞のテンポは非常に緩慢であるが、時に勇壮な動作を盛り込み、神々しく厳肅な雰囲気になり上がりをもせる。狼々の先導による二人舞で神前より出発し、練り込み、腹這い、返しなど一定の形式に従って参道をジグザグに進み二往復する。

普通獅子舞は神前に向かって進むが、当地のものは神前より出発することから、これが神の権化と認識さ

れている。

大湯棚の獅子舞に用いられる獅子頭は、江戸時代中期に鳥取で製作されたと伝えられ、獅子頭の傑作として昭和二十九年（一九五四）に県の保護文化財に指定されている。

やはぎ 矢矯神社社叢

J R鳥取駅よりバス二十五分、矢矯口下車、徒歩一〇分

鳥取市の郊外、湖山池の南にある吉岡温泉を経由し、さらに湖山川を約四キロさかのぼると矢矯集落に着く。集落入口の道路沿いにひときわ目立つ老木の茂った矢矯神社が見える。

社叢は自然な林の状態がよく残り、社殿前方の傾斜の緩やかな湿潤の土地には胸高直径が二〇〇センチのタブノキや八〇センチのウラジロガシの巨木がうっそうと茂る照葉樹林である。また、亜高木にはヤブツバキが優占するほか、ホオノキやコハウチワカエデなど山地性の落葉樹も出現する。林床にはムサシアブミ、ミゾシダ、ミヤマカタバミ、ツタウルシなどが目立つ。

社殿の裏斜面は主にウラジロガシ、モチノキが多く、サカキ、アカシデ、タブノキなどが構成するウラジロガシ林である。

北東に開く谷筋の奥に位置するためか、ツノハシバミ、ツルシキミなど冷温帯域に生育する植物が混じっていることも注目され、昭和三十一年（一九五六）三月に県天然記念物に指定された。

あそづ 安蔵公園

鳥取市河内
J R鳥取駅よりバス約四十五分、安蔵下車、車の場合は約二十五分

市街地より約二五キロ、山の中腹に整備された四・六ヘクタールの公園内にはテニスコート、木製遊具、などが設置されているほか、冬はスキーが楽しめるスキー場があり、休日には家族づれなどで賑わっている。

また、近くにログハウスやオートキャンプ場などの宿泊施設を備えた安蔵森林公園がある。
開園時間 午前九時～午後四時（テニスコートは午後五時まで）
休園日 火曜日（テニスコート）
問合せ先 ☎0857・56・0293

まつがみ 松上神社の サカキ樹林

鳥取市松上
J R鳥取駅よりバス三十五分、松上下車、徒歩一〇分

野坂川の上流にあたり、国常立命を祀る神社の境内は社叢をなし、サカキ、スダジイ、タブノキ、カゴノキなどの常緑広葉樹がよく繁茂し、

サカキは全樹林の三分の二を占めて密生している。しかも枝と枝とが接着して連理の枝となっている所もあり、サカキの樹林として有数なものである。昭和十九年（一九四四）三月、県の天然記念物に指定された。

北海道移住の碑

J R鳥取駅よりバス二〇分、賀露大橋下車
すぐ

湖山川が賀露港に流れ込む小高い丘の上に、「釧路開拓移民出港之地」の碑が立つ。これは北海道開拓百年を記念して昭和四十三年（一九六八）十月に建立され、裏面には「明治十七年六月三日に四十一戸一九六八、明治十八年五月一日六四戸三十七人が出港した」と記されている。

北海道開拓はその初期には全国から困窮した士族を集めて行われた。碑の横にある「釧路開拓移民出港之地」という碑文石は、釧路市と鳥取市の姉妹都市提携三〇周年を記念して平成五年（一九九三）十二月に建てられたもので、釧路移住のいわれと、両市の市章が記されている。なお、鳥取県からは釧路以外にも岩見沢、江別、室蘭、根室などにも移住しており、土族以外の一般人の渡航も多かった。碑と碑文石の両脇には

両市の木であるハシドイとサザンカがそれぞれ植樹されている。

県立鳥取港海友館

鳥取市港町
JR鳥取駅から車
で約十五分

平成七年（一九九五）四月に鳥取県港湾事務所に併設して設置された。日本海の姿や県が交流を進めている対岸諸国、鳥取県の漁業を支えてきた漁法や漁具について、映像や展示物で紹介している。

開館時間 午前八時三〇分～午後五時

休館日 毎週月曜日、年末年始

問合せ先 ☎0857・28・2432

賀露港

鳥取市賀露

千代川河口に開けた漁港であり、今は鳥取港として鳥取県東部の海の玄関口ともなっている。「松葉がに」漁の基地でもあり、鳥取中央漁業協同組合が沖合底引き船八隻を有している。港の船溜まりに面して、鮮魚の直売店やカニ料理の旅館が並び、釣り宿ともなる。

一步、陸側に入れば、路地を挟んで密集した家並みが続き、漁村の風情を強く感じさせる。賀露（かろ）は、もともと加路、賀呂、軽と記載

され、地元では「かる」と発音する人も多い。語源ははっきりしない。

歴史は古く、賀露神社の社伝によると、天平勝宝六年（七五四）、遣唐使が僧・鑑真を伴って帰国した時、遣唐副使である吉備真備の船は難破し、賀露沖の小島（今の鳥ヶ島）に漂着したという。また、『日本三代実録』（寛平四年（八九三）編さん）によると賀露神社は貞観三年（八六一）に従五位の授与があったとされ、因幡国の外港として重要視されてきたことがわかる。さらに、『因幡堂薬師縁起』で名高い京都の因幡堂に安置された薬師如来像は、この賀露の湊の海中から拾われたとされており、「一遍上人絵伝」にも登場する。

江戸時代、北前船をはじめ日本海沿いに運ばれた物資は賀露湊で川舟に移され、千代川から旧袋川をさかのぼり、鳥取城下へ陸揚げされた。既に、承応二年（一六五二）には鳥取藩初代藩主・池田光仲が藩船の「川口番所」を設け、大坂への藩米の廻送も賀露を経由させた。

そのため、賀露の湊は「賀露千軒」と呼ばれ、にぎわった。幕末の元治二年（一八六四）には、お台場が二

か所設けられ大砲が据えられている。

明治に入っても山陰線（現山陰本線）の鉄道が敷設されるまでは、境港や舞鶴方面へは海運頼りであり、賀露を経由する定期船が就航していた。しかし、千代川から流出する土砂は河口の形状を変化させ、度々港を埋めた。河川の治水と防波堤工事なしには、安定した港の利用は不可能であった。昭和五十年代になって、千代川河口の付替えを含めて、新しい鳥取港の埋め立て整備が進み、今の賀露港の姿となった。

漁港としては、沖合い底引き網によるズワイガニ、カレイ、ハタハタの他、沿岸イカ釣りによるイカ類の漁獲が多い。また、小型底引き船によるヒラメやマダイ漁も盛んである。なお、平成七年（一九九五）には世界カニフェスティバルを開催し、毎年カニフェスタを行っている。賀露港の西浜地区では、海浜公園に向けた整備も進んでいる。今後とも、都市に直結した海浜観光の拠点として発展が期待されている。

鳥取港

鳥取市賀露・港町

もとの賀露港である。港湾は広く

賀露地区、千代地区、および西浜地区の三地区に分かれる。賀露大橋のたもとは、明治期に行われた北海道移住の出発地を記念する碑が建っている。とくに明治十七年（一八八四）の三十六戸、百七十五人の釧路移住は、今も釧路市に釧路町として名を残す。新しい岸壁では、荷役作業の一方、市民にとって格好の釣り場となっており、家族総出で釣り糸をたれる姿が見られる。

昭和二十八年（一九五三）、地方港「鳥取港」として、改めて整備がスタートした。防波堤や護岸など漁港としての整備が始まり、その後、鳥取市が産業都市として成長するに従って、鳥取市の外港として期待が高まった。昭和五十年（一九七五）には重要港湾に指定される。さらに、昭和五十四年には千代川の河口が東側へ八〇メートル移動され、拡張部分は埋め立てられ、一万トン岸壁一バスと五千トン岸壁三バスが造成された。平成九年（一九九八）に開設された「鳥取ポートパーク」があり、マリンスポーツの基地としてプレジャーボートの係留岸壁が造られている。さらに、手狭になった旧賀露漁港の西側、西浜地区の一部

を埋め立て、新たな漁港区の造成が行われ、平成十一年（一九九九）に西浜地区漁港区として開設された。西の境港と並び、東の海の玄関口であり、今後、環日本海交流を進める要として発展が期待されている。

賀露神社

鳥取市賀露北
JR鳥取駅よりバス二〇分、徒歩二
分

賀露神社は、大山祇命、吉備真備など五神を祭神とする。吉備真備は唐から帰国する時に流され賀露港に漂着し、その縁で祭神となったと伝えられている。いつ創建されたかは不明である。

『日本三代実録』によると、「賀露神」は貞観三年（八六一）に従五位下になり、十七年後の元慶二年（八七八）に従四位上へと進階している。賀露神社が急速にその位を上げていったのは、その頃の日本海沿岸防備に関わり、国にとっても大切な神社であったためと考えられる。また、『時範記』には、国司として因幡に下向した平時範が承徳三年（一〇九九）に当社に奉幣したと書かれている。

近世には、賀露大明神とか吉備大明神と呼ばれた。歴代藩主祈禱所と

して保護され、社殿の修理などにも藩費が給された。また、宝暦七年（一七五七）から、賀露入港の商船から、塩十俵につき銭三文を、神社修造費の名目で、「宮銭」として徴収することを許可された。

明治元年（一八六八）、現社名に改められた。

当社は特に漁業・海運業を営む人に信仰されている。今は四月の最終日曜日に祭りが行われる。祭り当日までに、若者の氏子数人が身を清め、桧の板に卯木の枝を手でもみ、すり合わせて火を起こす「もみ火神事」で聖火を得る。この火で神饌をはじめ祭事一切がまかなわれる。祭日の



午前中は、神社で祭典が行なわれ、午後には、神輿に分霊を移し、キリン獅子・神・黒鉾・赤鉾・奴行列・太鼓・武者行列を従え、神輿を御座船に移し、沖合いの小島を往復する海上渡御が行なわれる。着飾った少年の氏子が、伴船に乗り込み、漕ぎながら、太鼓に合わせホイエンヤと掛け声を掛けることから「ホイエンヤ祭り」といい、現在は二年に一度行なわれる。また、秋祭りには、近年、幼児の氏子による泣き相撲が奉納相撲の一つとして行なわれるようになり、にぎわっている。

白兔海岸

鳥取市白兔
JR鳥取駅よりバス三〇分、白兔下
社

白兔の正木ヶ端岬の東に広がる砂浜海岸と波食棚。『古事記』の神話に出る「因幡の白つぎ」伝承の地。正木ヶ端岬の沖合八メートルのところの島が淤岐ノ島で、岬と島の間につながる飛び石状に並んでいる岩が白つぎが渡ったワニの背に見立てられたもので、島の南北に広がる「千畳敷」「恋島」などの波食棚の一部である。淤岐ノ島の地質は、第三紀中新世の火山活動により形成された河原火砕岩の亜角礫岩である。



海岸の南には「身干山」や「白兔神社」、岩盤の窪地と砂丘の透水バランズで生じる水位の増減がほとんどない「不増不減の池」などがある。身干山は砂丘地であったが、砂を採取された際、地下に多数の弥生期中世までの遺物や五輪石、宝篋印塔などを出土した。また、ハマナス自生南限地として天然記念物に指定されている。白兔海岸は近年、海水浴のほか、サーフィンが盛んである。

西の小沢見海岸もきれいな海岸で、ポケット状砂丘が発達し、鳴り砂の現象が見られる。海水浴の適地として観光客でにぎわう。正木ヶ端岬からの眺望がよく、因幡一円の海岸を見ることが出来る。県の自然環境保全地区に指定され、海岸景観形成地区の指定を受けている。

白兔神社

はくと
鳥取市白兔
JR鳥取駅よりバス三〇分 白兔下車

白兔神社は大兔大明神、あるいは兔の宮白兔大明神といわれ、鳥取市白兔の小高い丘の上にある。主神は白兔神、そのほかに豊玉姫命及び保食神を合祀している。由緒については古くは古事記、日本書紀にも記されている。『延喜式』には記載されていないが大社であった。兵乱に遭い、古書などと共に焼失し、創建については明らかでない。その後、慶長年間（一五九六〜一六一五）の末、鹿野城主・亀井茲矩かめいこのりが社殿を再興し、社領二十石二斗を寄進した。さらに、池田氏が藩主となってからも厚く信奉され、近国の参詣者を集めていた。縁結び、疱瘡・麻疹などに靈験著しいとして有名である。

社殿は寛文九年（一六六九）九月と安永二年（一七七三）に再建築され、今の社殿は明治二十九年（一八九六）の建立である。例祭日は、四月十七日、十月十七日である。

明治元年（一八六八）に保食神を、ついで大正元年に川下神社（主神豊玉姫命）を合祀した。川下神社は、当初は近くの気多前神けたのまきガ岩にあり

た。白兔神社とともに兵乱に遭い、宝暦十四年（一七六四）七月に再興され、大正元年（一九一〇）合祀された。豊玉姫命は綿津見神の女神で、口碑によれば神ガ岩で庵を結び鶺鴒うがやの羽をしき鶺鴒草うがやのくさ不ふ合命あひのみことを生み、のち竜となって海に入ったのでここに祀られたとある。婦人病の神として知られている。

神話「因幡の白兔」の舞台であり、うさぎが身体を洗った不増不減の池がある。



国府町

宇倍神社

うべじんじや
岩美郡国府町宮ノ下
JR鳥取駅よりバス三〇分 宮ノ下車、徒歩五分

宇倍神社は東方稲葉山の一角の上に鎮座する。『延喜式』に記載される名神大社であり因幡国いなばのくにの一ノ宮であった。祭神である武内宿禰たけのうちのすくねは三六〇歳以上生きたと言われ長寿の神として知られる。本殿の後の丘は龜金かめがねと呼ばれ、古来、祭神ご昇天の靈跡であるといわれ、宿禰すくね双履どうりの跡と伝えられている。先年この双履の跡の下から粘土床を有する古墳が発見されたので、この小丘は円墳であることが証明された。

『諸社根元記』または『二十二社註式』に孝徳天皇の大化四年（六四八）、社壇を造るといふ記載は、おそらく当社の社殿建立のはじめであろう。嘉祥元年（八四八）、国府の西で失火があり、府舎が危険に類したが、国司が祈願に参詣したため鎮火の靈験があらたかであった、と『続日本後紀』に記載されている。

元和年中（一六一五〜一六二四）



には、鳥取藩主・池田光政いけだみつまさは社領三十石を寄付した。寛永九年（一六三二）、池田光仲いけだみつなかは備前（岡山県）から入国し、社領高を改めて寄進した。以来、歴代藩主に崇敬されてきた。

なお境内にあった国府神社は、大正六年（一九一七）九月、境内末社に指定され、七年四月には坂折・下山・白山・上・安田・小早などの六社とともに合祀された。

例祭は四月二十一日で、当日行われる獅子舞および大名行列は有名で、獅子舞は昭和三十四年（一九五九）十二月、県の無形民俗文化財に指定されている。

史跡 池田家墓所

岩美郡国府町奥谷
J R 鳥取駅よりバスで
二〇分、宮下口下車、徒
歩十五分

ここには鳥取池田家初代・光仲から十一代までを葬る。寛永九年（一六三二）年六月に家督を相続した備前岡山藩主・池田光仲は三歳であった。このため軍事・交通の要衝である岡山には光仲の従兄で鳥取藩主・池田光政が赴くこととなり、従兄同士での国替が行われた。これ以後、鳥取藩では光仲の系統が明治維新まで続いた。墓所は光仲の逝去後初めて選定調査され、元禄六年（一六九三）七月奥谷に決定した。これ以降、歴代の藩主はたとえ江戸やその他で逝去しても必ず奥谷に葬った。歴代藩主の遺骸は烏帽子、狩衣の装束で柩に納められ、一旦、菩提所である興禅寺に安置された後に葬列を以つて奥谷の廟所に納められた。初代光仲は、黄檗宗の開祖隠元和尚に帰依し、改宗したこともあり、墓碑や台座に亀趺を使用するなど、儒教的色彩の濃い墓となっている。二代綱清を除き、歴代藩主の台座には亀趺が置かれている。

歴代藩主夫人は文久二年（一八六二）までは江戸住まいし、入国を許

されなかつたので、遺骸は江戸弘福寺の墓所に埋葬された。関東大震災の区画整理により昭和五年（一九三〇）九月、弘福寺から奥谷へ改葬されたが、初代、二代、八代の夫人は宗派の関係で他へ埋葬されている。この他、鳥取藩は東館、西館と呼ばれる分家を興したが、これら東、西館の当主たちの墓もある。元来、江戸で亡くなった当主は江戸弘福寺に葬られていたが、藩主夫人同様、昭和五年九月に奥谷に改葬された。こうして現在では七〇を超える墓碑が立ち並ぶ墓所となっている。

墓所の手前の広い内庭には昭和八年（一九三三）頃まで清源寺が残っていた。この寺は、元禄七年、二代藩主・綱清が開基となり、興禅寺千岳和尚を開山として創建され、以後一切の廟事はこの寺が行い、興禅寺住職が兼務した。池田家は明治三年（一八七〇）に神道に改宗したため無檀家であった清源寺は廃寺となった。墓所にはサクラ、カエデが植えられ、春の花、秋の紅葉の眺めも良い。昭和五十六年（一九八一）に国の史跡に指定されている。

史跡 因幡国庁跡

岩美郡国府町中郷
J R 鳥取駅よりバス二〇分、国府町役場前下車、徒歩一〇分

袋川中流域の国府町中郷などの集落にある奈良時代から平安時代にかけての役所跡。周辺には、古墳群をはじめ、条里跡、伊福吉部徳足比売墓跡（国史跡）、宇倍神社などがある。

『万葉集』の最後を飾る「新しき年の始の初春の今日降る雪のいや重け吉事」の歌は、国守として赴任中の大伴家持がこの地で詠んだものである。また、十一世紀末の国守平時範の日記『時範記』によると、西門、南庭、幣殿などの施設があったことが知られる。

中心にあたる国府域は、昭和四十七年（一九七二）から同五十四年（一九七九）にかけて行われた発掘調査によって、庁集落の東端、中郷部落の南端、国分寺部落の東端、法花寺部落の中ほどを結ぶ八町四方ほどの地域であることが明らかになった。調査の際、中郷字瀬戸田、星ヶ森など国府域の北西隅で、十棟余の掘立柱建物、二条の柵、二基の井戸、道路、側溝などの国庁施設が発見された。主要な建物群は、北側の安田



地区、東側の庁地区にまで達しているものと推定され、桁行五間×梁行四間（柱間二・四メートル）の南北両面庇付掘立柱建物や、同じく五間×二間（柱間二・七メートル）の切妻型掘立柱建物等の建物跡などが見つかっている。これらの建物群は、奈良時代末から鎌倉時代初期にかけて建造されたものであり、直径三〇〜四五センチほどの柱材が良好な状態で多く残っていた。

国庁跡からは、木簡、石帯、硯、墨書土器、緑釉陶器などの多くの遺物が出土しているが、とくに「仁和二年假文」（假文「休暇届」）の墨書を残す題簽は、律令制度の一端を示

す貴重な資料である。

昭和五十三年（一九七八）、遺跡の発見された瀬戸田、星ヶ森、安田などの約三二、〇〇〇平方メートルの地域が国の史跡に指定されている。以後、史跡公園として環境整備が行われている。

因幡国分寺跡

岩美郡国府町国分寺
J R鳥取駅よりバス二〇分

律令制下の官寺跡で、寺域は国分寺集落とその周辺を含めた二町（約二二五メートル）四方と推定される。昭和四十七年（一九七二）以降のほ場整備にもなう発掘調査によって、建物跡などが見つかり、礎石は平成元年（一九八九）に町の保護文化財に指定された。

因幡国分寺は因幡国庁の南西に位置し、昭和五十一年の調査では、南門の位置や寺域を示す溝状の遺構が発見された。そこから北東約九〇メートルの位置で回廊と考えられる掘立柱建物跡、また、南門から北西約四〇メートルの場所で塔の跡が発見されている。これらの確認された遺構から、中門は国分寺集落の南端付近、金堂は細男神社の境内周辺にあったものと推定される。

国分寺は、天平十三年（七四一）、

仏の功德によって平和な国を築くことを目的として、聖武天皇が全国に建立を命じた寺院で、正式名称は「金光明四天王護国之寺」という。因幡国分寺も八世紀中頃に建立されたと考えられるが、その経緯および廃絶の時期については不明である。

なお、現在、国分寺集落にある最勝山国分禅寺は、江戸時代に再興されたものである。

因幡万葉歴史館

岩美郡国府町屋
J R鳥取駅からバス二十五分、因幡万葉歴史館入口下車、徒歩五分

万葉の歌人・大伴家持が万葉集の最後の歌を詠んだ地に、平成六年（一九九四）十月に開設された。国府町内で発見された梶山古墳を

原寸大で復元した展示物をはじめ、ハイビジョンやコンピュータを駆使して、万葉文化や因幡の歴史、民俗芸能がわかりやすく解説されている。

このほかにも、『万葉集』に詠まれた約五十種類の植物が植えられた回遊式庭園「万葉と神話の庭」や、因幡の山々や万葉の里を見渡せる高さ三〇メートルの展望台「時の塔」がある。

開館時間 午前九時～午後五時（入館は午後四時三〇分まで）

休館日 月曜日（祝日の場合は開館）、
年末年始

問合せ先 ☎0857・26・1780



物産 万葉の館

岩美郡国府町
J R鳥取駅よりバス二十五分、万葉歴史館入口下車、徒歩五分

因幡万葉歴史館のそばに建つ。万葉人の生活に大きな役割を果たしていたといわれる薬膳に注目し、地元野菜や山の恵み、薬草を用いた現代風の薬膳料理を提供している。このほか、地元特産品の展示販売している。万葉の食文化を体験、研究できる施設。

開館時間 午前十一時～午後九時（物産館：午前十時～午後六時）

休館日 月曜日
祝日の場合は翌日

問合せ先 ☎0857・27・0358

大伴家持

「新しい年の始の初春の

今日降る雪のいや重げ吉事」

鳥取県岩美郡国府町に立つ歌碑には万葉仮名で「新年乃始乃……」と彫られている。

この歌を詠んだ大伴家持（養老二年・七一八～延暦四年・七八五）は天平宝字二年（七五八）夏、因幡国（鳥取県東部）の国守（因幡守）に任ぜられた。政争に敗れての左遷ともいわれている。翌年正月一日、国庁の館で開いた新年宴会でこの歌を詠んだ。

「新しい年の始めのきょう、雪が降っている。今年もこの降り積もる雪のように良いことが重なってほしい。」

『万葉集』の四千五百十六首の最後をしめくくる歌でもある。このことから家持はこの国府町で万葉集を編さんしたといわれる。

この歌碑の右側に、国文学者・佐佐木信綱（一八七二—一九六三）の歌碑も立っており、家持の歌をたたえている。

「ふる雪のいやしけ吉事ここに
して
歌いあげむ言ほぎの歌」

これらの歌碑は、家持の歌が作られて千二百年経つたのを記念して昭和三十一年（一九六四）に建立された。

また、国府町は平成六年（一九九四）「家持大賞」を創設し、毎年優れた短歌を表彰している。



岡益の石堂

（安徳天皇御陵参考地）
岩美郡国府町岡益
JR鳥取駅からバス二〇分
岡益橋下車、徒歩二〇分

岡益集落の東方、通称「石堂の森」と称される丘陵上に立地する石造建築物で、約六メートル四方の基壇の上に、総高約二・〇メートルの石塔と、それを囲むように設けられた石障によって構成される。現在、宮内庁によって安徳天皇御陵参考地とされている。

石塔の構造は、円柱とその上に置かれた中台からなるが、円柱に施されたエンタシスと、中台の裏側のパルメット（忍冬唐草文）の浮彫は、はるかギリシヤからシルクロードを



経て伝わってきたものである。

丘陵周辺で瓦や土器が出土していることから、以前から、寺院（岡益廃寺）の存在が推測されていたが、平成九年（一九九七）から十一年にかけて行われた石堂周辺の発掘調査によって、金堂、講堂、回廊と推定される建物の柱穴跡や、瓦、土器が検出された。これらの出土遺物から、寺院の創建は七世紀末から八世紀初頭であり、また、検出された建物跡の配置から、石堂は「岡益廃寺」の塔として建てられたものと推定される。

史跡 梶山古墳

国府町岡益
JR鳥取駅よりバス三〇分
岡益橋から徒歩二〇分

標高九二・三メートルの梶山丘陵にある十二基余の梶山古墳群の中心的な古墳で、古墳時代後期（七世紀中頃）の築造と推定される。

凝灰岩製の切石で築かれた横穴式石室は、奥行き約八・八メートル、幅一・四メートル、高さ二・一メートルで、玄室、玄門、前室、羨道からなり、大正時代以前から開口していたが、昭和五十三年（一九七八）に壁画が発見された。玄室奥壁の上半分には、右向きの魚文（長さ五三

センチ）を中心に、上に曲線文や同心円文、三角文が、下に円文などが赤黄色の顔料で描かれている。

昭和五十四年（一九七九）に国史跡に指定されたが、その際、部分的な発掘調査が行われ、須恵器、土師器、瓦状土製品、刀子、鉄製棺金具、金製薄延板片などが発見された。現在、石室は、壁画保存のため閉塞され、年一回公開している。

また、平成四年（一九九二）以降の発掘調査によって、墳丘の形状が対角長約一七メートル、一辺二・五〜八・五メートルの変形八角形、前面に石垣で囲まれた高さ約二メートル、東西約一四メートルの方形壇を有するなど、特異な形態をもつ古墳であることが判明した。

志賀直哉 来訪記念碑

岩美郡国府町岡益
JR鳥取駅よりバス三〇分
岡益橋から徒歩一〇分

昭和三十一年（一九五六）十月二十日、志賀直哉は鳥取文化財協会副会長の川上貞夫や民芸運動の吉田璋也らの案内で岩美郡国府町岡益の「岡益の石堂」を見学した。古代ギリシヤ建築に特有のエンタシスと呼ばれる中央部に美しいふくらみを持つ石柱や、中国・雲崗石窟に見られ

る忍冬文様などに「格調が高いね」と感嘆した。

また、国府平野に点在する因幡三山（甞山・今木山・面影山）を遠望し「じつにやわらかな風景だね」と賞賛したという。

岡益の体験を志賀直哉は「妙」の一字に託している。長通寺境内の記念碑にはこの「妙」が彫られている。

このとき同伴した『女人文芸』同人の岡田美子の歌もこの記念碑の側面に刻まれている。

「りんどうを胸にかざりて山路ゆく七十四歳の直哉はうつくし」

史跡 鷺山古墳

国府町町屋
J R鳥取駅よりバス二〇分

古墳時代後期に築かれた円墳。規模は、直径約一〇メートル、高さ約一・五メートルで、横穴式石室を有する。昭和四十一年（一九六六）、石室内に線刻画が発見され、同五十六年（一九八一）に県史跡に指定された。

石室は、早くから開口されており、羨道全部、玄室の一部の石材が失われているが、この時期に造られた千代川右岸地域の古墳に特徴的な、玄室の中ほどの天井が高くなる「中高

式」の形態を持つ。

また、玄室の壁面には、魚、舟、鳥などの多数の線刻画が描かれている。とくに奥壁中央に描かれた魚は全長が一・二メートルに達し、左に向いた魚の線刻画は、鮭か鱒を表現したものと見られ、目、口、胸鰭、背鰭、尾鰭などの細部にわたって描かれている。側壁に刻まれた高さ一センチの舟には、帆や網も表現されるなど写実的である。こうした魚や舟の壁画は、回遊魚や渡り鳥、舟が戻ってくるように、死者の魂が蘇ることを願ったものと考えられている。

史跡 新井の石舟（石舟古墳）

岩美郡国府町新井
J R鳥取駅よりバス三〇分、新井下車、徒歩五分

国府町新井の東方の山麓に位置する古墳。安徳天皇とともに壇ノ浦から逃れてきた二位の尼（平清盛の妻）の墓とも伝えられている。昭和五十八年（一九八三）、町の史跡に指定された。

墳丘の封土のほとんどが失われているため、築造時の規模や墳形は不明。横穴式石室についても、入口部の両側壁が破損し、築造当初の規模や状態は不明である。現在、計測さ

れる石室の規模は、入り口西側の奥行きが約三・六メートル、同東側が約六メートル、高さが一・四メートルである。

石室内には、古墳時代後期（七世紀）のものと推定される凝灰岩製の切石造りの家形石棺（通称「二位の石舟」）が納められている。石棺は、長辺一九〇センチ、短辺一一〇センチ、高さ五五センチの棺と、厚さ約二四センチ、一辺約一一四センチの蓋二枚で構成され、現在、蓋の一枚は棺の上に置かれているが、もう一枚は棺の前方に転落している。そのためか、石棺内に水が溜まることが多く、その水をかき回すと長雨になると伝えられている。

史跡 栃本廃寺塔跡

岩美郡国府町栃本
J R鳥取駅よりバス四〇分、栃本下車、徒歩一〇分

袋川の支流・大石川の右岸段丘上に立地する七世紀末～八世紀前半頃の創建と推定される寺院跡。柱孔、舍利孔をもつ塔の心礎二個、建物の基壇跡や礎石などが残存し、遺跡として確認されていたが、平成九年（一九九七）から十一年にかけて行われた発掘調査によって、金堂、講

れた。

伽藍配置は、金堂を中心として、東と南に塔、北西に講堂を配するもので、これらの建物が同時期に存在していたとすると、全国に例のない特殊な伽藍配置の寺院であったことになる。また、瓦が発見されなかったことから、板葺、檜皮葺、あるいは茅葺の屋根であったと考えられる。

寺域については、西限部を示す落段状の遺構しか確認されていないため詳細は不明であるが、東西約七〇～八〇メートル、南北約七五～一〇〇メートルと推定されている。

造営時期は、出土した土器の形式から、南塔は八世紀前半、講堂は八世紀中頃と考えられ、金堂は七世紀末に創建された可能性も指摘されている。寺院は、九世紀代まで存続していたと推定されるが、廃絶時期は不明。

二個の心礎の所在する栃本字塔ノ垣下塔ノ垣は、昭和十年（一九三五）に国史跡に指定されているが、平成十年（一九九八）には、周辺地域と廃寺塔跡を含めた約一五、〇〇〇平方メートルが環境整備計画区域となった。

学行院

岩美郡国府町松尾
J R 鳥取駅よりバス三十五分 吉野
橋下車、徒歩一〇分

真言宗醍醐派の古い寺である。はじめは花慶山光寺といい、元明天皇和銅二年（七〇九）に、因幡国高草郡伏野村（現鳥取市伏野）の伏野長者の発願で創建されたといわれている。当寺の本尊薬師如来坐像は行基の作といわれ、高さ二・一八メートルある。このほかに、脇侍は左に月光菩薩座像、右に日光菩薩座像が立ち、いずれも二メートル近い威容を備えている。また、吉祥天をはじめ千体に及ぶ仏像を安置していたといわれる。中でも薬師如来は屈指の霊仏であるとして、諸国からの参詣者を集めていた。

保元平治の兵乱に遭い、著しく衰退した。安徳天皇寿永年間（一一八二—一一八四）に平清盛の妻・二位禅尼が財を投じて再建し、また平知盛および西連法師が巨鐘を鑄て寄進したと伝承する。

室町末期に世は再び乱れ、荒廃し廃寺寸前となった。近くの紹慶という豪農がその荒廃を嘆き、慶長五年（一六〇〇）に、山伏の覚行と協力して四間に六間の草堂を建て本尊を

安置した。学行院の名はこれに由来するといわれる。

本尊薬師如来は、放射状の光背をもち、八重の台座も当時のままである。日光、月光両菩薩も時代の優雅さを表わした優秀作である。吉祥天も重量感のある優れた作である。かつてこれらの諸仏が金色に輝いていたところは、その光に恐れて雨滝川に魚介類があがらなかつたといわれた。奥州（岩手県）平泉の金色堂にも同様の伝説がある。秘仏であるため、いつでもは拝観できない。大正元年（一九一二）九月に重要文化財に指定された。

大黒舞

大黒舞とは、室町時代頃から行われていた遊行民による門付けの祝福芸で、その歌は各地の民謡や芸能に取り入れられ、現在に伝えられている。

鳥取市円通寺では、要造（使用人）が旦那さんにいわれて、大黒舞を舞うという人形芝居の演目がある。豊作を祝う、めでたい内容は、観衆である農家に向けて作られたものである。また佐治村津無では、本来、盆踊の演目の中にあつた大黒舞を、祝

福芸能として伝えている。

因幡の傘踊

鳥取市横枕と国府町高岡・美歎・麻生に伝わる、長柄の傘を使い剣舞のように舞う踊り。しゃんしゃん傘踊りの原型である。

横枕では、天明六年（一七六八）の飢饉の際に、雨乞い祈願のため、神楽歌に合わせて踊り、奉納したのが起源と伝えられている。その後、農村の娯楽として、見せる芸能の要素が強くなり、二人組みで技や型を競い合う踊りとなった。現在では、毎年八月十四日、赤穂義士の装束を着た青年たちが、初盆供養のために集落内を門付けして回る。

一方、国府町の傘踊は、もともと江戸時代後期の干ばつの際に、花笠を持って踊られた雨乞い祈願の踊りが原型である。明治時代末期に高岡の山本徳次郎が、従来の傘踊りに剣舞の形を取り入れて、長柄の大傘で踊るものを考案した。踊りは、偶数人で鶴亀一対を表す高低の二人組を基本に構成されている。揃いの浴衣に白鉢巻き、白櫛の若者が勇壮に踊る。いずれの傘踊りも昭和四十九年（一

九七四）に県の無形民俗文化財に指定されている。

高岡神社社叢

岩美郡国府町高岡
J R 鳥取駅よりバス三〇分
高岡下車、徒歩一〇分

社叢は、国府町高岡集落の北北西、標高約一〇〇メートルの南向きの緩斜面に位置し、社殿後方から東側にわたる高地のスタジイ林と、低地部のタブノキ、ヤブツバキ林に分かれる。

スタジイ林には、スタジイ、ウラジロガシを主体とし、他の社叢のシイ林と大差はないが、タブノキ・ヤブツバキ林中の亜高木層にヤブツバキの老樹が圧倒的に多いことが特異な植生であり、昭和三十四年（一九五九）六月に県の天然記念物に指定された。早春にはヤブツバキの美しい花が咲く。この他、主要な構成樹としてムクノキ、ケヤキ、ホオノキ、ヤブニツケイなどがみられる。

名所 雨滝

国府町雨滝
J R 鳥取駅よりバス五〇分、雨滝下車、徒歩二〇分

扇ノ山山麓にある高さ四〇メートルの滝。氷ノ山後山那岐山国定公園の中にあり、扇ノ山火山の溶岩流からできた河合谷高原北西の縁辺部に

位置する。扇ノ山に降った雨水は、雨滝を経て千代川支流の袋川へと流れ出る。滝より上流の峡谷は、雨滝峡谷と呼ばれ急峻な谷を形成し、下流は緩やかな流れとなる。

雨滝付近の基盤岩は、新生代第三紀の鳥取層群の泥岩・砂岩層である。岩石は、新生代鮮新世火山岩類に属す安山岩で、雨滝安山岩と呼ばれている。峡谷最上流部は扇ノ山安山岩で標高約一、〇〇〇メートルの河谷高原を形成する。

周辺は豊かな自然林に覆われ、四季を通じて見事な飛瀑を見ることが出来る。炎天下の夏には避暑として最適であり、新緑の春と紅葉の秋も美しい景色を鑑賞できる。雨滝の一〇〇メートル下流には落差二〇メートルの布引の滝があり、山道を八〇〇メートル歩いた北側には二段の筥滝がある。さらに、上流にも数多くの滝があり、一部は中国自然歩道から眺めることができる。



菅野の ミスゴケ湿原

岩美郡国府町菅野
JR鳥取駅より車で五〇分

菅野湿原は、国府町菅野地内の大石川と上地川に挟まれた扇ノ山の溶岩台地の末端部、標高三九〇メートルに形成された湿原である。昔は沼であったが、泥土が深く水田化できなかつた面積の〇・九ヘクタールが湿原として残され、オオミスゴケが生育した。鳥取県内ではオオミスゴケが生育する湿原は極めて少なく、しかもこのような低標高地における湿原は貴重な存在であり、学術的に価値が高いことから昭和四十二年（一九六七）十二月に県の天然記念物に指定された。

湿原はオオミスゴケが地表面を覆い、カキツバタ、サワギキョウ、又マトラノオ、マアザミ、コバギボウシ、サワオグルマなどが流水溝を中心に群落をつくっている。この他にトキソウ（ラン科）、モウセンゴケ（イシモチソウ科）など貴重な植物も生育している。

野村愛正

野村愛正は、大正後期から昭和初

期にかけて多くの作品を発表し、広く大衆に親しまれた作家である。

明治二十四年（一八九一）、岩美郡大茅村楠城（現在の岩美郡国府町楠城）に生まれた。鳥取中学（現在の鳥取西高）を中退し、新聞記者となる。明治四十五年（一九一二）、橋浦泰雄、井上星蔭（白井喬二）、吉村撫骨らと文芸誌『水脈』を創刊し、小説を発表した。大正六年、大阪朝日新聞の懸賞小説に応募した『明ゆく路』が、二百十一編の応募作の中から一等に選ばれ、文壇にデビューした。戦時中は国府町に疎開し、児童誌『山びこ』を創刊している。晩年は連句に没頭した。昭和四十九年（一九七四）、八十三歳で死去。

昭和五十年（一九七五）、生地の国府町楠城に文学碑が建立された。また、昭和四十五年（一九七〇）には八頭郡佐治村にも句碑が建立された。

岩美町

駒馳山
岩美町・福部村

岩美郡岩美町大谷から福部村岩戸にかけての日本海に面する標高三一四メートルの山。鳥取砂丘や網代港から見ると火山の孤立峰のような姿を見せるが、火山ではない。新生代第三紀の鳥取層群の荒金火砕岩層と駒馳山砂岩泥岩層を基盤に、その上層を鮮新世火山岩類や溶岩が覆ってきた山である。地質は東南側に位置する二上山や立岩山と同じで、国道九号に沿う断層であるが、連続性が切れ、その後の浸食などにより現在の形となった。

山全体が、山陰海岸国立公園の一部で、海食崖や波食棚が発達し、凝灰岩と角礫岩の互層により、洗濯岩のようになっている箇所もある。また、節理や層理に沿った浸食地形や山体を構成する岩石が観察できる。また、海水浴シーズンには磯遊びの格好の場所となる。

福部村岩戸北方の滝ヶ浜には、幅一五〇メートル、高さ一〇〇メートル

ルの安山岩の見事な柱状節理が発達している。また、山体の荒金火砕岩層中には方解石や束沸石などの鉱物や黒色のガラス質様の松脂岩がみられ、黒曜石とよく混同される。

名勝 浦富海岸

岩美郡岩美町浦富
J・R 岩美駅よりバス一〇分
町営駐車場下車すぐ

浦富海岸は山陰海岸国立公園の一部で、鳥取県の東端に位置する。

浦富の町を中心に東へ約一〇キロ、鳥取・兵庫両県の境界である岩美町陸上鼻から、西は駈馳山の断崖が日本海におちる郡界に至る、長さ一八キロの海岸の呼称である。

絶壁の陸上・羽尾の両岬や、田後・網代の小半島は日本海中に突出し、その間に陸上・羽尾・浦富の長汀と、小栗・城原・鴨力磯の曲浦が湾入し、白砂青松がこの長汀曲浦に連なっている。浦富海岸は、岬と小砂浜の交互する裏日本式の海岸である。

西浦富海岸西側は、花崗岩質の岩石からなり、浦富海岸東側は主として火山碎屑岩類からなる。景勝のほとんどは、花崗岩に発達する割れ目や節理に支配されていて、通常、波浪や風雪の浸食を受けて海食洞窟や

洞門ができるが、加えて過去の海面変動が大きな要因になる。羽尾岬の「陸の竜神洞」、「海の竜神洞」はそのよい例で、浦富海岸には数十の洞窟・洞門があり、地殻変動や海水面変動を知る手がかりとなる。

また、千貫松島、太郎兵衛島、菜種島、松島などの離れ岩は激しい浸食作用の結果、陸地から切り離されたものである。人を寄せ付けない海食崖は標高一〇〇メートル前後の平坦面から一気に一〇メートルから数十メートルの急崖となっている。児落、菜種島、羽尾岬、陸上岬などの断崖面は節理面に沿い、日本海の激しい波浪の浸食作用によるものであ



る。これらの地形によく映えるクロマツは、季節風の影響で偏向して育ち、花崗岩の岩肌と対照的で優れた景観を形成している。

田後地区の鴨ヶ磯、城原海岸は、海の透明度も八〜二五メートルと優れていて、特異な海食地形と豊富なホンダワラなどの海藻を見ることが出来る。黒島付近にはクロダイ、イシダイなどの魚類が生息している。この地域は、海中の優れた景観を保存するために浦富海岸海中公園地区に指定されている。

かつて内務省が名勝地の調査を実施したとき、諸伯国府摩東は、浦富海岸をまねに見る名勝地と賞讃した。また、天然記念物の調査にきた故理学博士・佐藤伝蔵は、神斧鬼筆、地質学上黙過すべからざる稀有の天然記念物地だと絶賛した。文豪・島崎藤村も、浦富海岸が「山陰松島」と呼ばれていることに對し、「松島は松島、浦富は浦富」とその比類のないことを讃えた。

浦富海岸は、天然記念物として指定され、昭和二十二年（一九四七）八月には山陰八景選出の投票で第二位に選ばれ、立久恵・三朝とともに山陰三景となった。昭和三十年（一

九五五）六月には山陰海岸国立公園、ついで同三十八年（一九六三）七月十五日には国立公園に指定された。

網代・田後間の海岸線には遊歩道（約三キロ）が、また牧谷から東海岸の竜神洞間には二キロにわたり歩道が完成し、ハイキングなどにはうってつけのコースである。

《浦富海岸の動植物》

植物では、露岩地にクロマツが張り付くように自生し、この中にヤシヤブシ、トベラ、マサキ、マルバグミ、ネムノキなどの木本類、ハマベノギク、ワカサハマギク、オニヤブマオ、ツワブキなどの草本類などが随伴する。さらに砂丘ではハマエンドウ、ナミキソウ、スナピキソウ、ハマゴウなどが群落を作り、海食崖にはタイトゴメ、ハマボツス、潮風の当たる草地にはヒゴタイ、ユウスゲなどが見られる。また、クロマツ林中には山地性のミスナラが生育している。

動物では、クロサギ・イソヒヨドリなどの鳥やムラサキウニ、アカウニ、サンシヨウニ、アオウミウシなど岩礁の動物が特徴的である。

鳥取県の砲台跡

岩美町ほか

幕末の国内外における情勢の急激な展開の中、他藩同様鳥取藩も海防に力を入れてきた。天保十三年（一八四二）末頃には、藩内の各番所へ大筒が配備され、その後も増備されている。江戸近在の品川台場や大坂天保山などの台場での警備の経験があったものの、鳥取藩での台場の建設は、文久二年（一八六二）より開始された。そして、鳥取藩は浦富、賀露、浜坂、橋津、赤崎、由良、淀江、境の八か所の台場を築造した。これらの台場は、藩倉などの重要施設の防備が目的だったが、賀露と浜坂の台場は、鳥取城防備が目的だったと考えられる。海岸防備の台場の他に野戦砲台も数か所構築された。海岸砲台は文久四年（一八六四）までには完成したようである。八か所の台場の中で規模、装備では境のものが最大であった。台場は幕府の命により鳥取藩が築いたが、藩財政が逼迫していたこともあり、実際の構築費用は地元農民の労役や大庄屋らの献金に頼った。

また、完成後の守備は地元農民が

ら編成された農兵により行われた。各台場には六尾村（現大栄町）の反射炉で鑄造された砲が配備された。

しかし、新式砲が国内で生産されるようになり、設置された砲は一度も使用されなかった。そして、明治維新後の対外情勢の中、必要なくなった台場は、明治三年（一八七〇）に六尾村の反射炉の砲製造具が鑄潰されたのと前後してその役割を終えた。

現在、境、橋津、由良、淀江の県中西部の四つの台場は公園として整備されている。遺構をよく残しているものもあり、昭和六十三年（一九八八）七月に一括して鳥取藩台場跡として国の史跡に指定されている。

県東部の台場跡としては、浦富のものがよく残り、公園として整備されている。これは、平成十年（一九九八）十二月に国の史跡に追加指定されている。賀露にあったものは住宅造成とともに失われたようで、浜坂の台場もこどもの国近くの有島武郎の石碑や鳥取市指定の保存樹木である「一里松」あたりにあったはずであるが、現在ではその跡を目で確かめるのは困難である。

露軍将校遺体漂着記念碑

岩美郡岩美町浦富

日露戦争終結の鍵となった日本海海戦が終了して三週間ほど経った明治三十八年（一九〇五）六月一七日に旧村の漁師二人が、それぞれ田後港の沖合いでロシア帝国将兵の水死体を発見した。村民たちは協議の末、浦富海岸鴨ヶ磯で葬儀を営み埋葬した。

この田後村民の行動を顕彰しようと、岩美町浦富出身で国連大使などを歴任した澤田廉三が刻銘して、昭和三十七年（一九六二）に鴨ヶ磯椿谷に「露軍将校遺体漂着記念碑」が建設された。その横に、今日では一部が風波のために摩滅しているがそのいわれを記した碑文石が建立された。これとは別に浜に流れ着いたロシア兵の遺体は隣海院で「露山忠白信士」という戒名を授けられ、小羽尾の墓地に葬られている。

県立山陰海岸自然科学館

岩美郡岩美町牧谷
J R 岩美駅から車で五分

山陰海岸国立公園である浦富海岸にもほど近く、裏庭は羽尾岬自然探勝路にもつながる。

山陰海岸自然科学館は、山陰海岸国立公園を訪れる人たちに、山陰海岸の美しい自然をいろいろな角度から紹介し、楽しんでもらうとともに、自然保護の心を育むために、昭和五十六年（一九八一）七月に開館した。

山陰海岸の生い立ちや自然、生物、海と人の関わりが映像やパネルなどでわかりやすく紹介されている。

また、毎年夏休みには自然観察会や子ども科学教室などが開催されている。

開館時間 午前九時～午後四時（七月・八月は午後五時まで開館）

休館日 月曜日、祝日の場合はその翌

日（七月二十日、八月三十一日は無休）

問合せ先 ☎ 0857・73・1445

網代新港

岩美郡岩美町大谷
J R 岩美駅より車で十五分

浦富海岸の奇岩を間近に、松葉がに（ズワイガニの雄）漁で有名な漁港である。ズワイガニ漁の沖合底引き船十二隻を有する。現在、沖合底引き網は、網代港、田後港、賀露港他の鳥取中央漁協の船団にだけ許可されている。どの港に水揚げされても、「松葉がに」のタグが付けられており、識別できる。網代港は蒲生

川が北西に向けて日本海に注ぐ河口に位置し、北西風に悩まされてきた。江戸時代のはじめ、石見国の浜田（島根県浜田市）から漁民が移ってきたとも、同じ頃に若狭国（福井県）の漁師が延縄（はえなわ）漁を伝えたとも言われている。当時、地元の海域を越えて出漁する漁民は「旅漁民」と呼ばれていた。この旅漁民による日本海沿岸の交流が活発だったことを物語っている。

また、鳥取藩の藩米の積出し港でもあり、文久二年（一八六二）には積石の防波堤が築かれた。さらに、文久三年には「浦富台場」がつくられ、六尾の反射炉（大栄町）で製造された大砲が据えられていた。山陰線（現山陰本線）が開通するまでの一時、城崎 網代間の定期航路が就航していたこともあった。大正年間に入って、発動機付き漁船による底引き網漁法が導入され、本格的な漁港への道を踏み出す。昭和二十六年（一九五二）には、全国的に利用される第三種漁港に指定され、現在、海上保安庁の海上所保安署も設置されている。底引き網によるズワイガニ、カレイ、ハタハタの他、沿岸イカ釣り船によるスルメイカの

水揚げが多い。昔の「カンコ船」の伝統を引き継ぐ船外機船による磯物の収穫も無視できない。なお、体験型観光としてイカ釣り体験できる。山陰海岸国立公園の浦富海岸の中心地であり、浦富めぐりの遊覧船が常時就航している。また、西向きの海岸は夕日がすばらしく、夏季限定だが夕日クルーズも開催されている。

田後港

岩美郡岩美町田後
J R 岩美駅よりバス一〇分、田後下車

山陰海岸国立公園の浦富海岸の東肩に位置し、浦富地区の街路からも近い。西は奇岩、岩礁、洞窟が続ぎ、東に向かつては一転して砂浜が多くなる。夏は海水浴やキャンプでにぎわう。釣り宿を兼ねて民宿を経営する家も少なくない。漁港としては松葉が有名で、沖合底引き船十隻が所屬している。

文禄年間に、石見国（島根県）の漁民が移住してきたと伝えられる。海の道を通して、漁民の交流の歴史は古い。しかし、本格的な築港は嘉永元年（一八四八）に始まる。鳥取藩により藩米の賀露港への廻送を目的とした捨石の防波堤である。約五〇メートル程度の堤であったが「千

両づくり」と呼ばれ、当時としては大金が投じられた。この防波堤は明治二十三年（一八九〇）の波浪で崩れたという。以後、第七防波堤まで、営々として防波堤工事が続いた。国立公園であるため、離岸堤も景観に配慮して海面に沈んだ形の潜堤としている。この間、昭和二十六年（一九五二）には旧運輸省の避難港に指定されている。

漁獲は、沖合底引き網によるズワイガニ、カレイ、ハタハタ、エビ類、とくにカレイの水揚げが多い。また沿岸イカ釣り船によるスルメイカが目立っている。

港の背後に位置する田後地区は、せり上がった地形に張り付いた密集集落で典型的な漁村集落の街並みを残している。



史跡 二上山城跡

ふたがみやまじょうあと
岩美郡岩美町岩美
J R 岩美駅より車で約一〇分

標高三四六メートルの二上山の頂上部に築かれた中世の山城である。城は山頂部とその周辺に広がる数ヶ所の曲輪（削平地）からなっている。規模は大きい、他の山城とくらべて曲輪の数は少ない。

十八世紀末に書かれた『因幡志』は、文和年間（一三五二―一三五五）に山名時氏が築城したとする伝承を伝えているが、時氏はその幕府に背いて因幡・伯耆・出雲・美作の四か国を實力で占領し、都をつかがつてたびたび但馬に侵攻していた。当城はその位置からみて、時氏方の東の防衛を担うものであった可能性は高い。その後の動静は明らかにならないが、戦国末期に再び姿を現す。天正八年（一五八〇）の羽柴（豊臣）秀吉書状に「岩経之城」と記載されているのは二上山城のことである。秀吉は、この城を因幡と但馬の境目の重要拠点として垣屋氏に守らせた。なお、昭和五十四年（一九七九）に行なわれた調査の際に、山頂部の曲輪地表面から、戦国末ごろの備前焼・唐津焼・輸入磁器などが数多く

見つかっている。鳥取県の史跡に指定されている。

仙英禅師

仙英禅師は、幕末の大老・井伊直弼の禅の師として知られる。

禅師は、寛政六年（一七九四）、因幡国岩井郡浦留村（現在の岩美郡岩美町浦留）に生まれた。七歳で仏門に入り、四十七歳のとき彦根清涼寺の住職に招かれた。清涼寺は彦根藩主・井伊家の菩提寺である。ここで井伊直弼は禅師について禅の道を修業している。幕末、ペリーの来航によって国内が開国と攘夷で騒然としていたとき、禅師は井伊が開国の必要性を説き、井伊の決断を促した。禅師は、井伊が没した四年後の元治元年（一八六四）、七十一歳で亡くなった。

昭和三十三年（一九五八）、禅師の遺徳を顕彰する碑が岩美町浦留の道竹城跡に建てられた。花崗岩で造られた高さ四・七メートルの堂々たる碑は、遠く海外を望み、天に向かってそびえ立っている。

牧谷のはねそ踊

岩美郡岩美町牧谷

「はねそ踊り」は兵庫東北西部の浜坂町、温泉町から鳥取県北東部の岩美町、鳥取市、気高町、青谷町でみられる。「はねそ」の語源は、着物の裾を跳ね上げて踊る「跳ね裾」に由来するとか、「跳ね候へ」という掛け声に由来するなどの説がある。

本来の盆踊りは、音頭取りの「絵本太閤記」や「仮名手本忠臣蔵」などの口説き唄にあわせて仮装して踊ったといわれる。しかし、現在は見せる演出の要素も強くなり、浴衣姿に六尺長柄の傘を持った男性と、編み笠をかぶった女性が対になって踊る。

昭和四十九年（一九七四）に県の保護文化財に指定されている。

因幡の苜蓿綱引き

岩美郡岩美町大羽尾、気高郡気高町水尻・宝木、青谷町青谷に伝わる端午の節句の綱引き。現在は月遅れの端午や、六月第一の土・日曜日にやっている。綱引きは、その勝負によって豊作や豊漁を占う神事であ

り、さまざまな節目に行われる。鳥取県の東部でシヨウブツナと呼ばれている綱引きは、五月節句に子ども組を中心に行われる。昭和六十二年（一九八七）に国の重要無形民俗文化財に指定されている。

岩美町大羽尾では、子どもたちが屋根にあげられた苜蓿、ヨモギ、カヤを集めて綱を作り、浜に出て、お宮側とお寺（観音さん）側に分かれて綱引きをする。そしてその綱で土俵を作りすもうをとった後、綱を二つに切って、お宮とお寺に納める。

気高町や青谷町では、子どもたちが綱を持って町内を回り、門付けも行われる。

唐川のカキツバタ群落

岩美郡岩美町唐川
JR岩美駅よりバス二〇分、唐川口下車、徒歩四〇分

唐川は稲葉山の一部を占め、標高約三百メートルの高原地帯にある集落である。この集落の東南約半キロメートル、標高三七〇〜四〇〇メートルの大沢の尻に一ヘクタールにおよぶ大湿原があり、ここにカキツバタの大群落がある。多年生草本でアヤメ科に属し、日本名は「書き付け花」から転化したものである。書き付けとは、こすりつけることで、花



汁で布をこすりつけて染める昔の習わしである。毎年五月下旬になると濃紫の花が開き、山間に一大美観を展開する。カキツバタにまじって湿原植物も多く、中国地方の代表的な湿原である。

旧藩時代、家老・荒尾家およびその家中の者が花見に来遊したといわれ、唐川の旧家小倉方には、「しつとりと草履湿しめ燕子花」の短冊が保存されていて、当時の花見の情景がうかがわれる。

湿原植物は、地元唐川の人々によってよく保護され、初春のサワオグルマの黄色、初夏のカキツバタ、秋のサギキョウの紫色と、四季折々に

美しい景観が広がる。また、湿原にはモウセンゴケなどの食虫植物や多様な湿原植物も多く、学術的にも貴重である。カキツバタは昭和十九年（一九四四）三月に国の天然記念物に指定された。

許野乃兵主神社

岩美町新井
J R 岩美駅より徒歩五分

大國主命、素盞鳴命を祭神とする。『延喜式神名帳』に載る神社のうち巨濃郡（現岩美郡岩美町域）九座の一つである。許野をコヤと読ませるが、当地の旧郡名巨濃に由来すると考えられる。同様に『延喜式』に記載される神社として同町河崎に佐弥乃兵主神社がある。

兵主神は、大陸渡来の製鉄・軍事の神といわれている。兵主神を祀る式内社は、全国で十九社二十一座があり、その内但馬に八社、因幡に二社ある。日本海側の限られた地域に集中していることが、伝来経路を暗示するよう注目される。江戸期には兵主大明神、許野乃兵主大明神といわれたが、明治四年（一八七二）に、現社名となった。

境内一帯から弥生式土器などが多く出土していて、昔の祭祀跡をうか

がわせる。

当社に鳥居を寄進すると不幸が起るとか、寄進してもすぐ倒れるという言い伝えがあり、この神社には、現在も鳥居がない。

新井三嶋谷墳丘墓

岩美郡岩美町新井
J R 岩美駅より車で五分

岩美町の蒲生川中流域の左岸に立地し、新井三嶋谷遺跡内の弥生時代後期初頭に造られた二基の墳丘墓。同遺跡は、低丘陵の先端部に位置し、墳丘墓の他に、縄文時代後期の石器工房跡、土壙墓一基、古墳時代中期の古墳二基と後期の古墳一基で構成される。平成十一年（一九九九）、岩美南小学校建設工事中に見えられ、同年に二基とも町史跡に指定された。

二基の墳丘墓のうち、一号墳丘墓は、方形を基調とし、長辺が約二六メートル、短辺が約一八メートル、高さは最大三メートルと、当時としては最大の規模である。また、墳丘斜面には貼石が施されており、一部には石列が見られる。二号墳丘墓は、古墳時代中期に築造された古墳によって墳丘の大半を失っているため、墳形、築造時期の詳細は不明である

が、一号墳丘墓とほぼ同時期のものと思われる。

なお、一号墳丘墓の墳頂は平坦面である。確認された三基の埋葬施設のうち二基からは、器台・高坏・壺などの葬送儀礼に用いる供献土器が出土した。これらの土器類は、破砕された状態で発見され、完形品は見られないことから、墓壙上で行われた葬送儀礼の際に破砕され、供献されたものと考えられる。

温泉 岩井温泉

岩美郡岩美町岩井
J R 岩美駅よりバス一〇分
岩井温泉下車すぐ

蒲生川沿いに湧出する温泉。古くは湯村と呼ばれた。伝承によれば清和天皇の九世紀の中頃、宇治の長者・藤原冬久が発見したといわれる鳥取県最古の温泉である。

『因幡志』によると戦国時代の戦乱で湯池がつまり中断したが、池田光政が再興し、一の湯とお茶屋が建てられた。寛政年間には八湯あり、集落も百五十八戸と繁栄していた。神社、東福寺などへの参詣、近在や近くで繁栄していた荒金、銀山などからの湯治客でにぎわった。一の湯は藩主専用、他は銭湯であった。新湯は元禄十一年（一六九八）に藩が

掘削したものである。たびたび大火に遭ったがその都度再建された。

明治十一年（一八七八）、ライマンによる山陰の地下資源調査の記事によると、岩井温泉には七つの湯があり、株湯と一の湯が五十七度、中湯、小女郎、宮田が四十七度、前田、伊藤、山田の各湯は四十六度で、株湯と山田湯は盛んに泡を発していたという。

現在、九つの源泉がある。そのうちの一自噴泉および三動力泉は集中管理され、五井は未利用である。平均温度は四十五・九度、湧出量は毎分一、一〇四・三リットルである。温泉は、岩井火砕岩層に発達する断層および割れ目から温泉水が上昇すると考えられている。

主な泉質はカルシウム、ナトリウム、硫酸塩で、皮膚病、リュウマチ、神経痛に効くという。明治四十五年（一九二二）の山陰線（現山陰本線）の開通で京阪神からの温泉客が増えた。一時期は岩井輕便鉄道が敷設されにぎわった。温泉街のほぼ中央に岩井共同浴場湯かむり温泉がある。また、湯かむり唄が有名である。国民保養温泉地。

湯かむり唄

岩美郡岩美町岩井

岩井温泉に伝わる珍しい習慣である。温泉地によく耳にするのは、調子を取って湯をかき混ぜる湯もみ唄であるが、湯かむり唄は、湯治客が頭に載せた手拭いに、柄杓で湯をかきながら歌う一種の数取り唄である。本来、湯治の効果を高めるため長く湯に浸かろうとして、入浴者が順々に十番ごと歌い、「何々尽くし」など即興的にひねり出された唄である。

現在、岩井では、盆踊りなどでも歌われる地域の代表的な民謡となっている。



り、振り付けの付いた「湯かむり踊り」として、新しい形で伝承されている。

ゆかむりギヤラリ

岩美郡岩美町岩井
J R 岩美駅よりバス
スー10分、岩井温泉下車すぐ

尾崎翠資料館

昭和初期の文壇で異彩を放ちながら駆け抜けて行った女性作家・尾崎翠。尾崎翠の文学を記念し、併せて尾崎を生んだ郷土・岩美町の風土を広く知ってもらうと、町内の旅館経営者によって設置された。資料館は、のどかな温泉情緒漂う岩井温泉にある旅館（「花屋」本館）の一室に設けられている。

尾崎の生い立ちや作品、近年制作された映画などについての資料が展示されている。

開館時間 午前10時～午後5時

休館日 無休

問合せ先 ☎0857・72・1431

史跡 岩井廃寺塔跡

岩美郡岩美町岩井
J R 岩美駅よりバス
一〇分、学校前下車、
徒歩二分

蒲生川右岸の山裾に立地する白鳳期創建の廃寺塔跡。国指定史跡。周辺の「弥勒堂」、「大門」などの地名や地形から、現在の御湯神社境内から岩井小学校にかけての地域が、寺

域と推定される。

岩井小学校の玄関前には、凝灰岩製の塔の心礎が残っており、地元では「鬼の碗」と呼ばれている。心礎は、長径三・六メートル、短径二・四メートル、上面に一辺一・四メートルの正方形の柱座が造りだされ、その中央に直径七七・五センチ、深さ三一・七センチの柱孔がある。さらに、柱孔の底には直径二〇センチ、深さ一四・二センチの舍利孔が穿たれている。

周辺からは、単弁八葉蓮華文瓦、単弁十二葉蓮華文弁などの五種の軒丸瓦が出土した。その形式から、平安時代まで存続したことが推測される。また、伽藍配置は、遺物の出土状況、地形などから、塔の西側に金堂が位置する法起寺式と考えられている。

なお、岐阜市岩井の延算寺の木造薬師如来立像（国重要文化財）は、平安時代に巨濃郡岩井から遷座したと伝えられているが、巨濃郡には当廃寺以外に寺院があつた形跡がないため、当廃寺と何らかの関係があつたと考えられる。

御湯神社

岩美郡岩美町岩井
J R 岩美駅よりバス一〇分、学校前
徒歩二分

岩井に湧く温泉に由来する神社で『延喜式』にも載る古社である。祭神は御井神・大己貴命・八上姫命・猿田彦命。文久元年（一八六一）の棟札に、神社創建以来千五十年とあるところから、神社ができたのは弘仁二年（八一）であつたといわれている。

『因幡志』によれば、古くは「大野ノ宮」といつたという。江戸時代には「伊勢宮」ともいわれた。

幕末の文久三年（一八六三）には、神社創建千五十年を祝って芝居の興業などを三日三晩行い、大いにぎわつたという。

明治元年（一八六八）、現在の社名になった。

田村虎蔵

田村虎蔵は、子どもにわかりやすい歌詞と歌いやすい曲をめざし、「言文一致唱歌」を唱え、その普及に努めた。

明治六年（一八七三）、岩井郡馬場村（現在の岩美郡岩美町馬場）に

生まれた。身体が大きかったので虎蔵と名づけられたという。

明治二十五年（一八九二）、東京音楽学校（現在の東京芸術大学）校長、村岡範為（八頭郡出身）の講演を聞いて発奮し、東京音楽学校に進んだ。卒業後、音楽教育の現場に立ち、「子どもには子ども言葉で、その生活感情に合った唱歌」が必要なことを知った。そのころの唱歌は欧米の民謡が多く、その歌詞はいかめしい文語体であった。

友人の石原和三郎（作詞家）らの協力で言文一致唱歌を編さんし出版した。明治三十三年（一九〇〇）、『幼年唱歌』（金太郎、大寒小寒、花咲爺など）を出版、つづいて『少年唱歌』（虫の楽隊、小さき星など）と『国定尋常小学校唱歌集』（一寸法師、つぐいす、大黒さまなど）と数多くの唱歌を作曲し出版した。

明治三十年代から約三十年間、全国各地で音楽講習会、唱歌講習会の講師をしている。昭和十八年（一九四三）、七十一歳で亡くなった。

昭和四十一年（一九六六）、田村虎蔵の業績を伝えるため、『大くくさま』の音譜を刻んだ音楽碑が鳥取市の白兔海岸に建てられた。

尾崎 翠

尾崎翠は昭和の一時期を駆け抜けた女性文学者である。その独特の感性と表現力は、尾崎の死後数十年経った今、新しく多くのファンをとらえている。

明治二十九年（一八九六）、岩井郡岩井宿現在の岩美郡岩美町岩井に生まれた。教育熱心な家庭に育ち、文学への夢をふくらませていった。大正八年（一九一九）、日本女子大学に入学、その翌年一月に小説『無風帯から』を『新潮』に発表した。志賀直哉や佐藤春夫、菊池寛らとならび二十三歳の翠の作品が掲載された。その後、小説、戯曲、映画評、短歌などを次々に発表し、新しい文学の担い手として注目されるようになった。

しかし、持病の頭痛がすずみ、薬に頼ることが多くなり、昭和六年ころには幻覚症状が見られはじめている。代表作『第七官界彷徨』はそういう中で執筆された。

昭和七年（一九三二）秋、兄によって強制的に東京から鳥取へ連れ戻された。その後四十年間、文学とは

無縁でひっそり生きた。昭和四十六年（一九七一）、七十五歳で亡くなった。

死の二年前、『第七官界彷徨』が文学全集に収録され話題となった。昭和五十四年（一九七九）と平成十年（一九九八）には『全集』も出版された。

近年、尾崎の功績を讃え、魅力を共有するためフォーラムが企画され、映画も制作された。翠が通学した鳥取市雲山の面影小学校には記念碑がある。また、翠の出身地岩美町の岩井温泉には資料館「湯かむりギヤラリー」が開設され、尾崎翠に関する資料や作品が展示されている。鳥取市職人町の養源寺に墓がある。

岩美町民 いこいの里

岩美郡岩美町大坂
JR岩美駅から車で四〇分

小田川上流に位置する。優雅に落ちる南滝の浅い沢で水遊びをしたり、その周辺に整備された遊歩道でせせらぎを聞きながら森林浴を楽しんだりすることができる。

キャンプ場のほかスポーツやアスレチックができる多目的場や日本海を望む展望台が設置されている。

棚田

岩美郡岩美町横尾

中国山地を越えて鳥取県に入ると、日本海に向かって大きく落ち込む急峻な地形と山麓に広がる棚田の美しさに、ふと足が止まる。棚田は田毎の月あるいは千枚田と呼ばれ、景勝地として好まれる一方、耕して天に至ると言われるように山間地の生活の特徴付けるものでもある。県内に棚田は多い。水田面積の二割近くが棚田と考えられている。全国的には水田の二割にも満たない。とくに日野川流域の日南町、江府町や溝口町に多く、中部では三朝町や関金町に多い。東部は比較的少ないが、一箇所にまとまった棚田が広がる。「日本の棚田百選（農林水産省選定）」に選ばれた地区は、若桜町春米と岩美町横尾の二地区である。

岩美町横尾へは、国道九号から岩美町蒲生で分かれ旧蒲生峠への道をたどる。峠の手前には、横尾、洗井さらに蕪島の三集落が続く、約二五ヘクタールにわたって五百枚の田が広がる。勾配は十六分の一と比較的緩やかで、起伏のある山腹に石積み

現在、棚田ボランティアが結成され、農業体験を兼ねて作業に参加している。また、都会の市民向けに棚田を区画して貸付けるオーナー制度も始まっている。棚田が都市と農山村の交流の場になるうとしている。

蒲生峠

岩美郡岩美町蒲生
JR 岩美駅より車で二〇分

国道九号を鳥取市から東へ向かい、岩井温泉を通り抜けた鳥取県と兵庫県境にある峠。現在は蒲生トンネルが整備され、トンネルを抜けるとそこはもう兵庫県温泉町である。

蒲生トンネルにさしかかる手前の岩美町塩谷で国道から右折する道路をたどると山の神、銀山、横尾、洗井、蕪島の各集落を経て、蒲生峠の標示に出会う。ここが旧蒲生峠（標高三三五メートル）である。近くには近世初頭まで生野銀山や石見銀山と並び銀鉱山があった。また、横尾には美しい棚田が続ぎ、「日本の棚田百選」に選ばれている。

古来、山陰道は京都へ通じる重要な道路であり、県内では鳥取城下から兵庫県但馬地方へ至る但馬往来と呼ばれてきた。鳥取から蒲生峠まで二五キロメートル、峠から温泉町千

谷まで三・二キロメートルある。江戸時代の峠道は、山の神から尾根づたいに蒲生峠まで直登していた。慶応四年（一六九八）の山陰道鎮撫使・西園寺公望一行もこの峠を越えた。今も一部に石畳の旧道跡を確認することができる。

明治時代、旧山陰道が国道九号になり、幾度かの改良の後、蕪島經由の路線に変更された。現在の旧道は昭和三十八年（一九六三）に完成したものである。高度経済成長時、県内一の幹線道として人と物の移動に大きな役割を果たした峠道も、昭和五十三年（一九七八）に蒲生トンネルが貫通しその道を譲った。旧道沿いには今も明治二十五年碑銘のある延命地藏菩薩の台座が残る。周辺は歴史的な地点として、案内板や東屋など整備が進んでいる。平成八年に「歴史の道一〇〇選」に選定された。

観照院

岩美町岩本
JR 岩美駅よりバス一〇分、岩本下車、徒歩五分

観照院は天台宗に属し、本尊は千手観音である。かつては古海山綱代寺（阿代寺）といい、中世までは同町網代にあった。いつ頃開山したかは明らかではないが、旧境内の地下

から出土した鐘には「因州巨野郡岩井庄阿代寺」の銘文と共に「正平十五年」（一二三六〇）の記年銘がある。また、安政五年（一八五八）の文書には「綱代寺」とあり、万延元年（一八六〇）の文書には「観照院」とあるので、寺号が改称されたのはその頃のことと考えられる。

『因幡志』には、文禄年中（一五九二―一五九六）に水害で寺院が倒壊したが、住民の力で再建されたと記されている。同寺『縁起』によると、慶安二年（一六四九）、堂舎が新造されたとある。その後、慶応三年（一八六九）に火災で焼失し、明治五年（一八七二）、再建されている。

本尊は海中から出現したといわれ、近世には卯年のみ開帳される秘仏であった。

橋浦泰雄

橋浦泰雄は、鳥取県文芸運動の先

駆者である。また広く画家、社会主義運動家、民俗学者として活躍し、多くの業績をあげている。特に柳田国男を支え、日本民俗学の形成に貢献したことは大きい。

明治二十一年（一八八八）、岩井郡岩本（現在の岩美郡岩美町岩本）に生まれた。二十四歳のとき、文芸誌『水脈』を発行し、鳥取県における文芸運動の先駆けとなった。その後上京し、絵を学びながら社会主義運動に関わった。

柳田国男に民俗探訪について尋ねたことがきっかけで民俗学にも関わり始め、組織づくりや運営の面で柳田の活動を支えた。昭和五十四年（一九七九）、九十歳で亡くなった。著書に『家族制度の研究』『まつりと行事』『民俗探訪』『熊野太地浦捕鯨史』などがある。また、『広辞苑』（岩波書店）第一版の民俗学の分野の解説を担当している。

岸边福雄

岸边福雄（福叟）は、昔ばなしや

児童文学の作品を子どもたちに話して聞かせる口演童話のパイオニアである。

明治六年（一八七三）、現在の岩美町に生まれた。兵庫師範学校を卒業したあと兵庫県内で小学校の教諭をしながら、幼児教育には口演が最適と考え、口演童話を始めた。

福部村

善光院

福部村細川
JR福部駅より徒歩二〇分

明治三十五年（一九〇二）上京し、幼稚園、女学校を相次いで創立し教育に打ちこんだ。大正末期からは絵雑誌『コードモノクニ』の編集顧問も務めている。このころ、児童文学者の巖谷小波・久留島武彦とならんで「口演童話の三羽鳥」といわれている。昭和三十三年（一九五八）、八十五歳で死去。

口演童話集に『岸边福叟名話集』（昭和十七年）、その理論書に『お伽噺仕方の理論と実際』（明治四十二年）がある。なお前記『名話集』には、この本の作品は「話す童話で、読む童話ではありません」と記してある。

山号を無量寿山といい、宗派は天台宗である。本尊である阿弥陀如来は、子年のみ開帳される秘仏で、長野善光寺と同形式の鎌倉期製作の金銅仏といわれる。開山したのは、白鳳丙子（六七六）赤阪長者とも栄照和尚ともいわれる。当院は、因伯における善光寺信仰の拠点寺院として栄え、かつては一遍上人の遊行参詣もあつたのでは、と想像する説もある。

近世初までは、寿量山清泰寺といつたが、無量寿山安養寺善光院に改め、貞享五年（一六八八）に村内の中谷から現在地に移された。

境内には「細川梅」という江戸期の伴書『毛吹草』などにも紹介された白梅があつた。直径一寸五分の大輪の花で、花弁には五色の飛白が入り、花見時には時の藩主・池田光政も訪れてにぎわつたが、明和七年（一七七〇）の夏枯死したといわれる（『因幡民談記』『因幡志』）。

本堂前には牛馬神の大日如来を祀つた大日堂がある。一月十四・十五日の縁日には大にぎわいし、春・秋分には堂でごまが焚かれ、息災祈願が行われた。このとき、近くの山で笹を採つて堂内にある牛の像をなでた後、持ち帰つて牛馬に食べさせたという。

福部村 歴史資料館

福部村湯山
JR鳥取駅からバス二〇分、砂丘東口下車、徒歩一〇分

福部村歴史資料館は平成二年（一九九〇）十一月に国立公園である鳥取砂丘の中に設置された。

福部村内では、縄文時代前期から弥生時代、古墳時代の遺跡が数多く発見されており、これらの遺跡から出土した国の重要文化財や県指定文化財をはじめ、因幡地方に伝承されている民具、古文書などの歴史的資料が展示されている。

開館時間 午前一〇時～午後五時
休館日 木曜日、祝日の翌日、年末年始

問合せ先 ☎0857・29・7211

らつきょう

中国原産のユリ科の多年草で、草

丈は二五～五〇センチ。秋遅く花茎を出し、その頃に赤紫色の花が散形花序をなし球形に集まって咲く。果実は結ばない。葉は冬には枯れず、六月頃に枯れる。鱗茎は狭卵形で、醋や味噌などに漬けて食べると食欲増進に効用がある。

岩美郡福部村の砂丘らつきょうは有名で、栽培は江戸時代にはじまり、大正六年（一九一七）から本格化した。販売額は平成四年（一九九二）には約八億円の高額を記録し、年々更新しつつある。

ふくべふれ あいランド

岩美郡福部村海士
JR鳥取駅から車で二〇分

鳥取砂丘にもほど近い。「砂丘温泉ふれあい会館」と「ほっとスイミングプール」からなる。

砂丘温泉ふれあい会館の二階にある展望浴場からは、日本海を眺めることができる。また、ほっとスイミングプールには二五メートルのプールがある。ここからも日本海を望むことができる。

近くには、らつきょう畑が一面に広がり、秋には赤紫色の可憐な花が咲く。

開館時間 午前一〇時～午後八時三〇

分（入館は午後八時まで）

休館日 木曜日、年末年始

問合せ先 ☎0857・75・2316

荒坂神社

あらかさかじんじや
福部村八重原
J R 福部駅より徒歩二〇分

荒坂神社は、大己貴命、少彦名命などを祭神とする古社で、『延喜式神名帳』に載る法美郡（現鳥取市・岩美郡の一部）九座の一つ「荒坂神社」と考えられる。

『日本三代実録』に、貞観五年（八六三）に「新羅国の人因幡国荒坂浜に漂着した」とあり、当社はその頃は荒坂浜近くに鎮座していたと推定されるが、現在その地がどこであるかはわからない。

近世にはこの神社は矢谷村（福部村内箭溪）に鎮座し、荒坂山王と称されていた。『因幡志』は「…神光衰微して渺たる一小社なれど…近傍に幣殿・神楽殿・燈明田・油代などいふ名、尚田土の称に残れり。上古大社たりしこと察すべし」と記している。

明治初年（一八六八）に、荒坂神社と改称し、同四年（一八七一）現在地に移された。

坂谷神社叢

さかだに
岩美郡福部村栗谷
J R 福部駅より徒歩十五分

坂谷神社叢は、福部駅から東へ四〇〇メートル離れた標高三〇〇〜一〇〇メートルの南向きの斜面に位置し、スダジイを主とする大規模な照葉樹林である。

特に、参道石段の両側と社殿のある石窟をぬけた一帯には優れたスダジイ林が見られる。

また、石段を登ったあたりにはケヤキの原木が多く、ヤブツバキの老木も珍しくない。

そして、亜高木層には樹皮に独特な模様をもつカゴノキが目立つ。幼木もかなりの数が育っている。さらに低木には暖地性植物のコシヨウノキやフユザンシヨウ、草木層にも南方系のシダ植物であるクリハランなど希少な貴重植物の存在が注目され、昭和五十八年（一九八三）九月に県天然記念物に指定されている。

郡家町

安藤祭り

あんとつ
八頭郡郡家町郡家

九月最終土曜日に行われる祭。伝承によると、文政六年（一八一三）農業用水の不足に悩む農民を救うために、当地の豪農・安藤伊右衛門は私財を投じて、八東川から水を引き入れるという大事業を成し遂げたという。そしてでき上がった用水路は、井右衛門の偉業を讃えて「安藤井手」と呼ばれた。その普請の際に勧請した用水弁天社の祭礼が、「安藤祭り」である。

祭では、屋台が地区を巡行し相撲が奉納される。奉納相撲に関しては、井右衛門が大の相撲好きであったという説と、四股に地下水路壁や土手を固める信仰があるという二説ある。

自性院

じじょういん
郡家町下峰寺
J R 東郡家駅より車で約七分

自性院は、上峰寺との境の山上にあつて、通称「峰の薬師」といわれている。明治十四年（一八八一）に

廃寺扱いになったものの、霊験あらたかな仏として、今も厚い信仰を集めている。真言宗に属し、本尊は薬師如来である。開かれた当時は生峰寺と称し、鳥取市の金剛院の末寺であつたという。

明治以後、当寺院の什宝・文書は新興寺へ預けられ、新興寺から天佑寺（郡家町）に回送されたといわれている。現在、当院に残るのは過去帳だけである。

当寺院は、光明皇后の母・橘夫人の誓願によつて建立されたものと伝えられている。本尊は、奈良法隆寺の分身如来で、行基が製作し、法隆寺・三河（愛知県）風葉山薬師寺の本尊と共に日本三薬師の一つといわれた。開基当時は、壮麗を極めた寺院で、信者でにぎわつたというが、戦国期の兵火によつて焼失し、衰退していった。

福本のオハツキイチヨウ

八頭郡郡家町福本
J R 郡家駅より徒歩一〇分

祖師堂境内にあるイチヨウで、葉の先にギンナン（種子）ができるのでオハツキイチヨウといっている。目通り周囲二メートル内外、高さ四〇・五メートル、この木は約百年前、

福本の三好寛三郎という人が、若いときに山梨県下山村上沢寺の御葉つきイチョウ（国指定天然記念物）という名木を、分れイチョウと称して植えたことに始まる。実がなるようになったのは五、六十年前からである。御葉つきイチョウは、従来、老年相の木にできると考えられていたが、若木にもでき、要因は遺伝的なものである。福本のもは普通のイチョウと御葉つきを混じえたものである。御葉つきには一個から三個くらい実が付き、葉柄の長いのが特徴である。

山梨県上沢寺は、身延山の裏山にあり、身延山の七ふしぎの一つとして、「高祖御枝曰犬霊木銀杏実」と題し婦人の乳の護符としていたことで有名である。鳥取県では特に珍しく、昭和四十五年（一九七〇）二月に県指定天然記念物に指定された。福本の母樹の西方二〇メートルの所に一本若木が生えてオハツキと確認されている。

いちば 市場城跡

八頭郡家町市場
JR東郡家駅より車で約十五分

（私都）

私部（私都）城とも呼ばれた中世の山城で、私部郷の地頭・毛利氏

の居城であった。毛利氏は安芸国の毛利氏と同族で、もとは東国の武士であった。城は標高二七六メートル（比高一四〇メートルほど）の山頂部に中心をもち、そこから北方に伸びる数本の尾根上に数多くの曲輪（削平地）が造成されている。因幡では最も大規模な中世城郭の一つである。今、残っている城跡は、戦国後期の遺構であるが、創築は室町期かそれ以前にさかのぼる。文明年間（一四六九〜一四八六）、毛利氏は守護山名氏と敵対し、当城でもたびたび合戦が行われたことが知られる。延徳元年（一四八九）には山名豊時との戦いに敗れ、城も落城した。ただ、毛利氏はその後もこの地域の領主として勢力を維持していた。天正（一五七三〜）の初年には尼子氏再興をめざす山中鹿之助が攻略し、それを毛利氏が奪い返すなど、激しい争奪戦が繰り広げられた。

天正九年（一五八一）、羽柴（豊臣）秀吉の鳥取城攻略後は、但馬の山名氏が入城した。

だいじゅじ 大樹寺の ウラクツバキ

八頭郡家町福地
JR鳥取駅よりバス四分、福地下車、徒歩五分

曹洞宗の大樹寺に育つ、樹高九メ

ートル、幹周り一・九メートル、推定樹齢は四百年の有楽椿。わが国のウラクツバキの中で最大級のものであり、町の天然記念物に指定されている。

ウラクツバキは関西では有楽椿、関東では太郎冠者と呼ばれ、茶人でもあった大名の織田有楽が茶花として愛好した。花期が長く、十一月から三月にかけて、ピンク色の花を次々と咲かせるが、花底が紅色のヤブツバキの花とは異なっている。ツバキ類には珍しく香りがある。最盛期には優雅な花が咲き続け、その姿は壮観である。



あんどく さとひめじこうえん 安徳の里姫路公園

八頭郡家町姫路
JR東郡家駅から
車で二〇分

郡家町内には安徳天皇の墓と伝承されている「上岡田五輪塔群」が祀られており、公園内に設置された「安徳天皇資料館」には、平家物語「長門本（複製）」や安徳幼帝が行在されていたことを伝える合掌地蔵などが展示されている。小さな子どもから大人まで楽しめるように、遊具を備えた子供広場、テニスコート、自転車モトクロス場や親水広場がある。

また、休憩・宿泊施設やキャンプ場もあり、ゆっくりと自然に親しむことができる。

開園時間（管理棟）午前九時〜午後六時

休園日 月曜日（祝日の場合はその翌日）十一月三月は閉園

問合せ先 ☎0858・74・0302

にしみかど 西御門の 大イチョウ

八頭郡家町西御門
JR郡家駅よりバスで二〇分、西御門下車すぐ

山麓に仁王堂があり、庭を昇る石段の右の方に斜に広く根をはった一本のイチョウがある。イチョウ科に属し日本名「嶋脚」の中国宋時代の

音よみ「ヤーチャオ」の転訛であるといわれている。『因幡志』には「仁王堂の前に七抱へ許りの銀杏樹の大木ある是也。十二月三十日の夜、この木に痲瘡神やどるといい伝えて諸人畏敬し銀杏の葉を乞請けて守袋に収めてまじないとす」とあるように、ホウソウの神として木の根本に銀杏権現を祀っている。天然痘が流行したときには遠近から人々がやってきて、イチヨウの葉をお守りとしたという。

この木は雌木で、上の方は地上二メートルの高さで周囲八メートル、高さ二五メートルの大木で、枝が四方に出て壮観である。約五〇センチの大きなチチといわれる気根がさがっており、イチヨウの有数な大木として「とつとりの名木百選」に選定された。

和多理神社

郡家町殿
JR郡家駅よりバス一〇分

和多理神社は、『延喜式神名帳』の八上郡同名社と考えられる。猿田彦命を祭神とする。

社伝によると、景行天皇のときに創社され、大同二年（八〇七）に、和多理山（越山）から現在地に移さ

れたといわれている。近世までは、大多羅大明神といわれ信仰されてきた。

『因幡志』には、隠岐を脱出された醍醐天皇が、名和長年を伴い当地に潜幸され、当社に参拝、祈願された。また、長年は当社に十町六反余を社領として寄進したと記載されている。

天正八年（一五八〇）、羽柴（豊臣）秀吉の因幡侵攻の際、兵火に焼かれ社領も没収された。その後、若桜城主・山崎家盛によつて修理が行われ、宝暦三年（一七五三）、社殿が再建された。

中島菜刀

中島菜刀は、華麗な色彩で描く日本画家である。その作品は、横山大観にも激賞された。

明治三十五年（一九〇二）、八頭郡賀茂村（現在の八頭郡郡家町）の農家に生まれた。本名は益雄。村巡業の歌舞伎一座に加わっていた両親に連れられ因幡、但馬地方を回った。五歳ごろから画才を發揮し、風絵を描いて家計を助けたという。

大正十年（一九二一）、村の篤志

家の後援で京都市立絵画専門学校（現在の京都市立芸術大学）に入学し、養鶏場でアルバイトしながら絵を学んだ。画号の「菜刀」は、鶏の餌にする「菜」を「刀」で刻んだことにちなむ。

昭和四年（一九二九）、第十六回院展に「松葉かき」が初入選、二年後には院友に推された。同十七年（一九四二）、梨の袋かけを描いた『薫風梨園』で院賞（白寿賞）を獲得し、横山大観に激賞された。

敗戦後、鳥取市や八頭郡、気高郡内を転居しながら絵筆をとるが病床に伏すことが多くなる。再起をめざして京都に帰ったが、昭和三十年（一九五五）、五十三歳で死去。

代表作には『群鶏』『炭焼』『かや刈り』『麒麟獅子』『芭蕉庵詩仙堂』がある。菜刀の作品は、流転の生涯であったためか、このほかの主要な作品のほとんどは、所在がわかっていない。

船岡町

天満山公園

八頭郡船岡町船岡
若桜鉄道因幡船岡駅より徒歩
十五分

船岡町役場の背後にそびえる天満山（標高二一八メートル）の山麓に、千本を越えるサクラの木が植えられ、花見の場所として名高い。若桜鉄道の因幡船岡駅に降り、役場を目指して歩くと約十分で国道四八二号に沿った役場の建物に着く。その角を曲がると天満山公園に登る道がある。「天満の天神」と親しまれてきた天満宮がある。祭日の旧三月二十



五日と九月二十五日には、入学祈願などに来る若者も多い。桜公園の一角には、郷土の作曲家・岡野貞一が作曲した『春が来た』の歌詞と譜面を記した碑が建立されている。

天満山からの眺望は、八東川の流に沿った里山の風景がのどかに広がる。電車と徒歩で春の一日を楽しみたい場所である。

下船岡神社祭

船岡町船岡
若桜鉄道因幡船岡駅より徒歩一〇分

下船岡神社は、猿田彦命、天鈿女命などの神々を祀る。例祭が行われる五月三日には、氏子中の男子は幼児から年寄りまで全員が参加し、御幸行列を構成する。地区をあげての大規模な祭である。榊、幟武者、大名行列などが御輿を先導する。いわゆる鳥取東照宮（現榊谿神社）の神幸祭の形式を取る。

この祭りの特徴の一つに獅子舞があげられる。獅子舞は神幸行列の最後尾を練り、舞は出立ち・御神事場・奉納事の三回奉納される。角がある大型の獅子頭を用いた獅子舞は、榊谿神社の権現祭および麒麟獅子舞の形式とそれ以前の形態とを折衷している。また、夕刻に行われる

御輿の「宮入り」も特徴的なものである。この時、榊と御輿がぶつかり合う。

能引寺

船岡町下野
若桜鉄道因幡船岡駅よりバス十五分
寺前下車すぐ

能引寺は、山号を虎石山といい臨濟宗妙心寺派に属する。本尊は虎御前の守り本尊でもあったという地藏菩薩である。大隣寺（鳥取市）の末寺である。

当寺縁起によると、富士のすそ野の敵討ちで有名な曾我兄弟の一人、曾我十郎祐成の愛人虎御前が、十郎の没後、各地を放浪した末、当地で庵を結んで没した。その後、彼女の叔父・僧忍山が比叡山よりやって来て、当寺を建立したと伝えられている。建立当時は天台宗の寺院であったが、応仁年間（一四六七～一四六九）、京都建仁寺の僧天隱（洛賜とも）が来住し、臨濟宗に改宗した。境内には、虎御前がその上に座して写経したという「虎ケ石」があり、裏山には虎御前の墓と伝えられる宝篋印塔と、宝永五年（一七〇八）銘の一字一石塔が建っている。

竹林公園

八頭郡船岡町西谷
若桜鉄道車駅より徒歩二〇分

扇状地に広がる園内には国内外の珍しい竹と笹の二百品種が、庭園風に植栽され、竹林浴を楽しむことができる。また、バーベキューができる炊事棟やバンガロー、テントサイトを備えたキャンプ・遊具場が整備され、芝広場ではグラウンドゴルフができる。また地元で採れた食材を使った食堂もある。

サクラや芝サクラ、あじさいなどの花とともに、四季折々に異なった表情を見ることが出来る。

開園時間（管理棟）午前八時三〇分～午後五時三〇分

休園日 水曜日（祝日の場合は翌日）

問合せ先 ☎0858・73・8100

橋本興家

橋本興家は日本の版画史に大きな足跡を残した。「日本の城」を描くことをライフワークとし、伝統美を世界に伝えた。

明治三十二年（一八九九）、八頭郡船岡村（現在の八頭郡船岡町）に生まれた。二十二歳で上京し、東京

美術学校（現在の東京芸術大学）に入学。三十七歳のとき、現代日本版の草分け、平塚運一に誘われ、版の道に進むこととなった。

その二年後から「城」をテーマにした作品に取り組み始めた。それまでの版画の常識を破る多色摺り木版画四十号の大作『古城早春』『古城清秋』、さらに五十号の『夏景名城』を発表し、美術界から注目された。

「城」シリーズは百数点にも及んだ。現代日本版の国外への紹介にも力を入れた。昭和三十四年（一九五九）、ボストンで開かれた「日本現代版画歴史展」、同三十七年（一九



六二)に大英博物館で開かれた「現代日本版画展」などに出品している。平成五年(一九九三)に九十三歳で死去。

作品には、「城」シリーズのほか、「砂丘」「大山」などがある。

大江神社

船岡町橋本
若桜鉄道因幡船岡駅よりバス二〇分
才原下車すぐ

大江神社は、天穂日命・三穂津姫命などを祭神とする。『延喜式』記載の「大江ノ神社」と考えられる古社である。社伝によると、元暦元年(一一八四)に因幡守に任ぜられた大江広元が深く崇敬していたと伝えられる。

当社は、古い文書の記載からみて因幡一宮・宇倍神社に次ぐ社格があったようで、因幡二宮とする説もある。『因幡民談記』によると、当社の嘉元三年(一一三五)銘の棟札には、「正一位権現」「地頭 平宗泰」の文字が見える。また、神社の柱に書かれた銘文には、貞治七年(一一三六八)から応安三年(一一三七〇)に神社が造営されたとあり、平宗泰の子孫が名を連ねている。平氏は後に町内水口にあつた半柵城主・伊田氏の先祖と考えられている。

かつては社地八尾八谷を有したというが、文禄二年(一五九三)の洪水によって山が崩れ、社地は流れ、今の田畑となった。

江戸時代には財原大明神、大江大明神といわれ、近郷六か村の総産土神であった。明治・大正期に近隣の神社を合祀した。

河原町

霊石山

八頭郡河原町稲常
JR鳥取駅からバス二〇分、稲常下車、徒歩十五分

鳥取市、八頭郡河原町、郡家町の境界にある標高三三三・五メートルのテール状の山体をした山。「霊石山」の名は、山腹中央部に猿田彦命の霊がこもる「御子石」と呼ばれる巨大な安山岩の転石があり、この「霊のこもる石」に由来するといふ。因幡誌には、「土俗この山の一国の中央にありてこれより四方の境にいたつて七十八里と云へり」とあり、因幡の中央の山として知られていた。

霊石山は、下層から河原火砕岩層、円通寺礫岩砂岩層、鮮新世火山岩類で構成されている。山頂部の鮮新世火山岩類は三〇〜五〇メートルの厚さで、流動性に富んだ安山岩質の溶岩流でできている。

頂上から、北に鳥取平野や千代川、南に中国山地や八東川を一望することができ、伊勢ヶ平と呼ばれる草原状の平坦部は遠足やハイキングの好適地となっている。また、北側斜面

から吹き上げる風がハンググライダーやパラグライダー飛行の格好の条件となり、麓の千代川河川敷へと舞い降りる光景がよく見られる。山頂にはテレビの中継基地が設けられているため、アスファルト舗装が施され、簡単に車で登ることができる。山の中腹には最勝寺があつたが、現在は山麓の片山集落に再建されている。



鳥取県林業試験場・ 県立二十一世紀の森

八頭郡河原町稲常
JR鳥取駅からバス二〇分、稲常下車、徒歩約一〇分

昭和三十年(一九五五)九月に優良品種の育成・増殖技術や育林技術や森林管理の研究などのため開場し

た。

平成七年（一九九五）には、新技術、新製品開発のため誰もが自由に利用できる木材加工研究棟が整備された。この施設は、智頭スギが柱・内・外装に使用され、県産材の利用拡大を図るためのモデル施設にもなっている。

この試験場の背後に広がる霊石山の豊かな森の一部を利用して設けられたのが、「二十一世紀の森」である。「きのこの森」「野鳥の森」「生産の森」「薬草の森」のほか工芸実習館などがあり、自然観察や体験学習を通して森林や林業について理解を深める場となっている。

開館（園）時間

木材加工研究棟 午前九時～午後五時

二十一世紀の森

午前九時～午後四時三〇分

休館（園）日

木材加工研究棟

土・日曜日、祝日、年末年始

二十一世紀の森 年末年始

問合せ先 ☎ 0858・85・2511

最勝寺

河原町片山
JR鳥取駅よりバス二〇分、徒歩
十五分

最勝寺は、山号を霊石山といい真

言宗御室派の寺院で、薬師如来を本尊とする。当寺は、和銅年間（七〇八～一五）に僧行基が当地を訪れて草庵を開き始まったといわれる。

その後、天曆年間（九四七～五七）に、比叡山より慈恵僧正が来住し、多数の仏閣と僧坊四十二坊を造営したという。そのときは天台寺院であり、本尊は仁和元年（八八五）から天曆元年（九四七）まで当町長瀬の長谷寺に移されていたと『因幡志』には記されている。兵庫県生野町金蔵寺の鐘銘には、文永四年（一二六七）の年記と共に「因州最勝寺」とある。

応永三十四年（一四二七）、摩尼寺の僧・快乗が来住して真言宗に改めた。天正九年（一五八一）、羽柴（豊臣）秀吉の軍により霊石山一帯は焼き払われ、当寺も焼失した。昭和三十年（一九五五）、霊石山西側中腹より現在地に移された。

伝説では、建久四年（一一九三）に、伊豆修禅寺に幽閉されていた源 範頼（頼朝の弟）が逃れてきて、この寺で没したと伝えられている（『因幡志』）。源範頼のものといわれる五輪塔が残っているが、その記年銘は永正（一五〇四～二一）であ

り、合致しない。

長瀬の大シダレザクラ

八頭郡河原町長瀬
JR鳥取駅よりバス二十五分、
河原下車、徒歩二〇分

中島家邸内の庭にあり、国道五三号から二〇メートルほど離れている。樹高は約一二メートル、胸高直径は八五センチ、樹齢は四百年と推定される巨木で、県内でも有数のものとして昭和三十四年（一九五九）六月に県の天然記念物に指定された。特に樹形が美しく、鳥が羽を揚げたように枝が伸びている。

花期は四月上旬で、赤味の強い淡紅色の花は実に美しい。花径は小さいが、一芽に平均四個の花が付き、



県内のシダレザクラの中では花の数が多いほうである。

八上比売神社

八頭郡河原町曳田
JR鳥取駅よりバス二〇分、曳田下車すぐ

西ノ日天王とも呼ばれる。古事記によると、大國主命はこの地の八上比売に求婚し、八十神たちとここに来たという。ワニに皮をむかれた白兔を救ったのはその途中のことである。いつ頃からここに八上比売を祀るようになったかは明らかでない。しかし、平安時代の『延喜式』には「八上郡売沼神社」の記載があり、当社をさすものと考えられることから、かなり古くからと推察される。

なお、『万葉集』によると、この八上郡から朝廷に奉仕した采女が、安貴王に愛されたため不敬罪に問われ本国に返されている。この采女はこの辺りの出身と考えられる。

河原町立歴史民俗資料館

八頭郡河原町渡一本
JR鳥取駅からバスで二〇分、役場前下車すぐ

民家であった木造茅葺平屋建の建物を移築改造し、昭和五十三年（一九七八）四月に開設された。

江戸中期のものとして推定される家屋に配された農具や生活用具からは、

当時の生活様式や習慣などをうかがい知ることができる。

開館時間 午前九時～午後四時

休館日 月曜日、年末年始、祝日

問合せ先 ☎0858・76・3123

お城山展望台・河原城

八頭郡河原町谷ノ木
JR河原駅より車で五分

天正八年（一五八〇）に羽柴（豊臣）秀吉が因幡平定に際して陣を築いたという城山に、平成六年（一九九四）九月に河原町のシンボルとして開設された。

河原町は鮎のまちとしても知られ、別名「若鮎城」とも呼ばれる。高さ二四メートル、四階建てのお城をかたどった施設では、河原町の観光情報をはじめ、古くから伝わる焼物や伝統的産業や文化、地元につながる八上姫の神話や歴史を立体映像などをを用いて紹介している。

また、天守閣のテラス展望台からは、遠く鳥取砂丘や中国山地の山なみが一望できる。夜間は二一基の照明でライトアップされ、まちのランドマークとしても親しまれている。

開館時間 午前九時～午後五時（入館は午後四時三〇分まで）

休館日 月曜日（祝日の場合はその翌

日）、年末

問合せ先 ☎0858・85・0046

伊良子清白

伊良子清白は近代詩史に異色の地位を占める詩人である。

明治十年（一八七七）、八上郡曳田村（現在の八頭郡河原町曳田）の医家に生まれた。本名は暉造。生後十一か月で母と死別し、乳母に養育された。その後、転居癖、浪費癖のある父に従って流転する。明治十八年（一九八五）、三重県津市に転住、詩作をはじめた。『文庫』の主要同人として活躍、同三十三年（一九〇〇）に上京し、『明星』創刊に参画した。

明治三十九年（一九〇六）、詩集『孔雀船』を出版した。その中には明治三十三年から三十八年までの作品約百五十編から厳選した十八編が収められている。この詩集は、詩人として活動した期間が短かった清白の唯一の詩集である。以後、島根県浜田をはじめ、大分、台湾、京都と、辺地の医師を務めている。

昭和二十一年（一九四六）、六十八歳で死去。

「故郷の

谷間の歌は

続きつゝ断えつゝ哀し

大空の返響の音と

地の底のうめきの声と

交りて調は深し」

これは、詩集『孔雀船』巻頭の「漂泊」第四連である。漂泊そのものであった清白の人生と響きあうこの詩は、河原町曳田の正法寺境内に建つ石碑に刻まれている。

釜ノ口土手

八頭郡河原町釜ノ口
JR国英駅より徒歩一〇分

千代川に沿った土手のサクラが珍しく、花見の名所である。鳥取方面からは国道五三号を河原町に入り、千代川と八東川が合流する出会橋を右に見て、さらに千代川をさかのぼる。高福トンネルを抜け、川筋が大きく湾曲する辺り、中ほどに桜並木の土手が続く。そこが釜ノ口土手である。

土手の左に見える釜口集落は、江戸時代には「高瀬舟の釜口」と呼ばれ、千代川を往来する川舟を扱ひ千代川とともに歩んできた。土手は、鳥取藩の参勤交代に使われた上方往

来の道筋にあたり一里塚が置かれていた。また、若桜街道（今の国道二九号）と結ぶ脇街道の宿場としてもにぎわった。

現在は、千代川から引く二筋の井手（用水路）が水田を潤し、静かな農村のたたずまいを見せている。

田中寒楼

田中寒楼は俳人で歌人。その言動から酒仙、哲人も呼ばれた。

明治十年（一八七七）、八上郡小畑（現在の八頭郡河原町小畑）に生まれた。本名は国三郎という。鳥取中学（現在の県立鳥取西高等学校）在学中から正岡子規の説く俳句革新運動に共鳴し、句作した。明治三十二年（一八九九）、子規に「因幡に寒楼あり」と称賛された。

教員生活後、大正十四年（一九二五）春から俳句行脚を兼ね、沖繩を含め主として京阪以西を旅している。放浪の旅は三十五年続いた。晩年は、書や詩歌、酒の世界を楽しんだ。昭和四十五年（一九七〇）、九十三歳で死去。

「月ももう出て来い山も低うなれ」

（佐治村高山）

「不古今遠 木の葉が落ちてきた」
（八東町岩淵）
「雲に寝て」

草花は目のさむるほとり」
（用瀬町役場前）

落河内の大キリシマツツジ

八頭郡河原町北村
JR鳥取駅より車で
四十五分

桜谷旧家にある樹高三・六メートルのキリシマツツジ。枝は東西五・一メートル、南北七メートルに広がる、直径五センチ以上ある枝が二十本で、本県にあるキリシマツツジとしては有数の巨木である。推定樹齢四百年といわれ、昭和三十二年（一九五七）二月に県の天然記念物に指定された。

キリシマツツジは、九州南部の山岳地帯に自生する低木である。五月初めに赤色の美しい花をつけるので、観賞用として全国で栽培されている。この大キリシマが、真っ赤な花を咲かせる姿は見事で、「とつとりの名木百選」に選ばれている。

名勝 三滝

八頭郡河原町北村
JR鳥取駅よりバス五〇分
床下車、徒歩四十五分

千代川の支流曳田川上流部の渓谷で、八頭郡河原町の西端に位置する。



曳田川と落河内へ向かう谷が別れる地点から、上流約五千口の間に県指定名勝の三滝渓である。北側の高山（一、〇五三メートル）から西回りに、南側の高鉢山（一、二〇三メートル）へかけて半円形に連なる一、〇〇〇メートル級の山々に囲まれ、そこに発達する多くの谷を主谷である三滝渓が集めている。

渓谷の景観は三つの区間に分けられ、上流に向かって口の景勝、中の景勝、奥の景勝と呼ばれる。渓谷入口にある高山神社の社叢は、椿の多い原生林的な樹林景観を見せ「権現の森」と呼ばれ、口の景勝を特徴づけている。杣小屋から標高五〇〇メ

ートル付近の夫婦滝までの約一・五キロが中の景勝で、谷幅は狭くなり兩岸には絶壁が迫り、奥の景勝の幽門峡へと続く。奥の景勝では、滝、淵の連続する溪流となり、なかでも落差約七〇メートルの千畳滝は、三滝渓の象徴的景観となっている。

渓谷の地質は、口の景勝から中の景勝の中間地点付近までが鳥取南部火山岩類と呼ばれる安山岩や流紋岩およびその火砕岩類で、これより奥は吉岡花崗岩と呼ばれる黒雲母花崗岩となる。いずれも古第三紀の火成岩である。このほか、周囲をとりまく高地には新第三紀鮮新世の安山岩溶岩や同質の火砕岩類が分布している。また、奥の景勝の谷底は花崗岩であるが、兩岸壁はこの安山岩でできている。溪流に沿う道路の終点から遊歩道を辿ると、高さ長さともに四〇メートルほどの三滝吊橋に至り、ここから千畳滝を目前に望むことができる。

三滝のシャクナゲ

自然景観にも恵まれ、県の名勝に指定されている三滝渓はシャクナゲの名所としても知られている。特に

千丈滝の前面に架けられた吊り橋から見る、周囲の絶壁の岩場にはヒノキ、ホンシャクナゲ群落が見られ、四月下旬から五月上旬にかけて毎年美しいピンクのシャクナゲの花が咲き乱れる。

シャクナゲの種名はホンシャクナゲであり、シャクナゲの仲間の代表的な種という意味の和名である。花冠は広い漏斗状で七列し、花の直径は約五センチもあつてシャクナゲの仲間でも最も美しい。本州の中部地方以西から四国地部に分布し、鳥取県内でも標高五〇〇メートル辺りに広く分布する。三滝渓では標高七〇〇メートルあたりに一番多く見られる。

落河内の大カツラ

八頭郡河原町北村
JR鳥取駅より車で
四十五分

雌木で目通り直径は、約四メートル、枝張り東西三六・五メートル、南北三五・七メートル、枝張り総面積一、三〇〇平方メートル、高さ二五メートルもある。江府町村河原崎のカツラと並び、カツラとしては有数の巨樹である。

昭和四十八年（一九七三）三月、県の天然記念物に指定された。

米原章三

米原章三は政治、産業、経済、文化など幅広い分野に強い指導力を発揮した。

明治十六年（一八八三）、八上郡袋河原（現在の八頭郡河原町）の農家に生まれ、大学を卒業後、智頭町の山林地主・米原家の娘と結婚した。家業を継ぎ、まず山林事業の近代化に取り組んだ。

智頭町議会議員を経て、大正十二年（一九二三）に県議会議員、昭和三年（一九二八）には県議会議長に選ばれた。このころ、政府任命の知事に対し、党派を超えた実力者であった米原は「政務知事」と呼ばれ畏敬された。

県内の乗合自動車とタクシーが利用者獲得競争で白熱していたのを憂い、米原は政党の実力者を説得するなどして、昭和五年（一九三〇）、県東部のバス、タクシー八社を合併し、日ノ丸自動車株式会社を発足させた。このほかにも、鳥取大丸、日本海新聞、日本海テレビ、鳥取銀行など育てた企業は二十数社のぼる。昭和四十二年（一九六七）八十四歳で死去。

八東町

新興寺桜公園

八頭郡八東町新興寺
若桜鉄道安部駅より徒歩二十五分

平安時代から中世に栄えた新興寺境内の裏山に作られた桜園。国道二九号を若桜方面に向かい八東町に入る。「フルーツの里」の標示を過ぎ、左右に柿畑の広がる辺りが新興寺集落である。国道二九号沿いの各町ではもともと在来のエドヒガンが多く、ソメイヨシノなど新しい品種がまとまって植え込まれた公園は少なく、四月には花見をする人でにぎわう。また、新興寺谷川はホテルも多く、毎年六月中旬には新興寺ほたる祭が催される。

長源寺

八頭郡八東町岩淵
若桜鉄道八東駅下車、徒歩十五分

雲龍山長源寺は、黄檗宗に属する。創立年代は明らかでないが、古くは真言宗であったがのち曹洞宗に転じ

た。

京都花園妙心寺紫衣の大徳提宗和尚（寛文八年示寂、七十歳）が鳥取市栗谷町にある興禅寺の住職となり、黄檗宗に改派、始祖となった。その頃、長源寺も黄檗宗に改派し、開祖として迎えた。境内には、正平八年（一三五三）の宝篋印塔や延享五年（一七四八）鑄造の梵鐘（銘は百拙和尚）がある。この梵鐘は、太平洋戦争中の金属特別回収の際にも、特に県の存置鐘に指定され残った。

境内には故橋本栗谿詩碑や故河島遥齋歌碑、田中寒楼句碑のほか、梵鐘を残すのに貢献した川勝政太郎博士の句碑「石黙すれども我その声を聞かむ」がある。

勘右衛門土手

若桜鉄道八東駅より徒歩二〇分

年貢減免を要求して因伯数万の農民が決起した元文一揆の首謀者として処刑された勘右衛門は、八東町東の人で、土木・農業の技術者としても優れていた。八東川の洪水は幾度も大きな被害を起してきたが、勘右衛門は私財を投じて農民を指揮し、藩の援助を受けずに、金崎の樋門を

起点に下流左岸約五〇メートルにわたる堤防を完成させた。この堤防は巨石によって構築され、藤かずらを植えて地盤の強化を図ったという。

金崎橋付近には、人柱をその下に入れて流失を防ごうとしたという「金崎の人柱」と呼ばれる巨石を今も確認することができる。堤防の起点近くには昭和四十年（一九六五）に建立された顕彰碑とそのいわれを記した碑文石などがあり、その脇の高台には勘右衛門兄弟の墓がある。

新興寺

八頭郡八東町新興寺
若桜鉄道安部駅より徒歩二十五分

八東町内の地名にもなっている新興寺は、山号を波羅密山といい、真言宗醍醐派に属する。本尊は聖観音である。

『因幡国新興寺僧等解案』（文治三年（一一八七）には、和銅年中（七〇八―七一五）、僧行基によって開かれた寺で、当国（因幡国）最初寺」といい、行基作の延命観音、千手観音を本尊としたと記載されている。その真偽は別としても、平安末鎌倉初期には、因幡で有数の真言密教寺院であり、中世を通じて寺の

勢いは盛んであった。

安元三年（一一七七）と文治三年（一一八七）には、寺領内へ勝手に検断使（警察官）や、甲乙人（一般人）が入らないようにと願い出て、認められている。

建武元年（一一三四）には、後醍醐天皇の祈願所とされ、名和長年が寺領を保証していた。その後、寺領を侵害する者が次々に現われるが、その都度禁制が下付され寺領が守られてきた。しかし、戦国乱世になると寺領は奪われ、寺は衰退し、遂には僧一人が寺を守っていたという。その僧も慶長末年（一六一五）に没し、無住となり、以後、荒廃するにまかせた。天保年間（一六四四～四八）頃、再興され、最勝院（現鳥取市）の末寺となった。弘化三年（一八四六）に本堂が再建された。

裏の金峯山中にある平安末～鎌倉初に造られた経塚から出土した遺物と、至徳二年（一三八五）建立の宝篋印塔は、県の保護文化財に指定されている。

伊蘇乃佐只神社

八東町安井宿
若桜鉄道安部駅より徒歩十五分

伊蘇乃佐只神社は、『延喜式神名帳』に載る「伊蘇乃佐只神社二座」と考えられる古社である。祭神は神直毘神・大直毘神などである。近世には「浅崎大明神」といわれた。『因幡志』には、祭神はこの地の浅崎の瀬から出現したと記され、そこにてくる「伊蘇乃佐只」は「磯の崎」のことで、「浅崎」と同義と考えられている。

元禄年中（一六八八～一七〇四）に現在地に遷座された。享保十二年（一七二七）の火災により文書・寺宝など全て焼失したといわれる（『八東町誌』）。

また、当社の祭神が、当地を開墾していた時、笹で目を突かれて痛められたという伝説があり、氏子の安井宿では端午の節供の笹餅は作らない。

八東町 ふるさとの森

八頭郡八東町妻鹿野
若桜鉄道丹比駅より車で三〇分

ブナの森でキャンプが出来るという、少し贅沢な森林公園である。国道から分かれて、細見川をさかのぼ

ること約二十分の距離にある。扇ノ山から流れ出て八東川に注ぐ細見川が深い渓谷を刻み、標高七〇〇メートルの山腹にブナの純林に近い森をつくっている。この森には簡易宿泊施設二棟をはじめ、バンガロー十棟、テントサイト十張りなどが用意されている。管理棟をはじめ炊事場や簡易水洗トイレ、温水シャワーなどの設備が整っている。

ブナ林の中は歩道があり、樹木の肌に触れながら散策することができ。見上げるとブナの葉が明るく空を覆う。溪流に下りれば、水遊びを楽しむこともできる。秋の紅葉シーズンにはブナの黄色い枯葉、また、



溪流沿いにあるトキノキやカエデが多彩な色に変わり見飽きない。森林公園を起点に扇ノ山へ登山をする人も少なくない。

なお、園内にはアスレチック施設などがあり、子どもたちに人気がある。さらに、夏休みの昆虫採取にも最適な場所で、夜に森の中を懐中電灯で照らせばカブト虫やクワガタを見つけることができるなど、家族連れも十分楽しめる森である。

休園日 十二月～四月二十八日
問合せ先 ☎0858・84・3799

物産 道の駅 はつとつ

八頭郡八東町徳丸
若桜鉄道徳丸駅より徒歩一〇分

フルーツの里八東町にあつて、りんごの樹園地やスポーツ公園に囲まれた道の駅である。国道二九号が千代川から別れて八東川沿いに開けた農村を走る辺り、若桜鉄道の徳万駅付近に位置する。戸倉峠越えの往来にあり、また氷ノ山・扇ノ山一帯のレクリエーションの起点として人の集まる情報基地でもある。駐車場は広く百六十二台を収容できる。

八東町ではスポーツ・レクリエーション施設として、ゲートボール場などを備えた「総合運動公園」の整

備が進められ、さらに特産の果物を販売する目的で、「フルーツ総合センター」が建てられた。平成七年（一九九五）八月、複合施設のメリットを生かした道の駅が誕生した。管理は、第三セクター「八東町地域振興株式会社」が行っている。

八東町は果樹栽培が盛んで、とくに西条柿の栽培で知られる。その他、二十世紀梨、ぶどう、リンゴが栽培されている。道の駅の店頭にはこれらの季節の果物が並ぶ。また、町内ではフルーツ加工にも取り組んでおり、各種のフルーツ菓子もみやげ品として好評である。

道の駅の背後にある公園には芝生広場や野外遊具もあり、家族連れも多く訪れる。春には、今では珍しくなったエドヒガン桜の大き木が白い花をつけ、花見を楽しむこともできる。近くには観光農園や体験農園があり、道の駅でも案内がある。

清徳寺社叢

八頭郡八東町清徳
若桜鉄道八東駅より車で一〇分

八東駅から四キロの山峡に清徳寺の広大な寺跡がある。境内には珍しい名木、巨木がある。寺の右手にある檜膚ザクラは、檜皮で葺いた寺の

屋根がくずれて倒れ、檜皮の上にザクラが自然に咲いたことからこの名がついた。目通り九〇センチ、一・七メートルの上から北に出た一枝は枯死し、南、東、西に各一枝が出ている。樹高七メートル、花はヤマザクラ系統で花色弁片のなかほどに紅色の一線のあるものもある。十五ないし十七弁花で雄しべ二本のものも多く、一本のものや三本のものも混じっている。がく片は六個から十個のものもある。樹勢は弱い。

また、寺の前方左に二本の巨木がある。西方が大力ゴノキで、境内内の前方後円墳の後円部の盛土の外側に立っている。目通り四・四メートル、南北の枝張り一・二メートルの老木で東側に空洞がある。カゴノキは「鹿子のき」の意で、樹木が生長すると若木のとき滑らかであったものが、円く鱗片となって剥脱していき、鹿皮状の白い紋ができるという特性がある。

葉は常緑で四国、九州、沖縄、台湾などに分布するクスノキ科植物で山陰では島根半島に多い。鳥取県では中、西部に少数自生しているが、清徳寺付近には自生しない。そのことから献木と思われる稀代の巨木で

ある。

大力ゴノキと並んで東方に立つ大モチノキは、目通り二・九五メートル、高さ二〇メートルで、樹勢強大な巨木である。また、堂の右手前方の大ボダイジュは、立ち株の周囲五・五メートル、株から分かれた九本の枝は四方に張っている。樹高一五メートル、枝張り二メートルの巨木である。さらに清徳の小松庄平氏宅の裏には、オマキザクラが高くそびえている。この花は咲くと大麻（幣）の種子を蒔くことからこう名づけられたという。目通り周囲二・六メートル、樹高二〇メートル、枝張り一五・五メートル、開花時期は他のサクラより少し遅い。種類は未検定であるがこの地方の名木である。

矢部家住宅

八頭郡八東町用呂
若桜鉄道丹比駅よりバス一〇分

矢部家は、祖先が若桜鬼ヶ城主で、南北朝の動乱期には山名方の国侍として『太平記』にも記載されている。天正年間には尼子勢の攻撃を受けて滅びたと言われるが、その後、子孫がこの地に土着し江戸時代には代々大庄屋を勤めた古い家柄である。当

地に帰農して五代目の時に火災に遭い、現在の主屋はその後に建てられたものと伝えられる。主屋の建築年は過去帳や家構えなどから承応（元禄頃と思われる）。

主屋は梁間五間・桁行一間と規模も大きく格調の高い建築である。現在は「中の間」部分が拡張され、また「納戸」も前後に仕切られ、「広間」も「玄関」、「台所」と前後二室となり、部屋数も多い。しかし、口納戸の古い柱やそれに残る痕跡などから間取りを復元すると、当時の大型民家形式の一つである広間型五間取りとなる。構造形式も土間境に入側柱が建つなど古式を伝えている。小屋組は大黒柱列にも棟を支える束が建っており、「さす組」と「うだつ造」を併せもつ独特な架構形式であるが、これをこの地方では「半小屋造」と称している。屋根は入母屋造の茅葺である。長大であるため、棟には当地独特の棟飾りであるカラスオドリが十一個も乗っている。

昭和四十九年（一九七四）二月に国の重要文化財に指定された。

用呂の清水

八頭郡八東町用呂
若桜鉄道丹比駅よりバス一〇分、徒歩一〇分

清澄な湧水で、古くより地域住民の生活用水として大切に保全された。また、地域の重要な灌漑用水として利用されている。湧水量料は一日当たり三、〇〇〇立方メートル。平成二年（一九九〇）十二月、「因伯の名水」として県指定を受ける。下流に国の重要文化財「矢部家住宅」がある。

扇ノ山

鳥取県と兵庫県の県境には一、〇〇メートル級の山が連なり、その稜線沿いは氷ノ山後山那岐山国定公園に指定されている。この中の標高一、三〇九・九メートルの扇ノ山はなだらかな稜線を持ち、鳥取県側から見ると、山腹の尾根と谷が上方に向かって扇のように広がっていることからこの名前がついた。八頭郡、岩美郡、兵庫県美方郡にまたがる扇ノ山山塊は、第四紀更新世に活動した玄武岩質の火山群からなる。山塊内には、複数の地点にかつての火口に形成された火砕丘が認められ、こ

れらから流出した多くの溶岩が分布している。山頂は、基盤の岩石からなるが、そのすぐ北側の「大スツコ」と呼ばれる一、二七三メートルの円錐状のピークは火砕丘であると考えられる。このほか、北方稜線上の「小スツコ」（一、〇八九メートル）、広留野北端の小丘（九三〇メートル）や、稜線をはさんだ兵庫県側にある上山高原南端の上山（九四六メートル）は火砕丘で、それぞれが独立した小火山である。これらの個々の火山には名称がなく、まとめて扇ノ山火山あるいは火山群と呼ぶ。これらは、浸食が進み火口の凹地形は残っていないが、周囲には火山弾や火山礫、スコリア（軽石）が分布している。県立博物館に展示されている県指定天然記念物の「扇ノ山火山弾」は、長径が一メートルを超え重量三六六キログラムの巨大な紡錘状火山弾である。扇ノ山から南西方一キロメートルに位置する八東町地内から採集されたことからみて、広留野北端の九三〇メートル火砕丘から放出されたものと考えられる。

溶岩の多くは玄武岩であり安山岩を伴う。山頂付近を中心に南西、北西、北方の三方向に広がって分布し



ている。それぞれの分布域では、溶岩が当時の谷を埋めて流れたためにできた平坦な高原が、標高七〇〇、九〇〇メートル付近に発達している。広留野は南西、上山高原は北方に流下した溶岩がつくる高原で、ほかに北西部に河合谷高原、山頂のすぐ北東に畑ヶ平がある。河合谷高原には県内最大規模の県営河合谷牧場があり、広留野や畑ヶ平では高原野菜の畑作が行われている。南西に流れた溶岩は、広留野を経て八東川にいたる。八東町富枝の採石場跡では約一〇〇メートルの垂直な崖をなして露出している。柱状節理の発達した安山岩溶岩で、国道二九号から至近距離で見ることができる。この東方の千石岩や来見野川中流諸鹿の

屏風岩も、この溶岩がつくる岩壁である。扇ノ山火山群が活動した時代は溶岩の多くが逆帯磁で七三万年前以前を示していること、新期の溶岩が大山火山の約二十万年前の火山灰層を覆っていることから、およそ百万年前から数十万年前、地質時代という更新世前期から中期であると考えられる。

この山は須賀ノ山に連なり、冬季はスキー場として好適である。また、頂上からの兵庫県北部、鳥取県東部地方および日本海を眼下にした眺めはすばらしく、実に豪壮である。

春はウド・ギボシ・フキ・ミズナの採取、夏はキャンプに適する。また、秋の紅葉も美しい。主な登山コースとしては、若桜線丹比駅下車、富枝から妻鹿野滝谷をへて頂上までの一五キロのコースがある。

《扇ノ山の動植物》

扇ノ山の山容は、やや円味をもつ老年前期の地形であり、河合谷高原をはじめ、いたるところに高原状の原野がひらけて、頂上付近には噴火口跡と見られる凹地（通称穴ガ原）がある。安山岩地帯にはブナ・チシマザサ群落があったが、皆伐され残

存する原始林は極めて少ない。登山路にはイタヤカエデ・ミズナラ・ブナ、渓谷にはトチノキ・サワゲルミ・フサザクラなどが多く、ザゼンソウ・タジマタムラソウもある。また、広い山域には多様な種の動物が見られる。大型哺乳類はツキノワグマが生息し、ときに山麓部にまで現れる。その他、テン、ヤマネ、ニホンザルなどが見られるほか、イヌワシ、クマタカ、オオタカ、ハチクマなどの大型猛禽類をはじめ、落葉広葉樹林にはゴジュウカラ、コガラ、キバシリ、コルリ、オオアカゲラ、ジュウイチ、ツツドリ、コノハズク、渓谷部にはアカシヨウビン、ヤマセミ、オオルリ、オシドリ、クロツグミなどが生息する。さらに山頂部には、メボソムシクイ、クロジ、マミジロ、カヤクグリなど中部地方亜高山帯の鳥も見られ、鳥類は豊富である。

な昆虫も記録されており、甲虫類も多様と思われるが、多くの分野で調査が行われていない。穴力原付近にはマンガン鉱の露頭があるといわれる。また、上地川上流では、ハコネサンショウウオとヒダサンショウウオが発見されている。

若桜町

若桜神社

若桜町若桜
若桜鉄道若桜駅より徒歩一〇分

若桜神社は、**国立立命、伊井冊命、菅田別命**などを祭神とする、近世には松上大明神とか松神といわれて信仰された。

社伝によると、**武内宿禰**がこの地方に下向したときに参拝した古社と伝えられる。中世には、矢部氏、平師盛、名和長年、山名氏などが武運を祈って武具や所領を寄進している。

かつて鶴尾山八平谷に鎮座していたが、応安二年（一三六九）に、矢部氏は鶴尾山に鬼ヶ城を築城する際、神社を現在地の松上山に遷座した。その後、兵火に遭い神社は焼失したが再建された。藩政期には、郡中大社として藩の祈禱所に指定され、社領一石余、蔵米も同額与えられていた。明治四年（一八七二）に現社名に改称された。

例祭は、焼餅祭りといい、氏子は餅を焼いて神社に供えた。これは祭神が分霊されて行かれる途中、氏子

の家に立寄って焼餅を食べられたという故事によるといふ。祭礼当日は、供えられた焼餅の山を、神幸の先被い役が袋に入れて参拝者に投げ与えたものだといふ。

史跡 鬼ヶ城跡

八頭郡若桜町若桜
若桜鉄道若桜駅より徒歩約五〇分

標高四四六メートルの鶴尾山の山頂部から中腹に築かれた、中世近世初頭の山城である。創築年代は不明であるが、鎌倉期以来、若桜の領主であった矢部氏によって築かれたもの。

若桜は但馬、播磨との国境に位置する枢要の地で、天正初年の尼子再興戦においては、織田氏を背後にもつ尼子方、但馬の武士たちと結ぶ毛利氏、双方にとつて極めて重要な城であった。そのため、天正三・四年（一五七五・一五七六）ごろ、当城を舞台に両勢力が激しく戦ったが、その中で矢部氏は没落し、天正四年に城は毛利氏のものとなった。

その後、天正八年（一五八〇）、羽柴（豊臣）秀吉の因幡進出によってその手中に帰し、同九年の鳥取落城後は秀吉の家臣木下重堅が入城した。

木下氏は、慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原合戦によって滅亡するまで、二十年ほど在城した。慶長六年に山崎家盛が入城したが、山崎氏も元和三年（一六一七）に備中成羽に転封になり、代わって池田光政が因幡・伯耆二国を領有することになった。現在の遺構は、木下氏が中世山城の山頂部に石垣をめぐらした近世的城郭を築き、山崎氏が大改修したものと推定されている。ただ当城は池田氏によって徹底的に破却された。今残っている崩れた石垣、埋められた虎口（出入口）は、厳しい破却の模様をうかがわせるもので、この点でも貴重な遺構である。



若桜神社社叢

八頭郡若桜町若桜
若桜鉄道若桜駅より車で二分

若桜神社は旧郷社で、その社叢は若桜町と八東町にある遠見山から北東にのびる尾根の先端、南東斜面に位置する。標高は二二〇〜二八〇メートルで、シラカシが優占するみことな照葉樹林である。

神社の石段下にスタジイの大木が一本あるが、ほかにはシラカシの巨木で、胸高直径が九〇センチを超えるものもみられる。

ヒノキなどが混交し、植林とみられる部分もあり、自然な林の姿が多く残っているとはいえないが、鳥取県下でシラカシの多い林は少なく、山陰海岸地域の照葉樹林の典型的な植生として、昭和五十七年（一九八二）四月、県の天然記念物に指定された。

カリヤ通りと蔵通り

八頭郡若桜町若桜
若桜鉄道若桜駅より徒歩五分

若桜町は中世にできたまちで、鬼ヶ城のもと城下町が発達したと伝わる。江戸時代には鳥取から播州に達する若桜往來の宿場町となり、町並みが整えられた。

カリヤと呼ばれる深い庇が道路に張り出している町家が、町並みの特色である。このカリヤの発生は明治十八年とさほど古くない。度重なる大火の教訓として、道を広げ、両側には水路を新たに設け、家の前には約四尺（一・二メートル）のカリヤを付けるようになった。カリヤの下には、火事の媒介となるもの、通路の妨げとなるものはいっさい置いてはいけなさと取り決められた。また、カリヤの下は自由に通行することができ、雨の日や、雪深い冬の季節には通路として利用され、里謡にも

「若桜よいとこ 水が裏表 カリヤづたいに 傘いらす」と唄われている。中尾家、君野家をはじめいくつかの住宅には今でもカリヤが残っており、往時の町並みを今に伝えている。

表通りがカリヤ通りと称されるのに対して、裏通りは蔵通りと呼ばれる。その名の通り、裏通りには道に面して妻壁を見せる土蔵が建ち並び、蔵はほとんどが石積み土台の上に建てられ、全てが瓦葺で燃えにくく、防火帯の役目も果たしていた。これらの土蔵は一つ一つ表情が異なり、若桜独特の蔵並みを形成し

ている。若桜の町並みは、このカリヤ通りと蔵通りを合わせ持つところが特色がある。



若桜弁天祭

若桜町三倉
若桜鉄道若桜駅より車で五分

江島神社は、古くから「弁天さん」と呼ばれ、周辺の住民に親しまれてきた。九月の初めの巳の日に行われる例祭には、近郷近在の信者が、縁結びや商売繁盛を願って参詣する。

若桜町歴史民俗資料館

八頭郡若桜町
若桜鉄道若桜駅より徒歩一〇分

赤瓦に白壁の建物は、かつては若桜町の町中にあつた旧若桜銀行本店

(明治四十年建築)を移築したもので、展示資料のみならず建物の空間から往時の生活を実感できる。

若桜銀行の前進は、明治三十年(一八九七)に設立された若桜融通合資会社である。明治三十八年(一九〇五)に名称を合資会社若桜銀行と改め、同四十年(一九〇七)には木材の町にふさわしく樺造りのりっぱな行舎を若桜町大字若桜三七三番地に新築し移転した。歴史民俗資料館はこの建物をそのままつくり移築したものである。

資料館の隣には、県の保護文化財三百田氏住宅がある。また、その隣には近年増設された「たくみの館」があり、豊かな森林資源を利用して発展した町の木工芸の体験ができる。

三百田氏住宅

八頭郡若桜町屋蓋羅
若桜鉄道若桜駅より徒歩
一〇分

三百田氏住宅は、もと若桜町吉川にあった民家である。吉川は住宅が約二百戸の大きな村で、三百田家は古くからこの村の庄屋をしていた家柄であった。元禄七年(一六九四)正月付けの文書「一代普請合力人数帖」が残っていて、現在の主屋の普

請の過程を知ることができる。それによると、元禄六年(一六九三)十月から工事にとりかかり、延べ人数八百十九人、銀百三十六匁、米一石二斗五升が費やされ、翌七年三月末に完成している。

現在地(若桜町歴史民俗資料館の隣接地)に移築されたのは平成五年(一九九三)である。移築前には四方に下屋があり石置き杉皮葺き庇が付いていたが、移築を期に、建築当時の姿に還元された。

間取り形式は、奥の間、納戸、ザシキ(ヒロマ)のある典型的な広間型三間取で、当地方の十七世紀の民家の特色をよく伝えている。また、



桁行が八間、梁間が四間のいわゆる「四八」(しはち)と称される民家であり、「三六」(さぶろく)が普通であった当時としては規模も大きい。座敷部分と土間(庭)部分はほぼ同じ幅で、土間境中央に大黒柱が立つ。大戸口の下手には厩がある。昭和三十九年(一九六四)三月、県の保護文化財に指定された。

若桜郷土文化の里

八頭郡若桜町大字屋蓋羅
若桜鉄道若桜駅から徒歩十五分

若桜森林公園のふもとに県及び町指定の文化財や文化伝習施設などの建物が並ぶ。この辺り一帯は「若桜郷土文化の里」と呼ばれている。

この中に建つ「若桜町歴史民俗資料館」は、明治四十年(一九〇七)に建設された銀行の社屋を昭和五十六年(一九八一)に移転復元したもので、豪商の面影を伝える土蔵造りの建物は町指定文化財である。

また、県指定保護文化財「三百田氏住宅」は、平成四年(一九九二)より約二年かけて吉川集落から移築された庄屋の家である。入母屋茅葺き屋根などの建築様式に因幡地方の特徴をうかがい知ることができる。

若桜町山村文化保存伝習施設「た

くみの館」は、平成七年(一九九五)十月に若桜町のまち並みの特徴である「蔵通り」と「カリヤ通り」をイメージして建てられた土蔵造りの建物である。ここには町の文化、産業に関する資料の展示のほか、ろくろを使って木工体験のできる体験学習室などが設置されている。

開館時間 午前九時～午後五時
休館日 月曜日 祝日の場合はその翌日、年末年始
問合せ先 ☎0858・82・0583

岩屋堂

八頭郡若桜町岩屋堂
若桜鉄道若桜駅よりバス一〇分、
岩屋堂下車すぐ

天然の岩洞に設けられた堂は「窟堂」ともいわれ、平安初期の大同年間(八〇六～八一〇)の創建と伝えられ、妙見神光寺の一部であった。鎌倉時代前期に改築されている。昭和二十八年(一九五三)十一月に国の重要文化財に指定された。さらに昭和三十二年(一九五七)三月、解体復元修理して創建当時の姿にもどされた。

正面三間、側面四間で屋根は前方が入母屋造り、うしろが切妻造りで床下は舞台造りになっている。角柱・舟肘木・隅木など大面とりで時代の

古さを示している。(面取りは古いほど大きくとつてある)本尊は本朝三不動の一つ、因幡の「黒皮不動」として信仰を集めた不動明王で、伝説によると弘法大師の作といわれる。

神光寺は、弘仁年間(八一〇〜八二四)には七堂伽藍を連ねていたというが、いくたびの火災により、岩屋堂だけが残った。現在は真言宗醍醐派不動院という。三仏寺投入堂・出雲鰐淵寺・蔵王堂などともに岩窟利用の舞台造りであり、密教系であるという点ではほぼ同じ系列にあるものである。



氷ノ山

八頭郡若桜町春米
若桜鉄道駅よりバス二十五分、山頂まで徒歩二二〇分

県南東部若桜町と兵庫県との県境に位置する標高一、五二〇メートル

の山。中国地方で大山に次ぐ高峰で、須賀ノ山とも呼ばれる。

氷ノ山は、昭和十年(一九三三)に須賀山と改名したとき、氷の越の北にある赤倉頭(二、二三二メートル)を氷ノ山として、その名を存続させた。けれども依然として、須賀山を氷ノ山と呼んでいる場合がある。一応、氷ノ山山塊全体を指すものと考えた方がよい。

伝説によると、昔、神祖神霊が鎮座され、それを祀るお宮があった。崇神天皇の時、神籬および磐境をたてて皇祖神霊を祀られ、さらに垂仁天皇の時には神宮を造営し、祭祀の料としてこの地を皇室の御料地としたという。今も「高天原」と呼ぶ場所や二ノ丸、三ノ丸の地名が残っている。また、氷ノ山と名付けたのは、昔、天照大神がこの地に一泊して、朝日の光が木の枝に光り輝いているのを見て、「日枝の山」と名付けた。それが後に「豹の山」となり、さらに「氷ノ山」となったといわれる。但馬側では、古くは「四箇ノ山」と呼んでいた。

東西に延びる中国脊梁山脈から、北へ向かって千メートル級の山並みを、扇ノ山などともにつくつてい

る。この山並みのほか鳥取・岡山県境周辺の三室山・那岐山・後山などを含む一帯が、昭和四十四年(一九六九)に氷ノ山後山那岐山国定公園に指定された。

氷ノ山の山体は広大で、特に兵庫県側の南から東側にかけては緩い傾斜の山麓がひろがっている。一方、北半分と鳥取県側の東山麓の斜面は開析が進み、急斜面に多くの谷が形成されている。鳥取県側では、この急斜面につづいて春米付近まで緩い傾斜の地形が高原となって広がり、古くからスキー場として利用されてきた。

氷ノ山は、須賀の山安山岩とよばれる普通輝石シソ輝石安山岩溶岩からなる。これらは鮮新世末あるいは更新世前期に形成されたといわれている。この溶岩は、山頂の東や南では前述の緩傾斜山麓をつくり、その延長は若桜町南東部の大段と呼ばれる緩傾斜地へと続き、さらに北方へ細長く延び、赤倉山・兵庫県鉢伏山(一、二二二メートル)を経て兵庫県瀬川山(一、〇三九メートル)へと続く稜線を構成している。

山麓にある春米集落内を流れる春米川に滝があり、滝の壁に普舎寺泥

岩層が露出している。この滝壺に、普舎寺泥岩層の下位にくる諸鹿礫岩層の砂質泥岩が顔をのぞかせていて、ここから巻貝化石のピカリアが産出する。ピカリアは、熱帯・亜熱帯の汽水環境を示す示相化石として、また始新世・中新世を示す示準化石として貴重な化石である。

また、西日本では珍しく樹氷を見ることが出来る。しかし、この樹氷は、北海道や東北に見られる樹氷とは異なり、樹木にふきつけられた雪が氷結してできたものである。日があたり風が吹くと、パチパチ、キシキシと音がして氷ノ山の名物である。また、天然記念物イヌワシの生



息地として有数である。

一年を通じて登山をすることができ、鳥取県側の春米部落を起点としたワサビ谷コース、千谷コース、氷ノ越コースの三つと、兵庫県の関宮町福定から氷ノ越コースに合流する四つが主なものである。

また、この地方は、中国地方第一の多雪地帯で、雪質が軽く、スキー場として定評がある。十一月下旬から四月上旬までスキーが可能である。平成十一年（一九九九）、県営「響の森」を中心としたリクレーシヨン施設がオープンし、夏・冬を問わず多くの人が訪れる。

《氷ノ山の動植物》

鳥取・兵庫県境にまたがる標高一、五二〇メートルの中国山地第二の高山である。大山火山系のトロイデ式休火山である。山頂には火口沢を残している。地質は古生層・第三紀層の安山岩や集塊岩からなっているが、露岩は少ない。標高一、〇〇〇メートルあたりまでは人工植林のスギや、天然原生林のブナを始めカツラ・トチノキ・ナツツバキ・クリなどがある。その上は低木性のエゾユズリハ・ヒメモチなどや高山植物

のコケモモ・タマガワホトトギスが見られ、頂上近くにはスギ・キヤラボク・シナノキなどの優占種がみられる。頂上尾根には五月上旬まで雪があり、チシマザサの群生が一面に広がっている。

この植生に対応するように、鳥類では中部地方の亜高山帯に繁殖するメボソムシクイ、コマドリ、ホシガラスが分布している。また、ブナを中心とする原生林には鳥類ではクマタカ、コルリなど、哺乳類でツキノワグマ、ヤマネ、モモンガなど、昆虫類はアイノミドリシジミ、フジミドリシジミなど多くの希少種がいる。しかし、クマやイノシシは生活圏が人の生活圏と重なり問題が生じている。

諸鹿川溪谷

八頭郡若桜町諸鹿
若桜鉄道若桜駅より車で二〇分

扇ノ山の南東麓に源流をもち、若桜町若桜で八東川に注ぐ来見野川流域の渓谷。尾根をさんだすぐ北側には細見川が平行する。尾根は扇ノ山火山の溶岩流でできており、来見野川は細見川とともに、この溶岩と基盤岩類との境界部を浸食して流れている。来見野川流域に分布する基

盤岩類には、下流部に三郡变成岩や非变成古生・中生層、カンラン岩や角閃岩などの超塩基性岩、中流部には新第三系中新統鳥取層群の礫岩層や泥岩層、上流部に鮮新統照来層群の火山岩・火砕岩がある。

流域の最も奥の集落が諸鹿で、ここから上流、大鹿滝までが諸鹿溪谷の中心部となる。諸鹿の北、右岸上方には屏風岩と呼ばれる柱状節理の発達した扇ノ山安山岩溶岩の大岩壁がそそりたつ。

道路が途切れる標高四五〇メートル付近で、左岸側から木地山谷が合流する。この二股から上流の本流は本谷と呼ばれ、谷幅は狭く急峻なV字渓谷となり、標高八五〇メートル地点まで大小の滝が続く。これら諸鹿の七滝と呼ばれる滝を代表するものが、高さ約二〇メートルの大鹿滝である。滝の壁は下部にクリンカー部（溶岩流基底の破碎された部分）をとまなう扇ノ山の安山岩溶岩でつくられている。滝壺へは、西側尾根上にひるがる広留野高原から下るのが最も近い。大鹿滝の上流標高八五〇メートル地点には、安山岩溶岩を覆うやはり扇ノ山火山の噴出物である玄武岩溶岩からなる無名の滝があ

り、ここから上流は勾配のゆるい穏やかな来見野川源流部となる。

諸鹿集落付近には硬く緻密な泥岩が産し、諸鹿石と呼ばれて硯や花台に加工され利用されてきた。諸鹿石は、鳥取層群の普含寺泥岩層が、これを貫く火成岩脈の熱により変質したものである。

わかさ氷ノ山 ふれあいの里

八頭郡若桜町春米
若桜鉄道若桜駅よりバス
二十五分、ふれあいの里下
車、徒歩三分

わかさ氷ノ山ふれあいの里は、中国地方第二の高峰氷ノ山の豊かな自然を、登山、ハイキング、キャンプ、スキーなどさまざまな角度から体験できるように整備された。

平成十一年（一九九九）七月に開設された「氷ノ山自然ふれあい館・響の森」には、ブナ林を再現し氷ノ山の自然を紹介した直径二三メートル、高さ一〇メートルの日本最大のジオラマをはじめ、イヌワシに乗って氷ノ山を空から観察する「イーグルスカイシアター」などがある。氷ノ山の地形、動植物や自然のしくみについて楽しみながら学ぶことができる。

また、ここでは自然観察や自然講座のほか、木の実など自然の恵みを

使用したものの作りや雪山ハイキングなどの自然体験プログラムが実施されている。

開館時間 (氷ノ山自然ふれあい館・響の森) 午前九時～午後五時

休館日 月曜日及び年末年始、十二月は月曜日・木曜日

問合せ先 ☎0858・82・1621



おち 折おり

八頭郡若桜町落折
若桜鉄道若桜駅より車で十五分

国道二九号が若桜町から兵庫境側の波賀町戸倉へ越える県境に位置する。標高は八九メートル。幾つものカーブが続き長らく難所だった県境部分も、平成七年(一九九五)、新戸倉トンネルの開通によって峠の下を一気に抜けて県境を越えることができるようになった。トンネルの延長は一、七三〇メートル、標高は若桜町側で七〇九メートル、兵庫側

側の波賀町側では七六三メートルである。

氷ノ山(標高一、五一〇メートル)山系の一角にあり、山懐も深く、谷筋にはミスナラやカエデの自然林が残る。五月の新緑、十月から十一月の紅葉、それぞれに美しい。

落折集落は平家の落人伝説の山村であり、平の名字が多い。また、木地師きじしの里でもあった。峠の前後は林業地であり、あちこちに杉木立をみる。特に戸倉側には「複層林施業地」という看板のある国有林の展示林があり、大径木の杉が林立する様を間近にみる事ができる。

鳥取市と姫路市を結ぶ国道二九号は古くから播磨往来と呼ばれ、姫路、大阪方面への最短コースであった。しかし、急坂の続く難所でもあり、鳥取藩の参勤交代の道は智頭町の志戸坂峠(今の国道三七三号)が使われてきた。現在、県内では九号につづく小さい番号に認定されている。この背景には明治以来の地元の熱意があり、今も「ルート二九」と呼ばれ、地域活性化の軸となっている。冬季はスキー街道となり、若桜町側の「氷ノ山スキー場」、あるいは波賀町側の三つのスキー場へのアク

セス道路となる。また、「八東」、「波賀」、「南波賀」、「一宮」、「山崎」と連なる道の駅街道でもある。地元産物のショッピングを楽しみながら、峠を行き交う人々が絶えない。

平家伝説

平家の落人が人目を避けて山間僻地に逃げのび、そこに住み着くという平家伝説は、県内でも岩美郡国府町、岩美町、八頭郡若桜町、佐治村、郡家町、倉吉市、東伯郡三朝町などの山間部に伝わる。

兵庫県境に近い若桜町の集落・

落折おちおりは、郎党をつれた平経盛が当地で自害したと伝えられている。一説には氏神、舟河原明神は経盛の霊を祀っているという。集落内には、他にも経盛の墓所、位牌、身を隠したという洞窟がある。

おちおり 落折のイチイ

八頭郡若桜町落折
若桜鉄道若桜駅より車で十五分

国道二九号沿い、落折集落のほぼ中央に、平家の残党・平経盛の墓がある。その脇にイチイの雄の大木が植えられている。樹高約六メートル、胸径七〇センチ、枝張り東西一四

七・五メートル、南北六メートルあり、地方有数の巨樹である。

ほそみ 細見溪谷

若桜鉄道丹比駅より車で十五分

八東町の東端部を流れる細見川がつくる溪谷。細見川は流長約一三キロメートルで、扇あおのせんノ山(一、三〇九メートル)山頂南の源流部から八東町富枝まで流下し、八東川と合流する。

若桜町との町境に沿って延びる尾根をはさんだ南東側には、諸鹿もろが溪谷をつくる来見野川が並行して流れている。細見川の上流部は、新第三紀鮮新世の照来層群に属する寺田安山岩層(鳥越火砕岩層ともいう)を浸食しながら流れ、流域には火砕岩や溶岩類が分布する。広留野登口付近から横地付近までの中流域では、左岸側で扇ノ山溶岩に、右岸側で寺田安山岩層に覆われて新第三紀中新世の鳥取層群普含寺泥岩層および諸鹿礫岩層がみられる。この下流の妻鹿野から横地にかけては、古生層を貫く角閃石ハイレイ岩や角閃岩および蛇紋岩化したカンラン岩が分布する地域に変わる。

妻鹿野の発電所前の溪床には、長

径五センチに達する巨大な角閃石をもつ角閃岩がみられる。また、横地付近のカンラン岩は蛇紋岩化が著しく、地滑りの原因となっている。横地を過ぎて下流域に入ると谷幅が広がり、細見川は谷底平野を流れるようになる。下流域では、左岸側に扇ノ山溶岩の安山岩が、右岸側には古生代から中生代初期にわたる三郡変成岩の千枚岩類が分布する。細見溪谷の中流域から上流域が溪谷と呼ぶにふさわしい景観を見せている。

用瀬町

三角山

八頭郡用瀬町用瀬
J R用瀬駅下車より徒歩一〇〇分

用瀬町の東方にある標高五一六メートルの三角型の山。別名を頭巾山ともいう。頂上には峰錫権現を祀る三角山神社があつて、夏祭りには多くの参詣客でにぎわう。

三角山は中生代末の花崗岩からなり、傾斜は緩いところで五十〜五十八度、急なところで七十二度と急峻な傾斜をもつ。この形はもともとにあつた花崗岩が、風化し、大量に浸食されて、浸食に強い未風化の岩盤が尖峰のように残つたためである。三角山から南方の洗足山にかけては、同様の花崗岩質の山が見られる。

一の谷公園

八頭郡用瀬町用瀬
J R用瀬駅より徒歩一〇分

国道五三号沿いの用瀬町役場横から千代川対岸に「流しびなの館」を見て街中に入る。上方往来で栄えた宿場町の面影を色濃く残す旧道を行くと、猿田彦命を祭る三角山神社のある頭巾山（標高五一六メートル）

を仰ぎ、東井神社の石段下に行き着く。右手の山口から山裾を巻くように歩道が整備されており、ヒノキ林内を抜けると一面にミツバツツジ園が広がる。毎年四月中旬頃が花盛りとなり、ぼんぼり提灯に照らされた淡く赤みを帯びた山腹の姿は幻想的で美しい。公園の上にある展望台からは、用瀬の町と千代川の川筋を一望することができる。近くには、同じくツツジで有名な愛宕山公園、戦国期の山城の影石城跡があり、一帯は森林公園として遊歩道が整備されている。町内には句碑・歌碑が多く、それらを訪ね歩く「散歩径」が楽しい。公園内には、谷口雲崖の「頂へ径まだ半ば花こぶし」がある。

三角山神社

八頭郡用瀬町用瀬
J R用瀬駅より徒歩十五分

用瀬町の東にそびえる険しい山、三角山はその山容から頭巾山ともいう。三角山神社はこの山頂に鎮座し猿田彦命を祭神とする。近世には峰錫権現といった。怪石巨岩の連なる修験の神社である。

天正九年（一五八一）の秀吉因幡攻めの折に兵火に焼かれた。現本殿は弘化二年（一八四五）に再建され

たが明治四十年（一九〇七）に本殿を西向きに建て替えられた。

『因幡志』には、「…麓より本社まで十八町、山路は峻し、…山下に垢離場、女人堂ありて、それより山中婦人を入れず…」とある。また、祭日には、信者は堂に泊り、願の成就した者は小石を手向けて礼にしたという。

一説には、天孫降臨のとき、猿田彦命が日向高千穂峰に行く前に、当山に寄りしばらく住んだので、「御栖山」といったのが、三角山になまったといわれている。

もちがせ流しびなの館

八頭郡用瀬町別府
J R用瀬駅より歩いて五分

用瀬町は、智頭川と佐治川が合流し千代川になる所に位置し、町では、毎年旧暦の三月三日に無病息災を願ひ、千代川に雛を流す行事が行われており、全国的にも知られている。「流しびなの館」は、金閣寺を一部模した木造の建物である。

全国から集められた珍しい江戸時代からの雛人形、竹田人形、押絵雛など約六〇〇点が展示されている。

開館時間 午前九時〜午後五時
休館日 水曜日、祝日の翌日



ひな流し

八頭郡用瀬町別府
J R用瀬駅より徒歩五分

県東部地方では足利時代のころから旧節句には流しびなをする習慣がある。流しびなは、元来、人の災厄を除くためにこの人形を身代わりとして、災厄を背負わして流した。県内では用瀬町と鳥取市で現在も行われている。

用瀬町では、旧暦の三月三日、千代河原の「ふれあいの水辺」で古式ゆかしき行われる。祈祷神事後、古くなつた雛人形を焼き、古い雛人形が家を離れることに感謝し、はら

い清める神事「雛のお焚きあげ」が行われる。

着飾つた幼女や観光客が紙雛を乗せた棧俵を千代川に流しこれから一年間の幸せを祈る。

また、流しびなの日は、町内の家庭で雛飾りが公開される。

用瀬町物産 観光センター

八頭郡用瀬町別府
J R用瀬駅より徒歩五分

「流しびなの館」の隣に建つ。町内外の物産の展示即売をはじめ、談話室、休憩室、月見台などがあり、ゆっくりとすごすことができる。

開館時間 午前九時～午後六時

休館日 月曜日（祝日の場合はその翌日）

問合せ先 ☎ 0858・87・3220

史跡 景石城跡

八頭郡用瀬町用瀬
J R用瀬駅より徒歩三〇分

標高三二五メートルのお城山に築かれた中世の山城。用瀬集落との比高は二五〇メートルほどある。山頂部とそこから西に伸びる尾根上に数段の曲輪（削平地）があり、山頂部の曲輪は石垣で囲まれていたと推定されている。麓の谷の奥に屋敷跡とされる数か所の平地がある。

当城の初見は、延文五年（一三六〇）に赤松氏が影石城等を攻め落と

したという、『太平記』の記事である。戦国期には用瀬氏の居城であったようであるが、天正年間（一五七三～一五九一）の初めから、山中鹿之助らと毛利氏の合戦に巻き込まれて、何度か戦いが繰り返された。さらに天正八・九年（一五八〇・一五八一）の羽柴（豊臣）秀吉の因幡攻略の際には、両方にとって戦略上の要地として、争奪戦の舞台となった。

十八世紀末の『因幡志』には、鳥取城の開城後、秀吉方の磯部兵部太輔という武士が城主として入つたと記している。用瀬町指定史跡。

文学の小径

八頭郡用瀬町下町
J R用瀬駅より徒歩一〇分

用瀬町下町踏切のそばに立つ松尾芭蕉の句碑から用瀬小学校下の岸本正一歌碑までの通学道路、約一キロメートルを中心に文学碑や史跡記念碑が並ぶ「文学の小径」がある。

用瀬町は、古くから宿場町として栄え、文芸家や絵かきたちが多く訪れ、足跡を残している。そんな先人たちの文学碑を建てて顕彰し、町民の文化的関心を高めようと昭和五十

七年（一九八二）、「用瀬文学碑建設の会」が町民の有志によつて設立された。種田山頭火や田中寒楼らの文学碑が二十二基、史跡記念碑も十四基設けられている。この「文学の小径」は「もちがせの散歩道」とも呼ばれ、流しびなの里のもう一つの魅力となっている。

この道路に面して、大善寺・正覚寺・円教寺（用瀬三寺）と、氏神の東井神社が並び、さらに町立図書館と郷土館が建っている。



大安興寺

用瀬町鷹狩
JR因美線鷹狩駅より徒歩一〇分

大安興寺は、山号を医王山といい、真言宗に属す。高野山親王寺の末寺である。本尊は行基の作といわれる薬師如来である。

大化元年（六四五）、伝道仙人によつて医王山の山上に開かれたと伝えられる。和銅二年（七〇九）行基により整えられ医王山大安興寺の称号を賜つたとされる。また、その他の文書からみても、散岐郷内の熊野修験の拠点になっていたことがうかがわれる。

永正十一年（一五一四）、当寺は城郭としても用いられたため、万巻の経巻と共に兵火に焼失した。その後、再興と焼失をくり返した。一時、鷹狩村内にあつたが、寛文十二年（一六七二）、医王山の山腹に移された。近世には藩の祈願寺にもなった。昭和三十七年（一九六二）の火事で焼失、現在は山麓に本堂が再建されている。

寺蔵の絹本着色釈迦十六善神像は県指定の文化財であり、また幕末に西郷隆盛と僧・月照が当寺に身を寄せたという言い伝えがあり、月照の

短冊が残る。

犬山神社社叢

八頭郡用瀬町宮原
JR因幡社駅より徒歩で五分

犬山神社社叢は、籠山（九〇五メートル）から伸びる尾根の末端に位置する。標高一四〇〜一八〇メートルの急峻な斜面にみられる原生林の照葉樹林で、昭和六十年（一九八五）二月に県の天然記念物に指定された。

社叢全体はスタジイの大木で覆われているが、とりわけ社殿周辺の尾根部分にはスタジイの巨木が多く、北側傾斜にはシラカシ、ウラジロガシなどの照葉樹も混交している。

この社叢の北側斜面にはイヌブナがみられ、胸高直径四〇〜六〇センチの大木が六本ほどあつて樹幹にはマメツタ（シダ植物）が着生している。

また、希少種のツクバネガシも一本みられ、樹高は一五メートル、胸高直径は四〇センチの大木である。そのほかミズメなど、千代川の谷筋の冷涼効果により、二〇〇メートル以下の標高ではあまり見られない樹林が混じる。自然やその地域の気候を反映した自然林として貴重である。

江波の三番叟

八頭郡用瀬町江波

毎年十月二十二日に近い日曜日、江波神社の例祭日に境内にあるまわり舞台で上演されている。「三番叟」は化粧をした男の子が曲芸のように上体を反らしながら舞う。

江戸時代の中頃、大坂の商人が歌舞伎とともに伝えたといわれている。本来、集落内の総領だけに伝承されて、村祭りの歌舞伎の前座に祝儀として舞ったほか、病氣平癒、安産祈願などに願立てをして舞ったものである。

他に類例を見ない芸能であり、農

村歌舞伎の地方への伝播を知る上で価値が高いことから、平成六年（一九九四）に県の無形民俗文化財に指定されている。

洗足山

JR用瀬駅より徒歩二〇分

八頭郡用瀬町南部にある標高七三六・三メートルの山。北方の三角山から連なる花崗岩山地の最高峰。花崗岩の風化浸食によつて残丘状に切り立った山容を見せる。西面の山麓には平坦な浸食面があり、東側は北流する赤波川によつて深い谷が形成されている。

山の名の由来は因幡誌に「千賊山」と記されていることや用瀬町金屋の「千賊の岩屋」の伝説と関係があるようだが、詳細は定かでない。

中津美溪谷

八頭郡用瀬町屋住
JR因幡社駅より車で二〇分

八頭郡用瀬町の南部、中津美川がつくる溪谷。中津美川は、千代川支流の安蔵川に注ぐ小規模の河川である。岡山県との県境、黒岩高原の北斜面に源流があり、そこから北東に約四キロ流下して、用瀬町山口と下屋住の間で安蔵川と合流する。中津



美渓谷と呼ばれる範囲は明確ではない。

渓谷は、黒雲母アダメロ岩を主とする用瀬花崗岩の分布地帯を浸食し、多くの滝や淵が形成されている。支谷を多く集めることから八百八谷ともいわれる。渓谷の下流部には、かつて八頭鉾山があり、用瀬花崗岩中の石英脈を採鉱する珪石鉾山として稼行していたことがある。なお、用瀬花崗岩は節理の発達が弱いため割れ目の少ない良質な石材となり、山口北の安蔵川沿いで現在も大規模に採石されている。この石材は、この付近の旧地名である社村にちなんで、「やしろ石」あるいは「やしろみかげ」と呼ばれる。安蔵川との合流点の渓谷入口から、約二キロ上流まで林道があり、車も乗り入れることができる。

赤波川渓谷

あがなみがわけいこく
八頭郡智頭町・用瀬町
J R 鷹狩駅より車で十五分

赤波川は八頭郡智頭町・用瀬町を流れる千代川の支流で一級河川。智頭町沖ノ山（標高一、三一九メートル）に源を発し、用瀬町鷹狩字馬橋で千代川に合流する。流長一五・三キロメートルで、大部分は三郡変成

岩地帯を流れるが、一部中生代白亜紀末期の用瀬花崗岩地帯を流れる。距離にすると一・二キロメートル余りであるが、この区域を赤波川渓谷と呼んでいる。

この渓谷の両岸には花崗岩の絶壁が切り立ち、河床勾配のきついV字谷を形成している。また、この渓谷には、花崗岩の巨礫やポットホール（おつ六）と呼ばれる浸食地形が多数見られ、美しい景観を楽しむことができる。ポットホールの数は、調査されたもので三十を越え、規模が小さいものや水中にあるものを含めると数えきれない。渓谷一帯が赤波川おう穴群となっている。

ポットホールは、溝状（長楕円形）のものやホールの縁や底が複雑な形をしたものが多く、円球状のものは



少ない。大きなものは深さ三メートルを越える滝つぼ状になったものや、穴の底が段上になったものなどが見られる。いずれにもホール内壁はきれいに浸食されている。ポットホール以外にも花崗岩が節理に沿って浸食を受けた長い溝状の地形や何段もの階段状になった河床が観察でき、夏は川遊びに適している。

佐治村

田岡神社社叢

八頭郡佐治村津無
J R 用瀬駅よりバス一〇分、津無下車、徒歩三〇分

津無集落の上方、標高約三〇〇メートルの山地の緩い傾斜地にある小規模な社叢である。

社叢の周囲にある数本のケヤキの大木は、植えられたものと推定される。樹林となっているのはヤブツバキで、この中にシロダモやタブノキの若木が混じる。この樹林はもとほされるが、ツバキ以外のものは伐採された可能性が高い。

この樹林の中の樹高一八メートル、胸高直径七三センチメートル、樹齢三百年のヤブツバキの巨木はひととき目立つ。このほか、境内には約三十本のツバキの若木が林をなしており、いっせいに咲きそろう姿はみごとく、昭和四十八年（一九七三）三月に県の天然記念物に指定された。

和紙工房

「かみんぐさじ」

八頭郡佐治村福園
J R 用瀬駅より車で約二〇分

今も昔ながらの和紙製造の技法が

続けられている佐治村は、画仙紙の生産量では全国の六〇パーセントを占めている。

ここでは自分だけの作品づくりを通して、伝統工芸品の手すき和紙や紙すき作業について知ることができ

る。

開館時間 午前九時～午後四時三〇分

休館日 水曜日

さじアストロパーク

八頭郡佐治村高山
JRR用瀬駅より車で約二十五分

さじアストロパークは豊かな自然の山々に囲まれ、その上空には美しい夜空が広がる。

天文台に設置された国内最大級の口径を持つ反射望遠鏡や太陽望遠鏡で、宇宙の神秘や太陽の活発な活動を観察したり、プラネタリウムで幻想的な宇宙体験や星の物語を見たりすることができ。また、夜間観望会では、解説を聞きながら四季折々の星を楽しめる。

パーク内には、観測設備を備えたコテージやベンション、レストランがあり、ゆっくりと観測することができる。

開館時間

四月～九月：午前九時～午後一〇時
十一月～三月：午前九時～午後九時
休館日 月曜日、祝日の翌日、年末年始、毎月第火曜日

問合せ先 ☎0858・89・1011

林泉寺

佐治村高山
JRR用瀬駅よりバス十五分、佐治村役場前下車、徒歩十五分

林泉寺は、山号を月光山といい、曹洞宗に属し、本尊は釈迦如来である。

応永二十年（一四一三）の火災によって古文書類焼失したため、開山などについては一切不明だが、開かれた当時は、村内福園の山中であつて香泉寺といつたと伝えられる。

応永二十三年（一四一六）、高山の中谷久兵衛が再興したとの説があるが、同寺の碑には「応永廿三年祝融灰尽」とある。

天正九年（一五八一）、羽柴（豊臣）秀吉の因幡攻めの際に焼かれた。これには次のような言い伝えがある。寺で打つ晩鐘を聞き、寺の存在を知つた秀吉軍が引返して焼打ちした。なお、鐘の音を聞いた所は「聞尾谷」だったといわれる。

また、このとき和尚は、過去帳や文書類を作州化生寺（現勝山町）に運び、寺宝の漆千杯、朱千杯、蕨縄

千束、金鶏のつがいをも、「朝日さす、夕日輝く椿の下に埋めた」という長者伝説も伝える。

正和四年（一六四七）、村内宮ノ元に寺を移し、貞享元年（一六八四）に天徳寺（現鳥取市）の八世通翁を招いて開山とし、寺号・宗派を現在のものに改めた。寛保二年（一七四二）に焼失し、同三年に現在地に移された。

佐治村

民俗資料館「民話の里」

八頭郡佐治村福園
JRR用瀬駅より、バス十五分、役場前下車すぐ

明治、大正時代にこの地方で使われていた農・林業用具や和紙製造用などの古い民具が展示されている。

開館時間 午前九時～午後四時三〇分
休館日 土・日曜日、祝日、年末年始
問合せ先 ☎0858・88・0218

余戸の雨乞踊

八頭郡佐治村余戸

余戸に伝わる風流踊。雨乞いによる降雨に対するお礼として奉納された。約百人の踊子が八時間かけて踊る。

起源は、当地区の金山神社氏子である女人が宮中に出仕、十二あつた踊りのうち八つを村に持ち帰つたと

伝えられている。現在伝えられている衣装には、元禄時代の風俗さながらのものがあり、当時の風流踊を考える上で貴重な資料である。

昭和四十九年（一九七四）に県の無形民俗文化財に指定されている。しかし、後継者不足で近年奉納されていない。

佐治川石

八頭郡佐治村に産する鑑賞石。佐治村加瀬木付近に分布する三郡変成岩帯の緑色千枚岩中に産する。源岩は凝灰角礫岩とみられ、白亜紀の花崗岩の貫入による接触変成をつけ、

堅く緻密な岩石に変化している。岩石全体が暗緑色で凹凸に富んだ外観である。自然の山水風景を想わせるような趣を持ち、庭石や水石として鑑賞に供されている。

佐治川石は、佐治村細尾から加瀬木にかけての佐治川からやや離れた南岸山地のごく限られた区域に分布する。佐治川周辺は自然環境保全地域に指定されて、特に佐治村森坪から余戸の間は特別地域として採集などは禁止されている。なお佐治川石は、佐治村役場中庭にある「黎明の

庭」や佐治川の河川敷にある「佐治川石公園」で鑑賞することができる。

飯盛山

八頭郡佐治村津無
J R用瀬駅よりバス十二分 山頂まで約四キロ

標高五六〇メートルで、三國山東部末端に位置する。飯を盛ったような山体をしているのでこの名がある。山はコナラ・クリ・リョウブなどの落葉広葉樹の二次林におおわれ、ナシなども栽培されている。

山王溪谷

八頭郡佐治村中
J R用瀬駅よりバス三十六分 中下車、徒歩約二〇分

佐治川の支流山王谷川にかかる山王滝を中心とする溪谷。山王滝は、山王谷川の標高四五〇メートルのところにあり滝で、基盤岩は三郡変成岩中の珪質千枚岩である。滝の落差は一五メートル、上部が浸食により三段の滝となり、滝つぼは幅二〇メートル、奥行一五メートル、深さ約二メートルの楕円形となっている。山王滝下流には、村営のたんぼり荘、山王谷キャンプ場などがある。また、近くには県営佐治川ダム・青少年旅行村などのハイキングコースがあり、春の新緑、秋の紅葉のシーズンは観光客でにぎわう。



佐治川溪谷

J R用瀬駅より車で二十五分

佐治川は岡山県境の辰巳峠に源を発し、用瀬町別府で千代川に合流する一級河川。佐治川の右岸は三郡変成岩の黒色片岩、左岸は珪質片岩の地層が分布し、佐治村を西から東に向かつて流下する。佐治村尾際から余戸にかけては、蛇行したV字谷となり、佐治川溪谷と呼ばれる。

流域には、山王谷川、北谷川、木合谷川、津無谷川などの二十余りの支流があり、尾際の「猿渡り溪谷」は見事なV字谷溪谷をなす。また、尾際には、この峡谷地形を利用して

昭和四十七年（一九七二）に佐治川ダムが建設された。

この他にも、標高一、二〇三メートルの高鉢山（山を南側から見るとかぶとの鉢のような形に見えるからこの名がある）、氷ノ山後山那岐山（山国定公園内にある三原高原、佐治川の支流西谷川にかかる亀滝、木合谷川上流にかかる不動滝など、見所が多い。

辰巳峠

八頭郡佐治村栃原

国道四八二号が佐治村栃原から岡山県上斎原村恩原へ抜ける県境に位置する。標高は七八六メートル。田住峠あるいは田角峠ともいう。国道五三号を用瀬町の流しびなの館付近で別れ、急峻なV字型溪谷の佐治川をさかのぼる。さじアストロパーク、和紙の里、茅葺屋根の佐治村民俗資料館「民話の里」、佐治川ダムと通り、栃原の集落を過ぎて山に掛かる。道路を覆うばかりのトチノ木の大道に出会うと峠は近い。一帯は不動山国有林を称し、トチノキの樹林は県の天然記念物に指定されている。

峠には、駐車場が設けられ柵から手を差し伸べると届くばかりにトチ

ノの木の枝が広がる。ここまで登ると灰色肌の本ナも混じる。また、道路脇には国府町出身の文学者・野村愛正（一八九一～一九七四）の「花栃や国境の道百折す」の句碑がある。

峠を越えて岡山県に入るとそれまでの急坂が嘘のようになだらかな恩原高原となる。恩原から人形峠を経て遠くは蒜山高原、さらに大山へと山岳ドライブが楽しめる。国道四八二号は京都府の宮津市を起点に、丹波山地と中国山地の山間部を踏破し、国道一八一号を経て米子市までを結ぶ雄大な山岳道路である。

なお、佐治村からの山越えは、昭和三十五年（一九六〇）に国有林との併用林道として開設され、その後県道、主要地方道を経て、国道に認定されたものである。江戸時代にはトチ、ブナ、カエデを使った木工が盛んで、木地椀やかぶり笠の産地として名をなした。その後、木工生産は廃れたが、天然林の深い溪谷に往時の面影をしのぶことができる。

三 国 山

JR用瀬駅より栃原行バス三十六分、山頂まで約一〇キロメートル

八頭郡佐治村、東伯郡三朝町、岡山県上斎原村の境にある標高一、二一三メートル（三角点は一二五二メートル）の山。一帯は花崗岩と三郡変成岩の基盤の上に安山岩がおおつて、東西一五キロ、南北一五キロに及ぶ山塊を形成する。山の周囲の谷は深く、急流や滝が多い。山麓には山王滝、恩原牧場（岡山県）などがある。

佐治谷ばなし

昔から佐治村に伝わる話で、その内容は、日常のことを題材にした笑いを誘うユニークなものが多い。

現在、語り部の人たちによる伝承活動のほか、狂言で演じるなど新たな取り組みも行われている。

民 話

親類の家に行った若者が、そこで食べたものがあまりにおいしかったので、その家の人に「これは何というものか」と尋

ねると、「たんごだ」と答えた。

若者は、家でも作ってもらおうと思ひ、名前を忘れないようにするため、帰り道、「たんご、たんご、たんご」とつぶやきながら歩いていった。しかし、小川に出くわした。それを飛び越えるため、若者は「えいっ」と叫んだ。「えい、えい」とつぶやきながら帰った若者が、母親に「えいを作って欲しい」と言うと、母親は「えいとは何だ」と尋ねた。すると若者は「あのうまいえいを知らんだか」といつて母親を棒でたたいたため、大きなコブができた。母親は、「お前がたたくからだんごのようなこぶができたがな」と歎いた。

若者はそれを聞いて、「ああそのだんご、だんご」といったそうなる。（佐治谷ばなしより）

智 頭 町

諏訪神社

八頭郡智頭町智頭
JR智頭駅より徒歩十五分

諏訪神社は、健御名方神・木花咲耶姫命など十六神を祭神とする。弘安元年（一一七八）に、信濃国（現長野県）の諏訪大社より分霊を勧請したと伝えられる。

諏訪大明神といって、軍の神・鎮火の神として崇拜されてきた。蒙古襲来の際は敵国調伏を、建武中興の時は、後醍醐天皇が鎌倉調伏を祈願されたと伝えられる。

江戸時代は藩主の祈願所にもなっていた。維新の時に現社名に改められた。

当社では、御柱祭（四柱祭とも）という本殿の四隅に立つ杉の柱を立て替える神事が行われる。この神事は、天明二年（一七八二）、智頭宿大火の後、鎮火を願って信濃国諏訪大社にならい、寅年と申年、つまり六年毎の四月に、酉の日を選んで行われるようになった。

当日の未明、白シャツ白ズボンの若者達が山に入り、予め決めてある

五、六十年生の杉の大木四本を、二丈六尺の長さで切り出し、ムカデという台座四台に載せて飾る。一台あたり台座と杉の重さは、約六〇〇キログラムにもなる。これを若者二百人が四組に分かれ、太鼓・幣振りを合図に、担いで山から降りる。四組は出合わないようにしながら、「ワツシヨイ」の掛け声と共に、約二時間かけて町中をくまなく練り歩く。午後、いつせいに神社に上り、境内に木四本を並べ、皮をはぎ、塩で磨き、くじで決められた東西南北に、各柱を立てる。

この祭りは、かつては信濃国大社と同様に、荒っぽい祭りだ、けが人が多く出たという。最近はややかになつたが、それでも擦り傷・ねんざなどのけが人が絶えない。

また、昔は例祭の日、智頭宿の五・六歳の男子のいる家では、一種の道具で飾り物を作る一式飾りが作られ、通路に面した部屋に飾り、通行人の目を楽しませたものだといふ。

智頭の町並み

八頭郡智頭町智頭
JR智頭駅より徒歩十五分

鳥取から南に約三〇キロの距離に

ある智頭は、江戸時代には上方往来から備前（作州）往来が分岐する要衝の地で、鳥取藩の重要な宿駅として本陣・制札場・御茶屋などが設けられ、目付も常駐した。

上方往来が通る主往環は、上から下に緩やかな坂になっており、往環の左右、人家の軒下には水路が走り、豊かな水が絶えまなく流れている。

道沿いには江戸末期の道標や、明治時代の「町火消頭領」の碑が建っている。

また道の両側には伝統的な町並みが続いており、今も諏訪酒造、塩田旅館などの町家が残っている。特に目に止まるのは、智頭往来の中央部に位置する木綿屋米原家と塩屋石谷家の建物である。明治の後期に建てられた米原家住宅は、木造二階建入母屋造り、木部は黒漆塗で、家構えは重厚である。備前往来の分岐点に位置するこの建物は、智頭宿の要となる建物である。石谷家は主往環の中央部に位置し、江戸時代には大庄屋や宿場問屋をつとめた。大正時代に建築された現在の家屋はさほど古くはないが、智頭杉をふんだんに用いた普請は、贅を尽くしており、智頭の誇りであり「樹精の宿り」とも

称されている。杉の町として県内外に知られる智頭町では、深い緑に包まれた伝統的な町並みを「杉源郷」として位置付け、町並みの保存と再生に力を注いでいる。建物の質も高いだけに、これからの保存活動には大きな期待が寄せられている。

石谷家住宅

八頭郡智頭町智頭
JR智頭駅より徒歩十五分

石谷家はいくつかの分家とともに智頭の町並みの中央部に位置し、間口も広く、智頭宿における中心的な存在であった。屋号を塩屋といい、宿場問屋をつとめ、智頭郡の大庄屋にも任せられたこともあり、明治以降はこの地方きつての林家家になった。

現存する建物群は大正十年（一九二一）、衆議院議員、貴族院議員をつとめた伝四郎の代に着工したもので、主屋は昭和二年（一九二七）に竣工し、その後順次完成したものである。

屋敷は正面中央に冠木門を設け、周囲を板塀や土蔵で囲い、その中に主屋をはじめ多くの建物を連結して邸宅の構えとしている。主屋は入母屋造、南北に棟を延ばす民家風住宅

で、北側を土間とし、吹き抜けて屋根裏を見せる。一抱えもある大梁を縦横に組み、その上に束を立ち上げ貫を通すその小屋組は圧巻で、林家の主屋ならではの豪快な造りである。南側に展開する客間も豪華で粋を凝らし、大きな池をうがった広い庭園と一体になった豪放さをつくりだしている。

石谷家住宅は、大小およそ二十棟にも及ぶ建物を抱える広大な邸宅で、全体によく管理されている。近世から近代にかけて、この地域に築かれた文化の一端を知るうえで、欠くことのできない遺構であり、平成九年（一九九七）七月に国の登録文



化財となり、平成十二年（二〇〇〇）六月には町の保護文化財になった。現在、建物の主要部分が公開されている。

杉神社

JR智頭駅よりバス五分 杉神社前
下車、徒歩五分

一風かわった神社で、スギの霊を祭ったところはちよと、ナシの原木を祭神とした木の実神社とよくている。

中国地方は、東西に中国山地が走り、鳥取県の総面積の約八〇パーセントが山地である。必然的に林業が発達し、全国的にみるとそのスケールは小さいが、県の重要な産業の一つであり、県内では特に八頭郡・日野郡地方が盛んである。なかでも八頭郡地方は質量とも優秀なスギを産出している。林業を専業とする人たちのスギへの信仰が、具体的に表されたものが杉神社である。

昭和二十八年（一九五三）十月、スギ生産の中心地である八頭郡智頭町に建立された。神社はスギを象徴的に型取った高さ一二メートル一二センチの三角塔で、拝殿もなければ本殿もない。山の緑に白く映える社殿は、他の神社とは異なった荘厳な

雰囲気をかもし出している。祭日は毎年十月の第一日曜日である。

神社は智頭から志戸坂峠をこえて、津山・岡山・姫路へぬける国道から五分の山合いにある。



蛭井神社

智頭町大田
J R 智頭駅よりバス二〇分、蛭井神社前下車すぐ

蛭井神社は、里人大明神・妙見社)、都々良麻大明神、(三滝さん・蔵王権現社) 荒海大明神(同社)の三社を祀る古社である。

景行天皇の時代に、この地の夷住山に住む夷が天皇の命令に背いた。そこで、天皇の命により武牟口命が平定した。このとき武牟口命に楸

弓と八枝を献じたと伝えられる「荒海」「里人」「都々良麻」のことでありといわれる。

嘉慶元年(一三八七)にこの三社を夷住山より山下に移した。近世には妙見社といわれ、山形郷(現智頭町山形地区)の総産土神・智頭郡中の大社として信仰された。

明治元年(一八六八)に現在名に改称され、周辺小社を合祀した。大正十年(一九二一)に現在地に神社を移し、新築された。

五穀の害虫駆除・風雨適順などの靈験著しい社として、岡山・兵庫県を含めて周辺の農民が多く参詣した。祭礼(十月二十八日)である花籠祭りは、平成二年(一九九〇)に県の無形民俗文化財に指定されている。このとき「背負い花籠」が奉納される。

蛭井神社社叢

八頭郡智頭町大田
J R 智頭駅よりバス二〇分、蛭井神社前下車すぐ

蛭井神社は旧県社で、その社叢は、智頭からおよそ一〇キロメートル奥の、千代川の支流北股川に沿う標高三三〇〜四四〇メートルの尾根の先端斜面に位置する。

この社叢は、社殿裏の南向きの斜

面にウラジロガシ林が形成され、これに隣接する南南東斜面には森林の様子が急変してブナ、オオモミジ、クロモジなどを中心とする落葉広葉樹林が形成されている。

谷地形がなす冷涼な環境が影響しているものであろうが、この低標高におけるブナ林の存在は異例であり、また、照葉樹林帯からブナ林帯への移行するのに中間林帯を欠く例として学術的に価値の高い社叢として昭和六十一年(一九八六)十二月に県の天然記念物に指定された。

ウラジロガシ林には胸高直径が一・二〇センチに達するウラジロガシのほかアカガシ、アラカシ、スタジイ、タブノキが混生し、ブナ林には胸高直径が八〇センチのものが十個体近くあり、これにミスナラ、ハリギリ、イヌシデ、オオモミジなどが混生するなどみごとである。

豊乗寺

八頭郡智頭町新見
J R 智頭駅よりバス五分、豊乗寺口下車、徒歩一〇分

豊乗寺は真言宗に属する。山号を宇谷山といい、本尊は無量寿如来である。寺譜によると、弘法大師の弟真雅僧正が大同年(八〇九)に開き、昔は、子院が十二坊あったとい

われるが、いつ創建されたかは明らかでない。いずれにしても弘仁以降の建立と考えられる。寺には、十二天画像、金胎両部曼陀羅、八祖画像、山水画などの宝物がある。中でも絹本着色普賢菩薩像は稀有なもので、光背から仏身、衣裳、瓔珞、環釧すべて精緻優麗である。わが国の代表的作品であり、現在、東京国立博物館に保管されている。本画像は、昭和二十六年(一九五二)九月、日本美術品の代表的作品としてアメリカに送られ展覧されるなど、国宝中の国宝と称せらるべきものである。

このほか、明治三十七年(一九〇四)二月に、絹本着色楊柳観音像と木造毘沙門天立像が重要文化財に指定されている。

また、墓地内には、真雅僧正の手植えと伝わる樹齢六百年の三本の大杉がある。これは、県の天然記念物に指定されている。



板井原集落

八頭郡智頭町板井原
J R 智頭駅より車で十五分

伝統的な集落のたたずまいを残し、茅葺き屋根の復元が進む。

現在、板井原集落を舞台に智頭町教育委員会により山村生活を体験するプログラムが組まれている。村の入口では、六体の地藏さんが並んで出迎える。集落の中ほど、元の上板井原分校（昭和五十五年休校）の位置に公民館、その後に向山神社がある。林道は昭和四十二年（一九六七）によりやく板井原トンネルが開通し、役場方面への直通ルートとして整備された。今でこそ集落にとけ込み、何気なく通って山越えに船岡町へも廻ることができる。

元の道は、川を挟んだ向こう、民家の家並みの中を通る細い集落道の方である。集落道沿いに家屋が配置された様子は、まるで街道沿いの家並みのようにも思える。母屋は十八棟残っている。

明治三〇年代に大火があり、明治末期からの建築が多い。しかし、蔵は大小三十八余りを数え、江戸時代の建築も少なくない。川筋から引き込んだ水路に洗い場の降り口が仕切

られ、水場の風情も懐かしい。

水田は少なく、かつて養蚕と炭焼きが主業であった。また、江戸時代から晒し葛の産地として名高く、製法を今に伝えている。

芦津溪

八頭郡智頭町芦津
J R 智頭駅より車で四〇分（遊歩道入口まで）

八頭郡智頭町の千代川支流北股川の峡谷で氷ノ山後山那岐山国定公園に含まれ、県東部では河原町の三滝溪とならぶ紅葉の名所である。昭和十年（一九三五）、水力発電用の三滝ダムが上流に建設された。

芦津溪谷は、大呂から芦津までの下の峡谷、三滝ダムまでの中の峡谷、ダム上流の上の峡谷に分けられるが、中の峡谷をさして芦津溪と呼ぶのが普通である。なお、国土地理院発行の五万分の一や二万五千分の一地形図では、芦津溪の名称は見られず、中の峡谷の上流部を三滝溪谷としている。

下の峡谷は三郡変成岩の分布域にあり、黒色千枚岩を浸食するV字峡谷である。中の峡谷の倉谷付近から上流は、南東の沖の山（一三一八メートル）を中心に分布する花崗岩や花崗閃緑岩の地帯となり、両岸には



中国自然歩道を溪谷に沿って歩くと三滝ダムへ至る。

沖ノ山の自然林

沖ノ山は標高一、三二八メートル鳥取県智頭町内にあり、沖ノ山国有林からなる。地形は低平で、古くから開発による樹木の伐材があり、残存原始林は極めて少ない。しかし、国定公園地域でもあり、また大切な生活用水を補給する千代川の水源地でもあり、自然保護のために原生林二八〇ヘクタールが保存された。この原生林は「学術参考林」に指定されている。

沖ノ山の残存林は芦津・八河谷に近い降雪地帯で、日本海側の北西の季節風を受け、冬季は降雪が多い。この条件のもと生育する代表的樹木はミズナラ・ブナ・チシマザサ、そしてその上方にスギ、特にアシウスギは地元でオモキノヤマスギと呼ばれる。多枝、伏条の雪下に適応性が高い。

那岐山

J R 那岐駅下車、徒歩二〇分

八頭郡智頭町、岡山県奈義町との

県境にある標高一、二四〇・三メートルの山。山腹は急斜面であるが、

山頂は比較的緩やかな面が広がる。

この山頂の面は、中国山地に点在する高位浸食面に相当するもので、隆起準平原遺物と考えられている。山頂ををさんで東西にのびる稜線を境に、北の鳥取県側と南の岡山県側とは、地形が全く対照的である。北側は谷が深く山腹にはいくつもの溪谷が発達し、南側は急崖で日本原高原に達する。那岐山は、三郡変成岩に属する黒色千枚岩を基盤とし、これを不整合に中生代白亜紀の火山岩類で覆われている。北側の山麓には花崗岩が広く分布している。この花崗岩は、火山岩類に接触変成作用を与えていないことから、貫入した時期は火山岩類ができる以前と考えられている。氷ノ山後山那岐山国定公園の一部に指定されており、登山道や避難小屋などもよく整備されている。登山道は因美線那岐駅から奥本の谷を尾根づたいで行くか、河津原から谷に入るのが一般であるが、国道五三号の旧峠から尾根づたいに登ることもできる。

《那岐山の動植物》

那岐山は西南端で八頭郡智頭町と、岡山県勝田郡の県境にあつて、海拔一、二四〇メートルの高山である。中生代の石英安山岩類からなる。中国山地のほとんどは、浸食・風化され準平原となつてはいるが、那岐山はその準平原面上に中国山地の骨ともいふべき堅い岩塊が残つたいわゆる残丘（モナドノック）である。その南麓は一大断層をなしつつ津山盆地におちている。ブナ・チシマザサ群落であるが、ブナは皆伐され原始林はほとんどない。湿地にはザゼンソウがあり、岩場にはホンシヤクナゲの群落がある。このホンシヤクナゲは七数性で七弁花雄蕊が十四本あり、大きく美しいことで日本一の野性の美花として知られる。また、この付近にはクロソヨゴがある。珍しいフジシタも分布する。

山頂が風衝低木林・草原となつてゐることから、特徴的な動物が生息している。鳥類では、高山性のメボソムシクイ、マミジロなどが夏季に見られ、チョウでは上昇気流に乗つて集まるアサギマダラ、ツマゲロヒヨウモン、オオミドリなどが目立つ。また、六・七月に山頂付近のブナ林

ではエゾハルゼミが、低木林にはコエゾゼミの鳴き声が聞かれる。

伝説によると、神代の神跡と伝える場所は「伊壮那岐命」の神霊静まります地といわれ、地名の「那岐」もこれに由来すると伝えられている。山頂の南側の岸壁には「天照大神」と「伊壮那岐尊、伊壮那美尊」の神名が刻まれ、千数百年前から神霊を祀っている。

因美線那岐駅から下車し早野登山口から登ると、車道が二キロ余り続く。そこから四キロ余りの山道は千古の密林、スギ木立の美しい林である。八合目の天狗岩、力水辺り、喬木帯となり高山気分が漂いはじめるところ、眺望は急に開ける。九合目あたりにはホンシヤクナゲ、ドウダツツジの群落があり、昭和五十二年（一九七七）に町の天然記念物に指定された。七月上旬には赤桃色のヤマツツジが満開となる。

頂上立つて展望すると、北側は大山火山帯によつて噴出した峨々たる壮年期の山々が重畳と連なり、遠く鳥取砂丘、日本海の浮ぶあたりは、まさに一大パノラマである。西に三国山、蒜山、大山も眺められる。南側山陽方面には、準平原の大波の

ような丘陵地がつづき、山陰方面とは対照的な地形を表わしている。はるかかなたに瀬戸内海・四国山脈、淡路島が雲霞のはてに眺められる。春は新緑の頃に登山を、夏は深緑の山ろくでキャンプをすることができ。また、昆虫や植物採集にも好適地である。十一月上旬ごろに全山一面が燃えさかる紅葉は絶景である。冬は、雪質も良くスキーに適する。

下山には、西側に位置する大畑の紅葉トンネルを通り、原生林をくぐり、シヤクナゲの根のはう山道を下り、馬の背を通つて宇塚に出るコースが最適である。

気高町

温泉 浜村温泉

気高郡気高町浜村
JR浜村駅よりすぐ

二十三の温泉があり集中管理されている。平均温度は五十二度、湧出量は毎分八一〇・六リットル。泉質はナトリウム、カルシウム、塩化物、硫酸塩泉である。

温泉水は、鳥取花崗岩に属する黒雲母花崗岩から割れ目を通して湧出している。

JR浜村駅の南側に位置する勝見温泉と北側の浜村温泉に分けられるが、現在は一括して浜村温泉と呼ぶことが多い。歴史は勝見温泉の方が古く、文亀元年（一五〇一）あるいは天正年間に発見されたとも伝えられる。鹿野城主・亀井茲矩の家臣が白鷺を射たところ、傷ついた鷺が河畔に止まって動かないのを見て温泉が沸いているのを発見したとか傷ついた鷺が傷を癒して飛び去った場所に農民が見つけたといういわれがある。

鹿野城主・亀井公は、温泉の近くの低湿地を埋め立てて保護に尽くし

たという。『因幡志』によると当初五〜六戸の小農村が三十戸の温泉集落となり、一の湯、二の湯、鷺湯など五か所の湯壺と薬師堂が建てられるなど、歴代藩主の入湯場として栄えた。

明治十五年（一八八二）には国道が浜村地区に建設され、その後、明治十七年（一八八四）に鈴木甚平が浜村地区に温泉を掘り当て、明治四十年代の山陰線（現山陰本線）の開通とともに浜村温泉が発達した。明治年間に、小泉八雲が投宿した記事が残っている。また、「貝殻節」で有名な浜村海岸に近く、夏には多くの海水浴客が訪れる。

貝殻節・ ホーエンヤ節

日本海沿岸の鳥取市賀露、気高郡気高町浜村、東伯郡泊村泊などには、イタヤ貝（一般に帆立貝）漁を歌った「貝殻節」が伝わっている。歌詞もメロディも場所によって多少異なる。賀露では、そのはやし言葉をとって、ホーエンヤ節と呼ばれている。海の底をジョレンと呼ばれる道具で引いたり、櫓を漕ぐ労働作業が歌われており、木遣り歌・木挽き歌と同

様の労働歌である。

昭和八年（一九三三）にレコード化された、新民謡浜村音頭・貝殻節により、鳥取県を代表する民謡として知られるところとなった。



亥の子祭

十月初めの亥の日を「亥の子」といい、県内でさまざまな儀礼が行われた。この日、山間部では、田の神が山へ帰るといい、そこではきな粉のポタ餅を供えて祭った。また、鳥取県東部では、この日にこたつを出すこと火事にならないといわれている。

気高町以西では子どもたちが、集

落の家の門口を「亥の子づと」という棒状の藁細工を打って回る風習がみられた。また同町姫路では、二番亥の子の日に、子どもたちが、わらづとにミヨウガの葉を入れたものを持って各家の軒先を叩いて回った。

布勢の清水

気高郡気高町殿
JR浜村駅よりバス十五分

布勢平神社境内の岩から湧出する清水。昭和六十年（一九八五）六月に「因伯の名水」として県指定された。湧水量は一、〇〇〇立方メートルで、豊富な水量と清冷なことから飲用水をはじめ、さまざまな生活用水に役立てられてきた。古くから「八幡さんの清水」と呼ばれて親しまれている。

明治四十二年（一九〇九）には、他地域に先がけてこの清水で水道が敷設された。現在も泉のわきに給水施設が設置され、近辺への水道水の供給源となっている。水温は年間を通して十四〜十四・五度である。湧水の水源は、河内川の伏流水と考えられている。

鹿野城主・亀井茲矩が涼亭を設置して、納涼を行ったとされる歴史のある湧泉である。

姫路神社・ 百手の神事

気高郡気高町姫路
JR浜村駅よりバス一〇分、姫
路下車すぐ

祭神は天照大神である。春秋二回この地方にはまれな神事が行われる。

春は、「百手の神事」といい、昔から春は毎年四月二十三日より行われている。神官はこの神事に奉仕するため二夜三日間忌みの潔斎をする。四月二十五日（現在はこの祭日近い日曜日）になると氏子の人々は神社に集まり、まずお釜清めの行事を行う。次に各自が幣を奉持し、氏子役員中から弓矢木剣を奉持する者もある。神官は神面をつけ本殿内から神事場に向かう。これよりさきに神域の場所には的が用意され、すべての準備が整えばお面を先頭に獅子舞は所定の場所で神事を行う。神事に参加する人々や神官、氏子、役員は幣を奉持している人々らが神殿社前を一周する。その後、神官は矛を持ち東西南北天地に向かつて、昔から伝わっている神事を行う。終ってまた一同は前回同様一週りしてのち、神官は弓に矢をつがえて矛と同様の神事を行う。その後さらにまた一周する。こうして神官は的に向か

って十二本の矢を放つ。これが終了するとお面を先頭にまた一周し、お面や獅子舞は定められた場所につく。神官は本殿で神面を納め、氏子は幣を納める。これで春の神事は終る。この神事は五穀豊穰悪疫退散のために行う。昭和三十四年（一九五九）県の無形民俗文化財に指定された。



秋には、「牛舌餅」という神事がある。旧暦十一月の第一番目の丑の日から大忌に入り、鳥居には七五三縄を張り、一般の人が神社社地に入ることが禁じられ、参拝することもできない。大忌中は三日間家にこもって謹慎し、食物も前日まで調理し

たものを食し、この期間中はいつさ煮炊きをしない。これを一名牛舌祭ともいう。当日は姫路部落の旧家福田家から牛の舌状の餅が神社に供えられ、後、この餅は細断して氏子中に配られる。

大龍院

気高町宝木
JR宝木駅より車五分

山号を雲谷山といい曹洞宗に属し、本尊を釈迦如来である。かつては真言宗で、金谷山龍太（帯）庵と称し板井神社の別当寺として、板井神社御手洗池の隣・龍ヶ崎にあったという。開山時期は不明である。

建武二年（一一三五）に隠岐島を脱出された後醍醐天皇は、勅使を派遣され、当庵に寺領二十四石を寄進されたと伝えられる。

その後、庵は荒廃したが、文明元年（一四六九）、守護山名元晴が当庵を現在地に移し、備中洞松寺（現岡山県矢掛町在）の宵庵（祥庵）長通和尚を招いて開き、山号、寺号、宗旨を現在のものに改めた。その後、亀井氏にも保護されている。

鳥取藩士・上野忠親が筆写した『正法眼蔵』十九巻が所蔵され、元旦にはこれを本堂に供える慣例がある。

る。またかつての龍太庵跡から出土したという石造経筒が保存されている。

両国梶之助

両国梶之助は、元禄年間の名力士といわれている。

寛文四年（一六六四）、現在の気高郡気高町宝木に生まれた。幼名は弥太。鳥取藩のお抱え力士となり「山ノ井」と名乗った。これは、山ノ井戸水はだれも汲む者がいないことから、即ち取り組む人がいないほど強かったということの意味している。また、「両国」という名前は、因幡・伯耆の両国にかなう者なし、ということから藩主・池田光仲が命名したという。

徳川御三家の紀州侯から召し抱えの誘いがあったが、鳥取藩が許さなかった。体重一五〇キログラム、身長一・九メートルの体格で、五十貫の錨を二つ持ちあげたという。宝木の山のふもとに両国の墓がある。墓石には、「宝永五年（一七〇八）正月廿四日死法号春山登雲両国梶之助墓」と刻まれている。

水尻池

気高町気高町水尻
JR宝木駅下車、車で一〇分

気高町水尻の国道九号とJR山陰本線の間に位置する。南北約七百メートル、東西約五百メートルに広がる。奥沢見から水尻に至る河谷の河口部が砂丘によって堰止められてできた凹地に水がたまつた潟湖である。

大正四年（一九一五）および同年（一九二二）に計二四ヘクタールを干拓し、夏期にはポンプで排水して稲作を行い、冬期には池のままとしていた。周囲約八〇メートル、面積〇・二五キロメートル、水深は一〜二メートルである。減反政策の影響で昭和五十六年（一九八一）以降は、稲作を止め、年中池のままである。一時期、真珠生産のためイケチヨウガイの養殖も行われた。

静かな水域には水鳥が生息し、昭和四十二年（一九六七）以降コハクチヨウが飛来するようになった。最盛期には約二百羽のカモ類などでにぎわう。銃猟禁止区であり西因幡県立自然公園に指定されている。

池の周辺を回遊できる道路があり、白兔海岸に隣接し散策にも適している。

板井神社

気高町奥沢見
JR宝木駅より車で一〇分

板井神社は、『延喜式神名帳』に記載の気多郡同名社に比定される古社である。祭神は天明玉命で、方六尺余の青石に乗って当社に降臨されたといわれる。この青石は、神体石として本殿地下に埋つており板囲がしてある。中世の一時期に当地は「宮石」と呼ばれた。

社伝によると、神功皇后が朝鮮出兵に際し武功を祈願して祀つた神社で、天武帝の頃まで勅使の派遣が続いたと伝えられている。

建武二年（一三三五）、隠岐島を脱出された後醍醐天皇は勅使を派遣し当社に祈願されたという。寛文七年（一六六七）には、別当寺である龍太庵（現大龍院）が分離され、社領高も折半された。近世は板屋大明神とも板葺大明神といわれ信仰された。

田中古代子

田中古代子は、ひたむきに文学の夢を追い求めた情熱の作家である。

明治三十年（一八九七）、気高郡

逢坂村大字郡家村（現在の気高郡気高町郡家）に生まれ、本名はコヨとあった。結婚して涌島姓を名乗る。

地元新聞や中央の雑誌に作品を発表したり活動写真を上映したり、また記者として健筆をふるったりと話題の多い女性であり、文学青年たちから「新しい女」と呼ばれ、あこがれの的だった。

大正十年（一九二二）、大阪朝日新聞社の懸賞小説に応募した『諦観』が二位に入選し、新聞に連載された。生まれつき身体障害者の弟を抱えての生活の苦しさが克明に綴られ、読者の胸を打つ。

大正十三年（一九二四）、『水脈』の同人でもある涌島義博とともに上京し、本格的に作家として歩もうとしたが、先年から患っていた肺結核に神経痛や不眠症が加わり、鎮静剤を常用するようになった。東京生活の夢は破れ、昭和七年（一九三二）、鳥取へ帰り、昭和十年（一九三五）春、みずから命を絶つた。三十八歳だった。

気高町では、生誕百年（平成九年）を機に、田中古代子とその文学に新しい光を当て、再評価をはじめている。平成十三年（二〇〇一）には文

学碑も建つた。
田中古代子の墓は鳥取市新品治の玄忠寺にある。

鹿野町

温泉 鹿野温泉

気高郡鹿野町今市
J R 浜村駅よりバス十五分、
役場前下車すく

昭和三十年（一九五五）、かねてから湯徴のあつた地点を鳥取大学名誉教授・原田光博士の指導で掘削に成功した。泉源九井のうち七井を集中管理している。平均温度六十一・四度、湧出量は毎分一〇九四リットル。単純泉であるが食塩泉を共存し、ラドン含有量も多いので一部には放射能泉もある。

温泉のうち三源泉は地下の吉岡花崗岩と鳥取花崗岩の境界部付近では南北に走る断層系にそつて湧出している。その他は沖積層や洪積層、第三紀層から汲み上げている。自然環境や泉質に優れていることから国民保養温泉に指定され静かな保養地として発展してきた。鹿野温泉病院、各種厚生施設、町営国民宿舎、温泉館など公営温泉施設がまとまっている。また、利用後の温泉水は余熱を利用して洋蘭やバラなどの温室栽培に用いられ、花きモデル事業地になっている。近くには鹿野城跡もあり

城下町の面影を偲ぶことができる。



温泉 ホットピア鹿野

気高郡鹿野町今市
J R 浜村駅からバス
で約十五分、役場前
下車、徒歩三分

平成五年（一九九三）六月に鹿野温泉に開館した公共の温泉施設。ガラスブロックに包まれた円形の洒落た建物には、水風呂、気泡風呂、露天風呂、サウナが設けられている。物産館も併設されている。また、近くにはそば道場もあり、町内外からの利用者が賑わう。

開館時間 午前一〇時～午後九時

休館日 第一木曜日（祝日の場合は第二木曜日）

問合せ先

☎ 0857・84・2698

鹿野の町並み

気高郡鹿野町鹿野
J R 浜村駅よりバス二〇分

鹿野は山中鹿之助幸盛の娘婿・亀井茲矩いこのりによって天正九年（一五八一）に営まれた城下町である。二代政矩まさのりが津和野に移封されるまで亀井氏の善政により繁栄した。元和の一国一城令により廃城となり、城下町としての機能は短期間であったが、亀井氏の経営によって、しっかりした町づくりが行われた。

武家屋敷のあつた殿町、商人町の上町・下町、職人町の紺屋町などの町割は、今もよく残っていて、城下町の面影を伝える。商人町であった通りには、京風の格子構えを備えた町家が点在し、特に上町・下町の稲垣家、原田家、能勢家などの古い町家は往時の面影をよく留めている。これら古い町家は外壁は塗屋造りで、一階には出格子・腰格子・ハメ格子がバランスよく配置され、二階は屋根の低いツシ二階で卯建うたても添えられている。

町家の大半は明治時代の遺構で、卯建や軒を支える腕木などの細工は豊かで、軒の線に乱れがなく、町並みにも統一感が見られる。町並みを

歩くだけで、建築の質の高さを感じることができる。

亀井氏の治政は、亀井氏が津和野に移つてからも受け継がれ、しっかりと根付いている。春には城山神社祭、秋には亀井踊が行われ、鹿野は、城下町としての伝統や洗練された気品が漂っている町である。

物産 鹿野そば道場

気高郡鹿野町鹿野
J R 浜村駅よりバス
二〇分、鹿野町役場
前下車、徒歩一分

平成九年（一九九七）四月に設置されたこの施設では、そば打ち体験ができる。このそば打ちには、鹿野町内で栽培されたそばの実を石臼でひいてきたそば粉を二〇〇パーセ



ント使用している。また、自分で打ったそばはその場で食べることもでき、打ちたて、ゆでたてのおいしさを味わえる。

開館時間 午前一時三〇分～午後二時（レストラン）ただし、土・日曜日及び祝日は午後三時まで開館

体験は午前一〇時～、午後二時～の二回（要予約）

休館日 毎週水曜日、年末・年始

問合せ先 ☎ 0120・135・228

城山神社祭礼

高知県鹿野町鹿野
JR浜村駅よりバス十五分、立町下車すぐ

鹿野城城山の中腹に鎮座する城山神社の祭礼行列。城山神社は、創建年月は定かではないが、慶長年間、亀井氏が鹿野在城のとき鎮守として祀つたのに始まるといわれる。須左之男命を祭神とし、もとは妙見社といい、加知弥神社の摂社であった。祭礼は江戸の初期から行われていたという。例祭日は、毎年四月十五日であったが、現在は隔年の第二土・日曜日に行われる。

行列は四台の屋台をはじめとして鹿野の各町内ごとに出し物（役）が決まっており、町内から選出された「役面」という若連中が祭礼を取り

仕切るといふことが特徴である。

御幸行列は日曜日の昼過ぎに出発する。行列は神・屋台（大工町）・織差し武者（紺屋町）・屋台（山根町）・屋台（下町）・獅子（上町）・神輿（殿町の若連中）・金幣・神官・裃姿の「後供」の順となる。この神幸行列の一行を、七名の「役面」が警護役として、前になつたり後になつたりして伴走する。

神事行列は、紺屋町から大工町までの七つの町内を延々十数時間かけて巡る。鹿野の上町から獅子が出され、同町の屋台を先導する。一キロ半の道のりの最後となる御神事場（お旅所）に到着するころは十六日



の夜中であり、ここで祭典がとり行われ獅子舞も舞われる。

このとき、提灯数十個に火を入れた四台の屋台が、暗闇にくつきりと姿を現して整列するさまは壮観である。

昭和三十四年（一九五九）に県の無形民俗文化財に指定されている。

志加奴・城山神社獅子舞

城山神社の祭礼行列では六番目に鹿野の上町から獅子が出され、同町の屋台を先導する。この獅子の舞方は、県東部に多く見られるキリン獅子舞の流れをくんでいるが、獅子頭はいわゆる神楽獅子である。また、獅子の先導役である狸々（想像上の動物）も、大きな白幣を持って登場するが、獅子の門付けの最中は玄関先にしゃがんでいるだけである。この獅子舞が沿道の各家を順次門付けするため、祭礼行列はそれに合わせてゆつくりと進む。

志加奴神社の祭日は四月二十二日に近い日曜日で、隔年の例大祭には十五分ほどの本舞が奉納される。昭和三十四年（一九五九）、県の無形民俗文化財に指定されている。

亀井茲矩

亀井氏はもと紀伊国の豪族で、戦国時代出雲に移つて尼子氏に仕えたという。茲矩は出雲意宇郡湯郷（現鳥根県玉湯町）の領主・湯氏の後裔で、湯新十郎と称し尼子氏に仕えていた。尼子氏滅亡後は山中幸盛に従い、尼子再興を図つて各地を転戦、幸盛の外舅の家号を継いで亀井氏を称し、後に織田信長、秀吉に属した。

天正九年（一五八一）十月の鳥取城落城後、羽柴秀吉は茲矩を鹿野城主とし、気多郡一万三千八百石を与えた。関が原合戦では茲矩は東軍に属して軍功を立て、戦後高草郡二万四千二百石を加増された。さらに茲矩の子政矩は慶長一〇年（一六〇五）に伯耆久米、河村両郡のうち五千石を与えられ、領有高は四万三千石となった。政矩は元和三年（一六一七）、石見国津和野に移封され、以後、明治維新まで津和野を所領とした。亀井茲矩在城の時代は、領内の新田開発に力を入れ、気多郡日光、高草郡湖山両池の干拓のほか、千代河西岸地域に大井手用水路を開削し、灌漑水路網を整備した。慶長年中には蘆

崎湊（現青谷町）を基点に長崎を経由してシャム（現在のタイ）などの東南アジア諸国と朱印船貿易を行い、巨利を得た。また、インドの仏跡にちなんで、居城を王舎城、城下を鹿野苑と呼べた。茲矩は、慶長十七年（一六一二）正月に没した。

墓の入り口は気高町字田仲にある。「亀井武蔵守茲矩」という茲矩について記した案内板の他、「亀井茲矩公大井手用水路開鑿四百年記念」の石碑と、「大井手土地改良区再建」を記念して平成五年（一九九三）九月に奉獻された鳥居をくぐって坂を登った明星ガ鼻という小高い丘の頂上に墓がある。墓は石組みのほぼ正四角形で、高さ約三メートルの墓碑が建ち、「中山道月大居士」と法名が刻まれている。墓碑の四面にはそれぞれ梵字なども刻まれているが現在では苔で覆われて判読しづらい。墓の手前両側には明治三十一年（一八九八）四月に伯爵・亀井茲常氏により奉納された石燈籠が二基建つ。墓は平成八年（一九九六）、二月に気高町の指定史跡に指定された。

亀井踊

気高郡鹿野町鹿野

本来は盆踊りで、因幡地方に伝わる「はねそ踊」の一つである。由来としては、戦国時代から江戸時代初期まで鹿野を治めた亀井氏の次のような伝承が伝わり、唄にも唄い込まれている。

戦国時代、鹿野城主・亀井茲矩は、近くの金剛城主・兵本源六を滅ぼす機会をうかがっていた。兵主が芸能好きであるのを知った亀井は、ある年の盂蘭盆に盆踊り大会を催した。そして兵主が郎党を引き連れて見物に出かけた隙に、亀井は金剛城に火をかけて、焼け落とすという。

以来、城下の者は亀井公を讃え、兵主を滅ぼすきっかけになった盆踊りを「亀井踊」と称し語り継いでいる。

現在は見せる芸能としての要素が強くなり、音頭取りを中心に、四つ目の黒紋付きに陣笠姿の踊り手六人が輪になって踊る。昭和四十九年（一九七四）に県の無形民俗文化財に指定されている。

名勝 讓伝寺庭園

気高郡鹿野町今市

讓伝寺は少林山と号し、江戸時代最初の鹿野城主・亀井茲矩の菩提寺である。中世には県下に曹洞宗を広める拠点となった寺院である。茲矩が鹿野城主となった天正九年（一五八一）には既に今の地にあり、鳥取県下に十六の末寺を持った。茲矩の没後、政矩の元和三年（一六一七）、亀井氏は津和野へ転封となるが、在城三十六年間、讓伝寺と鹿野城とは一本道でつながれていたと伝えられる。茲矩の墓石の他、茲矩が奉納したと伝えられる刺繍織物三点（県指定文化財）を残す。

書院の北側に広がる庭園は興味深い。書院から見る池泉・石組、築山、後背の森それぞれの位置が定まり、もともと池泉鑑賞式あるいは一部に回遊式を取り入れた庭園であったと推測される。現在、池の中央に木橋が架かり、左右の池に膨らみを見る。左手の護岸石組みに当たる部分が鶴亀の対応を示している。右手奥には築山から刻まれた野筋とおぼしき川流れが認められる。しかし、築山の高さはさほどなく、左右に波打つよ

うな穏やかさを持つ。池泉を含め、元は左手にさらに広がりを持ち、回遊式に近い大きさを持っていたことも考えられる。

熊谷道伸・子貞

熊谷道伸と子貞は、父子二代にわたって私塾を経営し、先駆的で秀れた庶民教育を実践した。

熊谷道伸は宝暦十三年（一七六三）、気高郡鹿野村（現在の気高郡鹿野町）の大庄屋の家に生まれた。彼は教養が高く人格者として知られ、信望も厚かった。このため若者たちが宅を訪れるようになり、いつとはなく私塾となった。「教えをことう者門にみち、教化一郷にあまねく鹿野の学風これより大いに興った」と『鳥取県郷土史』（昭和七年）は熊谷道伸を評している。文化十三年（一八一六）、五十四歳で死去。

子貞は道伸の息子で、寛政十三年（一八〇〇）に生まれた。幼少のときから父について学問を修め、青年たちの教育に専念する父の姿を見て育った。

私塾を藩の公認と援助によって郷校に発展させ、ここで農村の主だっ

た人物を教育したいと考え、万延元年（一八六〇）、藩に願い出、聞き届けられた。自宅の隣に学舎を建て、県内初の郷校「修道館」が完成した。漢学・国学・農学など広い範囲にわたって教えた。文久三年（一八六三）六十四歳で亡くなった。

『拳賢論』『賞罰論』『郷学論』などの論文をとおし、人材を育成することともに、人材登用が急務であることを説いている。鹿野町鹿野に道伸・子貞顕彰碑が建っている。

幸盛寺

気高郡鹿野町立町
JR浜村駅よりバス十五分 立町下車、徒歩五分

本派浄土宗に属し、京都知恩院の末寺で、宝徳年間（一四四九）一四五二）証誓恵教和尚が開いた。はじめは明照山持西寺といった。その後、亀井茲矩が山中鹿之助幸盛の菩提所と定め、天正年間（一五七三）一五九二）に現在の寺号に改めた。本尊は阿弥陀仏である。幸盛寺という額は、亀井茲矩の筆のものが掲げられていたが、昭和十八年（一九四三）の地震で破損した。現在掲示されているものは、亀井茲建の筆によるものである。寺内にある鹿之助の墓は、縦横約二メートル、高さ一・二メー

トルの石垣の上に高さ一・五メートルの無縫塔が安置されている。「為幸盛寺殿潤林大居士」と刻まれ、その右方に「沙門城蓮社照誉上人建立」とある。天正六年（一五七八）七月十七日、備中（岡山県）甲部川阿井渡において暗殺された幸盛の遺髪を、亀井茲矩が得てここに葬った。

その他にも寺内には、尼子十勇士の一人である日野五郎之房の墓がある。五輪塔の高さは約一・三メートルあり、「高誉寿性居士文禄三年十一月廿五日」と刻まれている。

また、当寺のイチョウの巨木も有名である。胸高の周囲が五・三メートル、樹高が約三〇メートルある。

加知弥神社

気高郡鹿野町寺内
JR浜村駅よりバス二〇分 宮方下車、徒歩三分

彦火々出見命、鵜葺草不合命、玉依姫命を祭神とする。創建年月は明らかでない。『延喜式神名帳』に載っている古社で、昔は勝宿大明神といい、宮谷あるいは明神ガ鼻にあつたといわれる。中世以降、武將の崇敬が厚く、永禄八年（一五六五）には武田高信、田公高清、矢田幸佐等が社殿を造営し、天正八年（一五八〇）には吉川元春が戦勝を祈願し

て社領を寄進した。なお、元春の祈願状・寄進状二巻が昭和三十二年（一九五七）十二月に県の保護文化財に指定されている。

社伝によると、天正年中（一五七三）一五九二）、羽柴（豊臣）秀吉は防己尾城落城のとき社領を寄進したとのことである。その後、亀井茲矩はこの神社を崇敬し、たびたび社殿を修造し社領を寄進している。

また元和九年（一六二三）には池田光政が社殿を修理するなど、累代の藩主の崇敬が厚かった。大正二年（一九一三）二月には、当社の撰社および付近の神社十四社を境内に合祀し一社を建て、新たに勝宿神社とした。例祭日は十一月二十一日である。

寺内集落の薬師堂付近には、塔礎とみられる礎石がある。遺瓦は奈良後期のもので、昔、勝宿大明神の別当寺の旧跡だといわれている。なおこの神社神門の北側に飯田年平の歌碑がある。これには「なにごとめずらしげなき世の中に 見れどもあかぬ富士のかみやま」と刻まれている。

飯田年平

飯田年平は、国学や和歌に優れた学識と才能を發揮した。

文政三年（一八二〇）、鹿野・加知弥神社神職で歌人の飯田秀雄の次男として生まれた。幼年期から歌に優れた。五、六歳のとき母に『古今集』を教えられたが、すぐ暗誦して一句も誤らなかつたと伝えられている。

十四歳のとき父に呼ばれて紀州に行き、加納諸平らに国学や和歌を学び、その後も諸国を歩き見聞を広めた。その優れた学識によって、年平、諸平、石川依平と並び「天下三平」といわれた。万延元年（一八六〇）、四十一歳の彼は藩の尚徳館に採用され、国学を担当した。明快で朗々としたその講義は、多くの人に敬服されたという。

明治元年（一八六八）、明治新政府に仕え、行政官・神祇官を歴任し、従七位を授けられている。同十九年（一八八六）、六十七歳で死去した。

著書に歌集『石園集』、随想集『石園歌話』などがある。

鹿野町寺内には、「なにごとめ

ずらしげなき世の中に見れどもあかぬ富士の神山」の歌碑が建っている。

佐谷峠

気高郡鹿野町河内
JR浜村駅より車で三〇分

主要地方道鳥取鹿野倉吉線が、鹿野町河内から三朝町依原へ越える峠である。標高は五四〇メートル。鹿野町から鷲峰山を左に見て河内川沿いにさかのぼり、河内集落で支流の佐谷川に折れ、幾度かのヘアピンカーブを抜けると峠に達する。反対

の三朝町からは、三朝温泉街を通り一本道を三徳山三仏寺に続く大鳥居を走り抜け、投入堂の真下の谷から山に向かい、依原集落を越えるところどり着く。江戸時代には、鳥取と倉吉、米子を結ぶ伯耆往来の街道筋であり、因幡と伯耆の国境であった。年々、道路の拡幅やカーブ線形の改良が進み、走りやすくなった。鳥取市と倉吉市の連絡に、日本海沿いの国道九号の混雑を避け、新緑や紅葉を楽しみながら山周りのコースに利用する車が多い。

峠一带は三朝東郷県立自然公園に含まれる。峠近くの駐車場に車を置き、スギ・ヒノキの造林地を抜け、近くの尾根に登ると思わぬところで

ブナ林の散策が体験できる。

また、依原から三徳山までの谷筋の雪解けは遅く、五月の連休でも谷の残雪が楽しめる。夏には佐谷川や依原一帯では、六月の終わりから七月の上旬まで自生するゲンジボタルを見ることが出来る。なお、依原集落には依原藤太（藤原秀郷）のものと伝えられる墓がある。その奥には県営牧場もあって、ちよつとした高原気分を味わうことができる。

鷲峰山

気高郡鹿野町古仏谷
（登山口まで）JR浜村駅より車で十五分

鹿野町の南部に位置する標高九二〇・六メートルの孤立峰である。山頂部はやや南北にのびた円錐状に盛り上がるが、山腹の標高七五〇〜八〇〇メートル付近から緩やかな傾斜の尾根が東西南北に張り出していている。

鷲峰山の名前の由来にはいくつかの説があるが、北側から望む山頂部と東西の尾根の形が、翼を広げた鷲のように見えるためというのもその一つである。また、昔はもつと高い山であったが、大山と背比べをして勝つたため、怒った大山に頂上をすくいとられて低くなってしまったと

いう伝説が伝わる。

山体は、三朝層群東郷累層に含まれる鮮新世の安山岩およびデイサイトの花崗岩で構成される。同時代の、主として溶岩からなる火山岩類は県中部から東部に広く分布しており、一括して鮮新世火山岩類と呼ばれることもある。鷲峰山をつくる溶岩は、中生代の火山岩類や中生代末期・古第三紀の花崗岩を基盤岩として、西側半分では山頂を中心としたほぼ半円形に、東側では毛無山（五七〇メートル）に至る尾根上に細長く延びて分布している。

西因幡県立自然公園に含まれ、鹿野町殿口バス停から山頂を経て河内へ至る中国自然歩道がある。ほかに鹿野町鷲峰からの登山ルートがある。山頂からの眺望は良く、東に湖山池、北に長尾鼻、西には遠く大山を望むことができる。

青谷町

物産 青谷上寺地遺跡

気高郡青谷町青谷
JR青谷駅より徒歩五分

国道九号青谷羽合道路と県道の建設工事に伴い発見された弥生時代の集落である。

平成一〇年（一九九八）より行われている発掘調査によってさまざまな遺物が発見され、その豊富さから「弥生の博物館」といわれる。

平成十二年（二〇〇〇）六月、遺構から約五千点（少なくとも九十二体分）の人骨が出土した。この人骨のなかには、傷を負ったものものや結核にかかって変形したヒトの骨などが発見された。なかでも特筆すべきは、脳が残っている頭蓋骨が三つ発見されたことである。古代の人骨に脳が残っていることはまれであり、世界的にも数例しかなく、全国的にも注目を集めた。脳は頭蓋骨から取り出され、平成十三年（二〇〇一）春に公開されている。この脳については現在も調査が進められている。

青谷上寺遺跡は出土品の多種多様さとその保存状態の良さでも知ら



れる。これは土のなかで真空パックのような状態にあったためである。人骨のほかにも大量の土器や木器をはじめ、鉄器、青銅器、骨角器、石器などが多数出土し、その総発掘数は数万点に及ぶ。これらのなかには動物の絵を描くなど精巧な細工がされているものも少なくない。また、弥生時代のものとしては日本最大といわれるスギ板や日本最古の窓と考えられる木製品、占いに用いられていた動物の骨など、他の遺跡には見られない貴重なものが多く、これらの、日々の生活や農具、漁具として用いられていたものを通して、弥生時代の生活や衣食住、大陸との交流

を伝えている。

あやかみち 青谷上寺地 遺跡展示館

気高郡青谷町青谷
JR青谷駅より徒歩五分

青谷上寺地遺跡から出土した木器および鉄器、大陸との交流をつかかわせる品々など約二百七十点が展示されている。

ここでは、ボランティアによる展示品についての解説も行われている。

開館時間 午前九時～午後五時

休館日 毎週月曜日

問合せ先 ☎0857・85・0841

あおや郷土館

気高郡青谷町青谷
JR青谷駅より徒歩一〇分

まちを見渡せる小高い丘の上に、平成五年（一九九三）に開館した。郷土出身のあるいは郷土で活躍している美術工芸作家の作品の展示をはじめ、青谷町の歴史・文化の紹介や日本を代表する著名な作家の作品なども取り入れながら、年十数回の企画展、特別展が開催されている。

開館時間 午前九時～午後五時

休館日 月曜日（休日の場合はその翌日）、年末年始

問合せ先 ☎0857・85・2351

物産 青谷ようこそ館

気高郡青谷町青谷
JR青谷駅より徒歩五分

青谷町内でとれた野菜、果物、穀類から作られた加工品が並ぶ。中には、甘長とうがらしやおからを使用したアイスクリームなどユニークな商品もある。また、地元の漁港・夏泊で取れるいがいを使ったいがい飯など、季節限定の商品も取り扱っている。

開館時間 午前八時～午後四時

休館日 月曜日（祝日の場合は翌日）

問合せ先 ☎0857・85・0600

あいや 相屋神社社叢

気高郡青谷町青谷
JR青谷駅より徒歩七分

相屋神社社叢は、住宅地に近く、JR山陰本線のすぐ南側の勝部川かちくの西岸にのびる山脚の末端、標高五〇～七〇メートルに位置する。社叢の面積は〇・四ヘクタールとやや小さいが、スタジイを主とする山陰型の典型的な照葉樹林として昭和五十八年（一九八三）九月に県の天然記念物に指定された。

高木にはスタジイが優占し、タブノキやウラジロガシが混生するなど、林相県内各地域のスタジイ林と

大差はない。しかし、林床に生える草木層にベニシダやオニカナワラビに加えて特にトキワイカリソウの多いことが特徴である。

なお、やや希少種で陰湿な環境に育成するタラヨウやイギリの原木も観察される。

鳴り砂の浜

砂浜海岸で踏みつけると、「キュツ・キュツ」と音を発する砂を鳴り砂という。砂が音を発するためには、砂粒の形や組成鉱物の性質、淘汰度含有する水分、砂の固結度や砂浜の位置などが影響し、音は微粒塵の混入、汚れ具合でも微妙に変わる。

県内の河口には砂が堆積し砂丘や砂浜がよく発達している。それらの砂には石英分が八〇パーセント以上含まれており、形は垂角礫状のものが多く、直径が一・二ミリ以上の砂粒が占める割合が少なく、〇・四～〇・八ミリの砂粒が五十パーセント以上を占めている。かつ、粒子の大きさがよく揃っているうえ、波に洗われて汚れが少ないため、多くの海岸で鳴り砂の現象が見られる。

県内では井出が浜（青谷町）の鳴

り砂がよく知られ、このほかにもみなせ浜（青谷町）、石脇海岸（泊村）、宇野海岸（羽合町）、船磯海岸、水尻海岸、小沢見海岸（気高町）などの鳴り砂も良質である。また、鳴り砂は海岸の自然環境の良否を知る指標ともなる。

夏泊の海女

気高郡青谷町夏泊

夏泊の海女は、一説に豊臣秀吉を朝鮮に導いた筑前国（現在の福岡県）の漁夫・助右衛門が、その功績によって夏泊の地を拝領し、助右衛門の妻が潜水漁法を広めたといわれ、その歴史は長い。

かつては、肌にシマギと呼ばれる木綿の服を着ていた。メガネをし、水中に桶を浮かべ、ワカメ・テングサ・モズクなどの海藻を採取したり、ワープガネと呼ばれる貝起こしを使って、カキ・イガイ・アワビ・サザエなどの貝類を採取したりする海女の姿が夏の風物詩であった。この一回の採取作業を「一シオ」といい、大体一時間くらいで終わり、体がかわかした。

海女さんたちは老齢化したとはいえ、現在もウエットスーツを身につ

け、昔と変わらぬ技術で魚貝類の採取をしている。

長尾鼻

気高郡青谷町
JR青谷駅より車で一〇分

気高郡青谷町と気高町の境界をなす約一・八キロの岬。新生代第三紀鮮新世の火山活動によって、中国山地から流出した溶岩が、日本海に向けて流れ出し、北に傾いたなだらかな溶岩台地を形成している。台地上部は、安山岩の風化土壌や大山の山灰に覆われ、林、草地、畑地となっている。台地の先端部の岬状に突き出た形が、鳥の長い尾羽根の形に似ているところからこの地名がつい



たという。岬には、激しい日本海の波浪の浸食を受けてできた七〇メートルを越す高い海食崖、テラス状の岩棚（切り石、寺屋敷）、岩のくぼみにできた小さな池（血染めヶ池）などを観察できる。岬や溶岩台地一帯の岩石は、粘り気の弱い溶岩が固まってできた安山岩で、冷え固まったときにできた板状の節理が発達している。

岬先端部には長尾鼻灯台があり、日本海を一望できる。また岬沖は豊富な魚種に恵まれ、岬がなす湾の奥部東側には船磯漁港、西側には夏泊漁港があり、両港とも天然の良港である。また、磯釣りの名所でもある。なだらかな台地状斜面は、二十世紀梨などが栽培され、農業も盛んである。

岬一帯は、西因幡県立自然公園の一部に指定されている。

山根和紙資料館

気高郡青谷町山根
JR青谷駅よりバスで
十五分、山根下車すぐ

因州和紙は江戸時代に、藩の御用紙として保護され、御朱印船貿易で海外にも進出していた。青谷町は因州和紙の生産地として知られ、山根集落には現在も数件の和紙製造業者

がある。

この資料館は、昭和五十五年（一九八〇）に設置された。全国的にも珍しい和紙の資料館で、和紙製造業を営む設置者が、長年かけて収集した世界中の紙や紙で作られた生活用品、紙に関する資料など約三千点が展示、収蔵されている。

日置のはねそ踊

「はねそ踊」は、江戸時代の中頃から因幡地方各地で伝承されてきた盆踊り（手踊り）の代表的なものである。日置川沿いの山根・河原両集落で八月十四日に踊られる。

口説きを唄う音頭取りは、白を二、三個重ねた上に立ち、その脇に立てられた「梵天」と呼ばれる御幣や日の丸扇を付けた青竹を片手に持ち、もう一方の手に破れ傘を持って歌う特徴がある。踊り手は、その音頭取りを中心に輪になって踊る。

因幡の源左

源左は、信仰が厚く、その言動は多くの人を感化し導いたことから、妙好人源左と呼ばれた。「よつこそ

ようこそ」を口癖とした。多くの逸話が残っている。

乳を搾らせぬ牛でも源左が「ようこそようこそ」といいながら搾ると、牛は機嫌よく搾らせた。

草を背負って帰宅中に足をすべらせて川原に転落し、血だらけになった。「片腕折れても仕方がないに、ようこそようこそ」。

源左の畑に馬を入れ、大豆を食べさせている人がいると、「先きの、もつとええのを食わしたんなはれな」と呼びかけた。

柿どろぼうが多いのに、柿に梯子を立てかけておくと源左がいう。「なんぼ人が取っても、やつぱり家の者が余計食うわいや」。

源左は、天保十三年（一八四二）、気高郡山根村（現在の気高郡青谷町山根）に生まれ、昭和五年（一九三〇）、八十九歳で亡くなった。本名は源左衛門。明治に入って足利喜三郎と名乗ったが終生、源左で通った。彼は字を書くことも読むこともできなかったが、彼に感化された人が彼の言葉や行動を伝え、それが逸話集のように残った。

民芸家の柳宗悦と願正寺の衣笠一省がまとめた『妙好人 因幡の源左』

に詳しく紹介されている。

神前神社

青谷町鴨滝
JR青谷駅よりバス二〇分 北河原
下車、徒歩一〇分

神前神社は、貞観十七年（八七五）に正六位上から従五位下に神階を昇叙された「因幡国神前神」（『日本三代実録』）に比定される古社である。祭神は猿田彦命・天宇受売命などである。

社伝によると、慶雲四年（七〇七）地内の美古峰に勧請したが、至徳二年（一三八五）に現在地に移されたといわれる。元弘三年（一三三三）、隠岐島を脱出された後醍醐天皇は、当社に代参を派遣して武運長久を祈られたといい、その折の短冊などが社宝として残るといふ。小森・亀井氏など武将から神田の寄進が続いた。

また、近世には神前大明神といわれた。明治・大正期に近隣社を合祀した。

旧暦十月の丑の日から酉の日までの九日間、氏子一同大きな声・音を立てず野良仕事も休む無音祭（お忌さん）が行われていた。これは祭神が出雲に行かれ酒造りの見張番をされたので、疲れて帰って来られるか

ら無音にして慰労するためだという。この間に耳造酒を造って奉納する。文永・弘安の役のときから始められたと伝えられている。

幡井神社

青谷町編見
JR青谷駅より車で十五分

幡井神社は、『延喜式神名帳』に記載された古社で、祭神は天照大御神・栲幡千千姫命などである。

社伝によると、宝龜三年（七七二）に勧請され、その後三度遷座され、寛政九年（一七九七）に現在地に落着いた。古くは西に接する笏賀庄（現泊村筒地・園・泊・石脇・宇谷）と当町長和瀬・絹見の因伯にまたがる産土神であった。近世には幡井大明神と称された。明治初年（一八六八）に近隣小社を合祀し現社名に改称された。境内には、推定樹齢三百年といわれる「タブノキ」がある。

田原谷

気高郡青谷町田原谷
JR青谷駅よりバス二〇分

勝部川をさかのぼって、八葉寺川と不動川の合流する辺りが田原谷である。集落の手前に、平成十年（一九九八）にオープンした「かちべ伝承館」がある。農村の生活体験を味

わうことのできる施設で、現在、味噌、こうじ、豆腐、製粉などの加工実習を受けることができる。

不動川沿いに登ると霊場不動山である。山肌に無数の転石が置かれた不動さんを見て奥に進むと、スギヤケヤキの大径木に囲まれた不動滝の滝壺に至る。落差三〇メートルの滝には座禅石がせり出している。さらに進むと、湯原滝、妙円滝と続く。六月と八月には、「湯三昧」と称する勤行が行われる。近年、ホテルの里づくりを目指して、ホテルをイメージした橋や街灯の整備が進んでいる。

伝承館のすぐ南には、地元で「建山さん」と親しまれている建山神社がある。参道の急な石段を登ると、脇に並ぶスギの大径木に圧倒される。昔々、鷲峰山と大山が背比べをしたところ、鷲峰山が勝ったため大山は怒って鷲峰山の山頂をつかんで投げた。落ちたところが建山となつたと伝えられている。

不動谷川流域

気高郡青谷町田原谷
JR青谷駅よりバス十五分、不動滝入口下車徒歩一〇分

不動山入口から妙円滝の間の一キロメートルをいう。鉢伏山付近から

の溶岩流が流下してできた安山岩が、平野部と接する位置に不動滝、湯原滝、妙円滝などの規模の大きな滝が形成されている。三つの滝は、趣を異にし、自然豊かな溪流となっている。

新緑の頃から紅葉の頃まで訪れる人が多い。この溪流は、「因伯の名水」を育む溪流として、平成二年（一九九〇）十二月に県指定を受けた。

湯三昧、柴灯護摩

気高郡青谷町田原谷

真言宗寺院、御滝山大善院は「田原谷のお不動さん」と呼ばれている。縁日は毎月第一日曜日で、内護摩を焚き、加持祈禱を行っている。大善院の奥院は、安永四年（一七七五）、大峯行者が開山したと伝わる落差二〇メートルあまりの「不動滝」である。この滝のそばで、六・八月の第一日曜日に行われるのが、「湯三昧」の儀式で、七月の第一日曜日に行われるのが「柴灯護摩」である。湯三昧は、護摩木によって大釜で沸かした熱湯を笹の葉で振りかける荒行である。導師、行者たちが自らの身体に熱湯を振りかけ、その後、参拝者の

身体にも振りかける。信者の間では、湯三昧で打ってもらうと身体の具合の悪い部分が良くなると信じられており、行者に患部を差し出す。

柴灯護摩は、境内に護摩壇を誂え、参拝者の祈願成就を祈禱する行事である。護摩壇の前には、杉の丸太で井桁を組み、柴木が入れてある。導師・行者は般若心経を唱えるなどのさまざまな作法をし、これに火を入れる。そして参拝者の祈願が書かれた護摩木を加持した後、火にくべる。煩惱や災厄を火によって焼き払うという行事である。

八葉寺

気高郡青谷町八葉寺
JR青谷駅よりバス十五分

戦国期から名のある山村である。岩窟が発達し、不思議な空間を生み出している。青谷町の中心地から、勝部川沿いに走る。郷土文化を伝える「かちべ伝承館」、建山神社の社叢を左に折れると、右手に子守神社の境内が見える。この谷筋が八葉寺川であり、八葉寺集落はさらに谷の奥に位置する。鳥居を入ると右側に目通り周囲六メートル、樹高四〇メートルと言われる大イチョウが控えている。神社の石段を本殿に上がる

と、さらに上に岩窟と熊野権現社の拝殿が見える。いずれも、三〇メートルの高さはあると思われる安山岩の柱状節理が生み出した洞窟に埋め込まれたように建てられている。社殿の前に立つと、夏でもひんやりと涼しく、周囲の社叢も静寂そのものである。